島根の文化財

第三集

島根の文化財

第三集

目　次

島根の先史遺跡と古墳……1頁
佐太講武貝塚……6頁
サルガ鼻洞窟住居跡……10頁
権現山洞窟住居跡……12頁
猪目洞窟遺物包含層……13頁
造山古墳……16頁
岩舟古墳……20頁
山代二子塚……22頁
山代方墳……24頁
大庭鶏塚……26頁
安部谷古墳……28頁
古天神古墳……30頁
薄井原古墳……33頁
金崎古墳群……36頁
丹花庵古墳……40頁
徳連場古墳……42頁
岩屋寺跡古墳……44頁
玉造築山古墳……46頁
今市大念寺古墳……48頁
上塩冶築山古墳……52頁
上塩冶地蔵山古墳……58頁
宝塚古墳……60頁
放れ山古墳……62頁
上島古墳……65頁
周布古墳……70頁
スクモ塚古墳……72頁
鵜の鼻古墳群……74頁
参考文献……78頁
指定遺跡分布図……79頁

凡例

一、この図録は、昭和三十七年九月末までに国および県が指定した島根県下所在の文化財のうち、貝塚、住居跡、古墳、遺物包含層およびその主な出土品を収録した。

二、図録の性質上写真に主体をおき、解説はつとめて平易簡潔を旨とした。

三、写真は本図録のため、新たに松江市井上喜弘氏に委嘱して撮影したものが大部分で、一部は、東京国立博物館、京都大学考古学研究室、大谷従二氏提供のものである。

四、解説は県文化財専門委員山本清氏、同臨時専門委員池田満雄氏、同近藤正氏、同東森市良氏が担当した。

五、表紙見返し、カバーに用いた和紙は、島根県無形文化財に指定された出雲民芸紙（保持者　安部栄四郎氏）である。

島根の先史遺跡と古墳

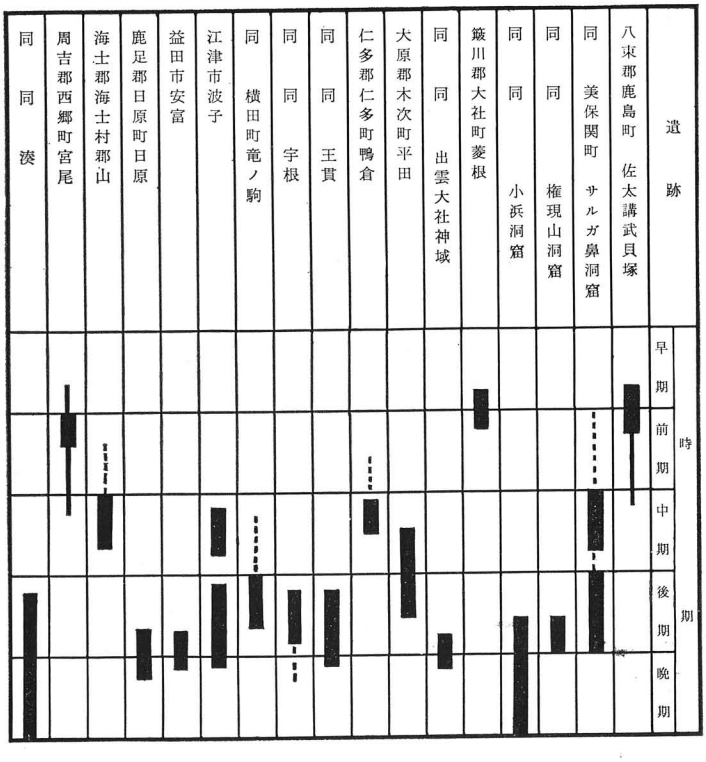
本冊に収めた島根県下の文化財は、先史時代遺跡四件、古墳二二件、計二六件である。このうち国の指定した文化財は二一件であつて収録したものの大部分を占める。それらは国家としての見地からその重要性を認めて指定したものであることは云うまでもないが、しかもこれらはおのずから県下における当代文化の様相をよく象徴するものであつて、県指定の史跡と相まつて地方文化を理解するかなめをなしている。よつて各指定文化財を中心とし先史並びに原史時代文化について略説することとする。

縄文式遺跡

近年急速に研究が開拓されつつある旧石器時代乃至中石器時代に属するいわゆる無土器文化に関する遺跡は、山陰地方ではまだ発見されていない。

島根県下で縄文式土器の発見された遺跡は、出雲、石見、隠岐にわたり三〇箇所ばかりあるが、これらのうち戦前から判明していたものは、指定史跡である佐太講武貝塚、サルガ鼻洞窟、権現山洞窟のほか僅か一～二箇所で、大部分は戦後に発見されたものである。このように戦後各地で遺跡が判明したのは、この方面に対する人々の関心がようやくきざし始めたことによるものであつて、実際にはなおおびただしい遺跡が地下に眠つていることが想像できる。それは縄文式石器だけが単独に拾得された箇所は土器の出土箇所に比しはるかに多数あることによつてもうなずける。

県下の遺跡については、組織的な発掘調査が少ないため土器の編年がやや不明確であるけれども、主な遺跡の大体の年代的位置は下表に示すようなもので



ある。すなわち数千年にわたる縄文式時代において、早期末以降、県下の各地に生活のあとが残されており、ことに海上の隠岐にも少くとも前期初頭以来本土と同様の文化が認められるのである。

これら遺跡の中で、指定史跡である佐太講武貝塚は今のところもつとも古い遺跡であり、また遺物包含層も広範囲に及び、各種の遺物も多く、県下の代表的遺跡であり、山陰には例の少ない貝塚であることも重要視されるゆえんである。美保関町森山のサルガ鼻・権現山の遺跡は洞窟遺跡であるところに特徴をもつものであり、近年判明した同じ森山の小浜洞窟とともに土器石器等のほか保存良好な各種自然遺物を出している。

県下の遺跡の分布で注意されることは、海岸部と中国山脈の脊梁地帯とに遺跡が多く発見されていることである。山間地帯に多いのは栗林の生育良好な地帯であるという見方がうなずかれ、海岸部に多いのは水産物の豊富なことによるものであつて、この時代の生活は自然物の採取を基調としたものと解されているのを裏付けているようである。このような点は今後より多くの遺跡が発見されることにより一層明瞭になるであろう。

弥生式遺跡

島根県下で弥生式土器の出土箇所は七〜八〇箇所ほどあるが、ほかに弥生式石器の拾得された箇所もそれに劣らず多い。弥生式時代は縄文式時代がすこぶる長期間にわたるのに比すればはるかに短い期間であることを考えると、弥生式時代に急速に人口の増加したことが察せられる。弥生式土器の出た遺跡も、ほとんど戦後判明したものであり、やはり未発見の遺跡がおびただしく眠っていることは人の想像以上であろう。種々の点から推測すると、弥生式時代末期にもなると、県下の至るところに集落が形成されていたことが察せられる。

しかし、土器形式の判明している遺跡についてその分布を見ると、時期によつて差のあることが考えられる。すなわち前期の遺跡は次のように、海岸や海岸に近い低標高地帯に限られていることが注意される。

八束郡美保関町森山小浜洞窟
同　同　稲積
同　鹿島町　佐太前
同　同　古浦砂丘
松江市法吉町
同　春日町
同　西川津町タテチョウ
同　同　（県道沿い）
出雲市矢野町矢野貝塚
平田市猪目（いのめ）洞窟
簸川郡大社町原山
同　多伎村矢谷
大田市長久町法尺橋附近
邇摩郡仁摩町仁万
益田市木部
同　安富
周吉郡西郷町湊

中期前半にもなると仁多郡横田町亀嵩（かめだけ）などのような山間地帯にも遺跡が認められる。

弥生式文化は外来文化の強い影響の下に生まれたものであり、初期から農耕を生活の基調としたところに重要な特徴があるものとされており、遺跡分布は

県下における農業集落発展の状態を物語るものといえる。しかし美保関町小浜洞窟や平田市猪目洞窟などの例は弥生式時代、ことにその初期には、まだ自然物採取が生活上大きな比重を占めたことを示すようである。

弥生式時代の遺物のうち、やや注意すべきものを挙げると、

邑智郡石見町中野出土銅鐸　二

那賀郡国府町上府出土銅鐸　二

簸川郡大社町命主神社出土銅戈一及び硬玉製勾玉　一

同　同　原山出土磨製石剣　一

などがあり、また仁多郡横田町八幡宮境内出土と伝える同社蔵の長大な細形銅剣、松江市竹矢町国分寺附近出土と伝える同地平浜八幡宮蔵の典型的細形銅剣なども注意すべきものである。

さて以上のような県下弥生式遺跡の中で、指定史跡としては平田市猪目の洞窟遺跡一箇所がある。この遺跡は弥生式前期以降古墳時代後期にわたる生活と埋葬と両者に関する遺跡と考えられる。弥生式後期の土器とともに埋葬されていた人骨の腕に着装された貝輪は、典型的な弥生式の立派な品である。各種の植物質の遺物が良好な保存状態で遺存したことは稀な例であり、古墳時代後期の籾がそのままの姿で保たれていたことなどはとくに珍らしいものである。

県下の弥生時代の埋葬遺跡として注意されるものに八束郡鹿島町古浦の砂丘遺跡がある。この遺跡は、上層は古墳時代からおよそ奈良時代ごろにわたる住居関係の遺跡と思われるが、下層には弥生式前期乃至中期の埋葬があり、腕に貝輪をつけたものなど多数の屈葬並びに伸展葬人骨が遺存し、全国的にも当代埋葬遺跡の著しい例である。

古　墳

古墳は県下にあまねく分布し、その密度は調査の精粗とも関連しさまざまであるが、主要な古墳は農業生産力の高い地帯に集中している。

昭和二五年日本考古学協会のために作製された古墳基本カードでは、確認された古墳所在箇所、現存四八六、消滅したもの九六で、その中に含まれる古墳概数一三六五であつたが、島根県では後期古墳は横穴の形式をとつていることが多いので、古墳の実数は右とは比較にならぬ程多数と思われる。その後の十余年の間にさらに多くの古墳が検出され、分布の大勢から推すと旧町村程度の広さの地域内に古墳のない所はほとんどあるまいと思われる。

これら古墳の大多数は後期様相のものであり、中期様相のものこれにつぎ、前期様相のものは極めて稀である。古い古墳、大規模の古墳乃至優秀な遺物を出した古墳といつた顕著な古墳の分布するのは、大体においてまとまつた広い水田をもつ地帯に限られている。出雲でいえば安来市・松江市・出雲市乃至その近傍がこのような主要古墳地帯である。石見では顕著な古墳は出雲に比し段違いに僅少であるのは、地形に基づく生産力の相違を如実に示すものといえるがやはり浜田市周布川下流域と益田市が石見としての主要古墳地帯をなしている。そして浜田市周布古墳、益田市スクモ塚の二つの指定史跡は、それぞれ中期様相の前方後円墳で、石見の代表的大形古墳である。隠岐には大きな古墳はほとんどないが、それでも長さ五〇メートルの前方後円墳（西郷町平神社古墳）があり、やはり隠岐としては水田の多い西郷町・五箇村・海士村などに比較的古い様相の古墳や、やや大きい古墳が見られる。

県下における古墳文化はどのように始まりどう展開したか。日本の古墳は、まず畿内地方において、はじめから相当大きな前方後円墳としてあらわれたも

のと考えられているが、県下におけるもつとも古い様相の古墳は、

安来市荒島町造山古墳――方墳、指定史跡

同　同　大成古墳――方墳

飯石郡三刀屋町松本一号墳――前方後方墳

などがあり、前期様相のものである。これらが文字通り県下最初の古墳とはいえないが、これらから推して云えることは、この地方も畿内よりは著しく後れることなく古墳があらわれたであろうということである。その実年代を、通念化している年代観にしたがつて仮りに云うならば、四世紀中葉乃至四世紀後半には県下にも古墳があらわれたものとして大差はなかろう。古墳のあらわれることは、それに葬られたような有力豪族の存在を示すものであるが、その副葬品などから推して、その豪族の中央権力に対する従属関係をも示唆するようであり、この地方の歴史を考える上に重要な問題を含んでいる。なお古い様相の古墳として、出雲市東林木町の大寺古墳も注意すべきものである。

中期様相の古墳は数も相当増し、分布区域が広くなり、先にあげた諸方面の主要古墳地帯には大抵相当規模の古墳が見られるばかりでなく、少くとも中期後半に至るとそれ以外の各地にも小規模の古墳が数多くあらわれるようである。中期様相のおもな例をあげると、

安来市西赤江宮山古墳（安来三中敷地、消滅）前方後方墳

松江市山代町二子塚――前方後方墳、指定史跡

同　大庭町鶏塚――方墳、同

同　古曾志町丹花庵古墳――同、同

同　竹矢町岩船古墳――前方後方墳

同西川津町金崎第一号墳――同、指定史跡

八束郡玉湯町徳連場古墳――円墳、指定史跡

八束郡玉湯町玉造築山古墳――円墳、県指定

浜田市周布古墳――前方後円墳、指定史跡

益田市スクモ塚――　同　、　同

などがあり、隠岐では海士村の郡山西古墳、西郷町斉京谷古墳などあり、また簸川郡斐川村岩船山古墳などもこの部類である。

後期様相の古墳はもつとも数多く、各地にあるものの大部分がそれであるが指定史跡をあげると次のようである。

安来市飯梨町岩舟古墳

松江市山代町山代方墳

同　大草町古天神古墳（県指定）

出雲市今市町大念寺古墳

同　上塩冶町築山古墳

同　同　地蔵山古墳

同　下古志町宝塚古墳

同　古志町放れ山古墳（県指定）

平田市国富町上島古墳

指定された古墳には形式上の特徴に重要性の認められたものが多いが、その点県下、とくに出雲部の古墳にはかなり著しい地方色が見られる。すなわち㈠方墳と前方後方墳の多いこと　㈡石棺式石室の多いこと　㈢横口式石棺の多いこと　㈣横穴の多いことなどは著しい特色である。

方墳は稀なものとされ戦前に一般に知られていたのは全国で三〇余に過ぎなかつた。そうした中で松江市鶏塚などは方墳であるが故に注意され早くから学界に知られていたが、戦後県下の調査の進むにつれて多数判明し、小形のものも数えれば今では四～五〇基は検出されている。方墳には前記荒島造山古墳など

のように県下ではもつとも古い様相のもの、丹花庵古墳のような中期様相のもの、山代方墳のような後期のものと長い期間にわたつて見られるが、確実な後期のものは余りなく、中期ごろにもつとも盛行したもののようであつて、小規模な中期後半乃至後期初頭の様相の古墳も多く、当時大小を通じてこの風をなしたようである。方墳とともに前方後方墳は、松本一号墳のように前期様相のものからあるが、松江市山代の二子塚、同竹矢岩船、安来市西赤江宮山、松江市西川津金崎第一号などは概ね中期様相であり、松江市坂本薄井原（県指定）、同大草古天神（県指定）などは後期古墳であつて、ほとんど古墳時代全期間を通じて行われている。「前方後方墳」という墳丘形式があることを最初に提起したのは、松江市山代の二子塚に関する島根県史の記述であつて、その後関東で数基判明したが、甚だ稀な墳形とされていた。ところが戦後四―五年の間に出雲でこの種のものが前方後円墳と同じ位に多いことがわかつた。その後全国の各地でも前方後方墳が検出され、現今では六〇数基に及ぶといわれるが、出雲では一七基も判明しているのは他に例がない。方墳とともに前方後方墳が出雲に多いことは、古墳時代におけるこの地方の文化の特徴的な姿を示すようである。

石棺式石室は、横口式家形石棺を拡大し、それに羨道（せんどう）を附加して横穴式石室を成すもので、九州に早い著例のある横口式石棺に起源をもつものである。ことに入口の閉塞用石材の構造に福岡県浦山古墳と密接な関連のあるものが八束郡と簸川郡に三例もあり、そうした系譜が認められる。石棺式石室は他地方に余りないもので出雲地方の特色とされるが、それは単に三〇基ばかりも多数あるというだけでなく、その亜流をも含めると出雲の横穴式石室の大多数を占め、それが風靡しているところにこの地方の特徴ある文化相を示している。指定史跡である安来市岩舟古墳、県指定の古天神古墳はこの種石室の好例である。山代方墳や地蔵山古墳なども同種のものと見てもよい。

次に横口式石棺は、九州に早くからあらわれていることは前に述べたが、出雲で判明している家形棺は三〇基ばかりあり、そのうち横口のないものは僅か数基に過ぎず、これまた風靡しているところが注意される。出雲市の大念寺、築山、宝塚、地蔵山等の石棺はすべて横口式である。平田市上島古墳は横口のない家形棺の稀な例である。

次に横穴は九州、山陰、北陸、東海、関東、東北等に多く分布し、畿内にも若干あるが、山陰では島根県下とくに出雲と隠岐に多く、ことに出雲では小規模古墳の大多数を占め、古墳時代後期に風靡している。横穴もまた種々の点から九州地方で起つたものと推定され、整美入念なものが九州に多い。出雲方面のものは、全国的に見て、九州のものに酷似した入念整美なものが多く、この点でも古墳時代後期ごろ両者の密接な関係を示している。指定史跡である松江市大草町の安部谷の横穴群、八束郡玉湯町の岩屋寺跡の横穴群等は整美な横穴の好例である。

佐太講武貝塚

八束郡　鹿島町
昭和八・四・一三　史指定

縄文式時代の貝塚である。宍道湖と日本海を結ぶ佐太川の両岸にまたがる沖積地を主とする遺跡で、はじめ鵜灘貝塚の名で知られた。佐太川の両岸一〇〇メートル位の範囲の地下に貝層が遺存し、石器類は更に広い範囲に散布している。

遺物には、石器、土器、骨角器の人工遺物と貝類、獣骨、しいの実等の自然遺物とがある。石器は、石斧・石匕・石鏃・石皿・磨石等がある。石斧は一部磨製品が多く、打製石斧もある。石匕は横形のほか扁桃形無柄のものもある。石鏃は全て無茎で、三角形と逆刺式とあり、黒耀石製品が最も多い。石錘は扁平礫の両端を打欠いだものが多数あり、石皿は径三〇センチメートル程度の多孔質玄武岩や砂岩の自然石を凹めたもので、底を平に加工したものはない。

遺跡全景

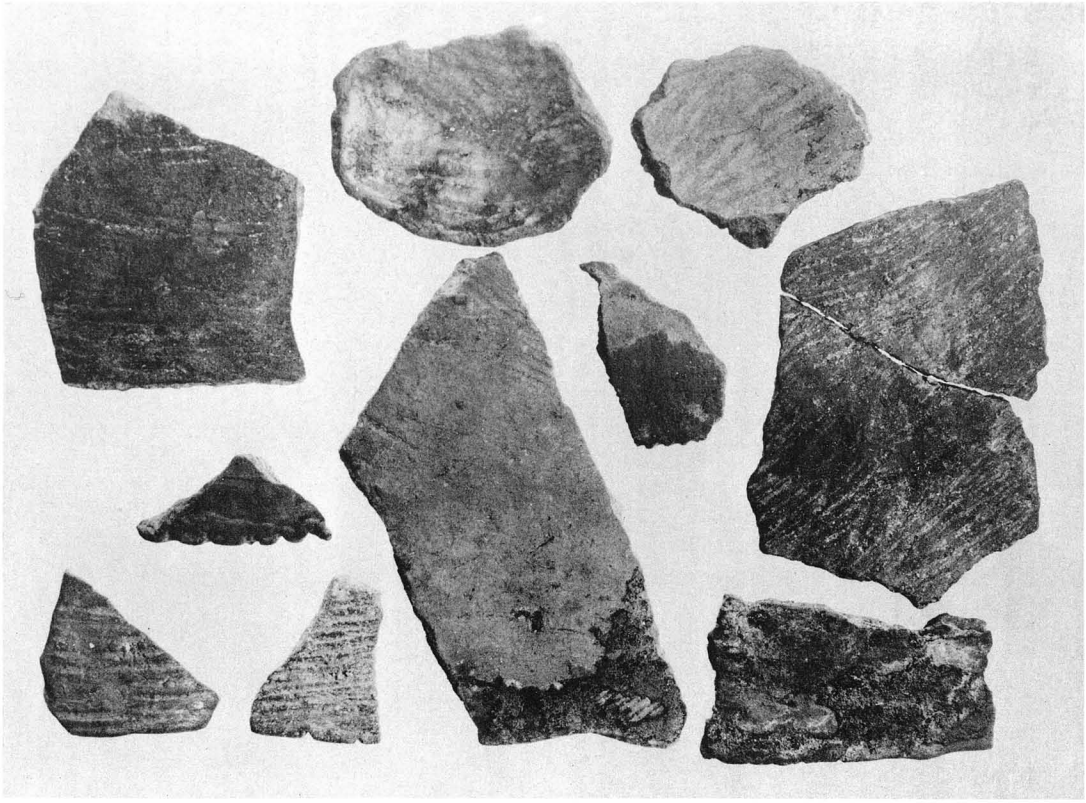
貝　層

土器は出土の層位関係は不明であるが、大別して次のようなものがある。(1)条痕文及び無文土器、(2)爪形文土器、(3)縄文地土器、(4)無節縄文土器、(5)撚糸斜格子文土器。(1)の土器はこの貝塚の土器の主体をなし、軽い波状口縁もあるが多くは平縁で、簡単な刻み目をつけたものも多い。口縁は外反気味・直立・内傾気味など多少の違いはあるが、器壁の極端に屈曲するものはない。大体単純な形の口径三〇センチメートル余りの深鉢が多く、底は全て丸底である。黒味がかった色で胎土に繊維を含むものもある。この土器は早期末乃至前期初頭に位置ずけられる。(2)の土器はわずか十数片にすぎない。土器面の状態・厚さ・焼成・色など(1)に似ており、それに続く時期のものであろう。(3)の土器は時期的にはいろいろのものが含まれ、大歳山式の特徴を持つもの、口縁を折り曲げて密着させそこに縄文を施す江津市波子遺跡の土器に類するもの等がある。(4)(5)はいずれも小片があるのみである。以上の土器からするとこの貝塚は、縄文式早期末に始まり前期を経て中期に至る幅をもつているものといえる。

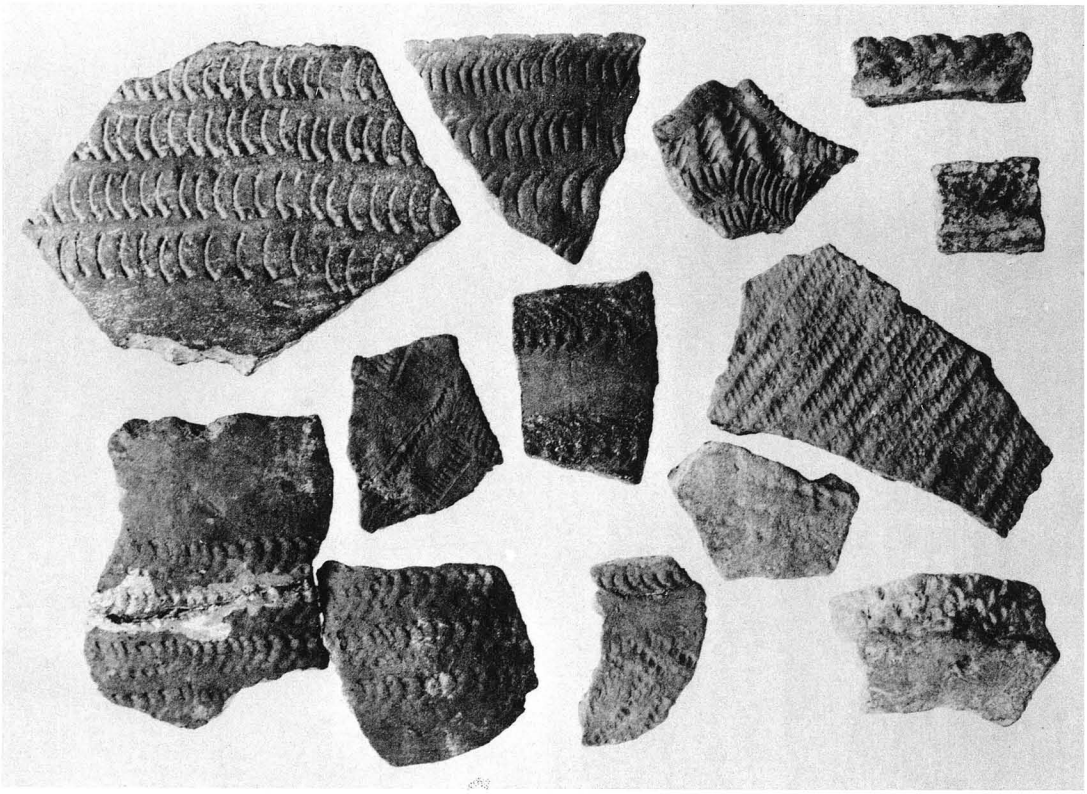
骨角器には、単純な尖頭器、牙を加工した篦状品があり、垂飾には牙玉のほか人間の前頭部の骨に双孔を穿つたものもある。

自然遺物のうち、貝類の大部分はヤマトシジミで、少量の海産巻貝類を含み、獣骨は猪と鹿が最も多く猿などもある。

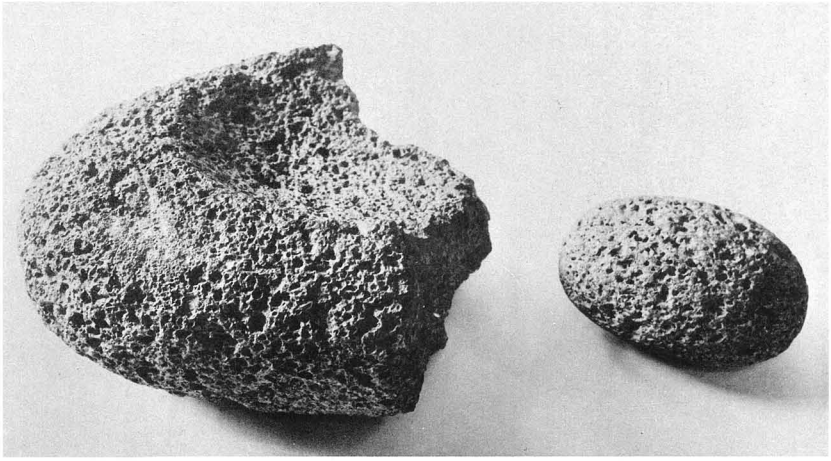
山陰には貝塚が甚だ少ないが、この遺跡は相当規模の貝塚であるため早くから広く知られ、また山陰での早い時期の遺跡で遺物も多く検出されており、県下の代表的な縄文式遺跡である。



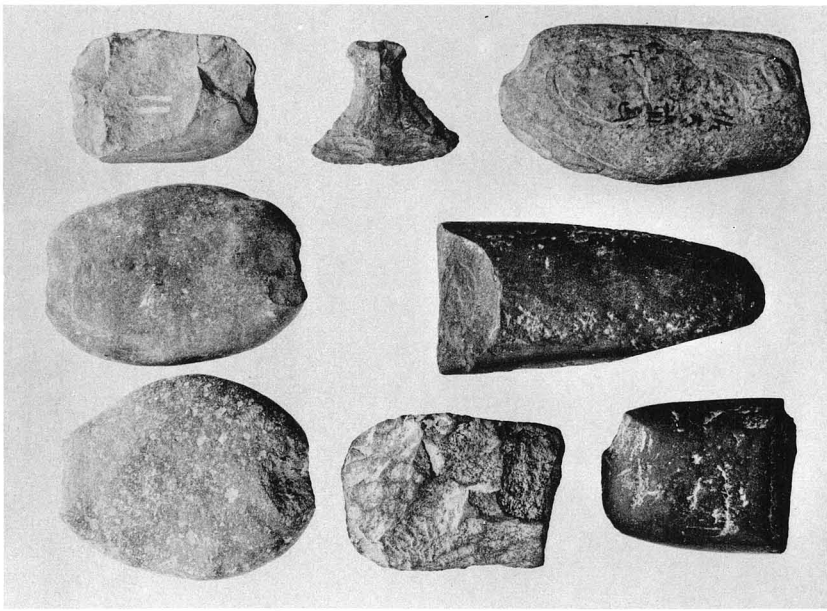
条痕文土器



爪形文・縄文地土器

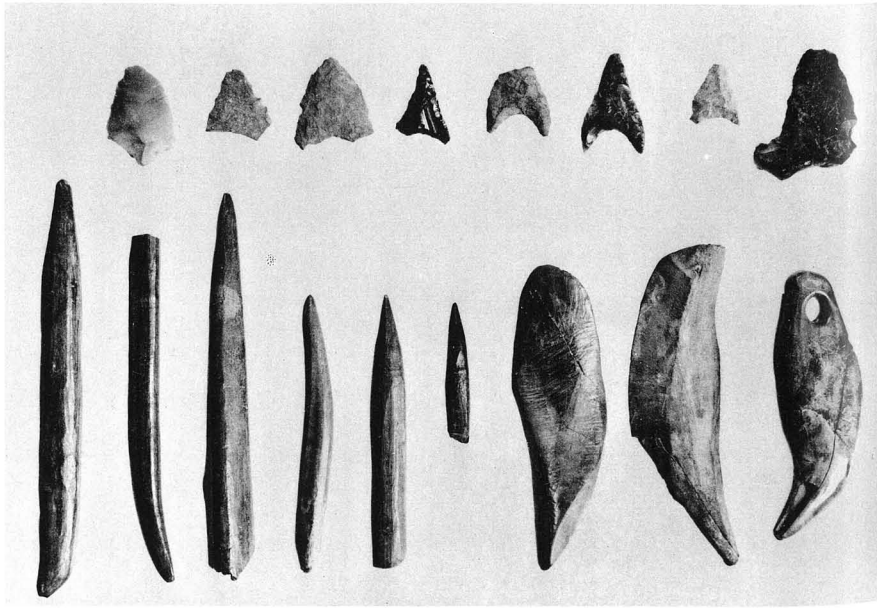


石 皿・すり石



石斧・石匕・石錘

石鏃・骨器



サルガ鼻洞窟住居跡

八束郡　美保関町
昭和一八・九・八　史指定

島根半島の南側、中江の瀬戸の西方中海に面した小岬にある海触洞窟に営まれた縄文式遺跡である。一番北の最大のものは、奥行六〇メートル、高さ四～五メートル、幅五メートルあり、これと並んで南に四つの小洞窟がある。そのうち海水の入る最南のものを除いてすべて遺物が発見されており、古代人の生活した遺跡であることは明らかである。主な遺跡は、最も大きい洞窟の前面と入口にあり、五つ以上の層をなしその上に落盤の堆積した約二メートルの包含層があつたが、戦時中軍の為に著しく削りとられた。

出土した土器は、早く知られたものは後期を主とするものであつたが中期、前期等時期的により広い巾を持つ遺跡であると考えられるようになつている。後期の土器は、縄文・磨消縄文・無文で、器形には深鉢・浅鉢・甕・注口土器があり、中には朱を塗つたものもある。

石器には、黒耀石・安山岩製の石鏃、異形石鏃、磨製石斧、石匕、刃器片、扁平な河原石の両端を打ち欠いだ石錘、凹石、打痕のある珪岩塊、磨研した多孔質玄武岩があり、黒耀石の石屑は夥しい。珍らしいものとして軟玉製の耳飾がある。

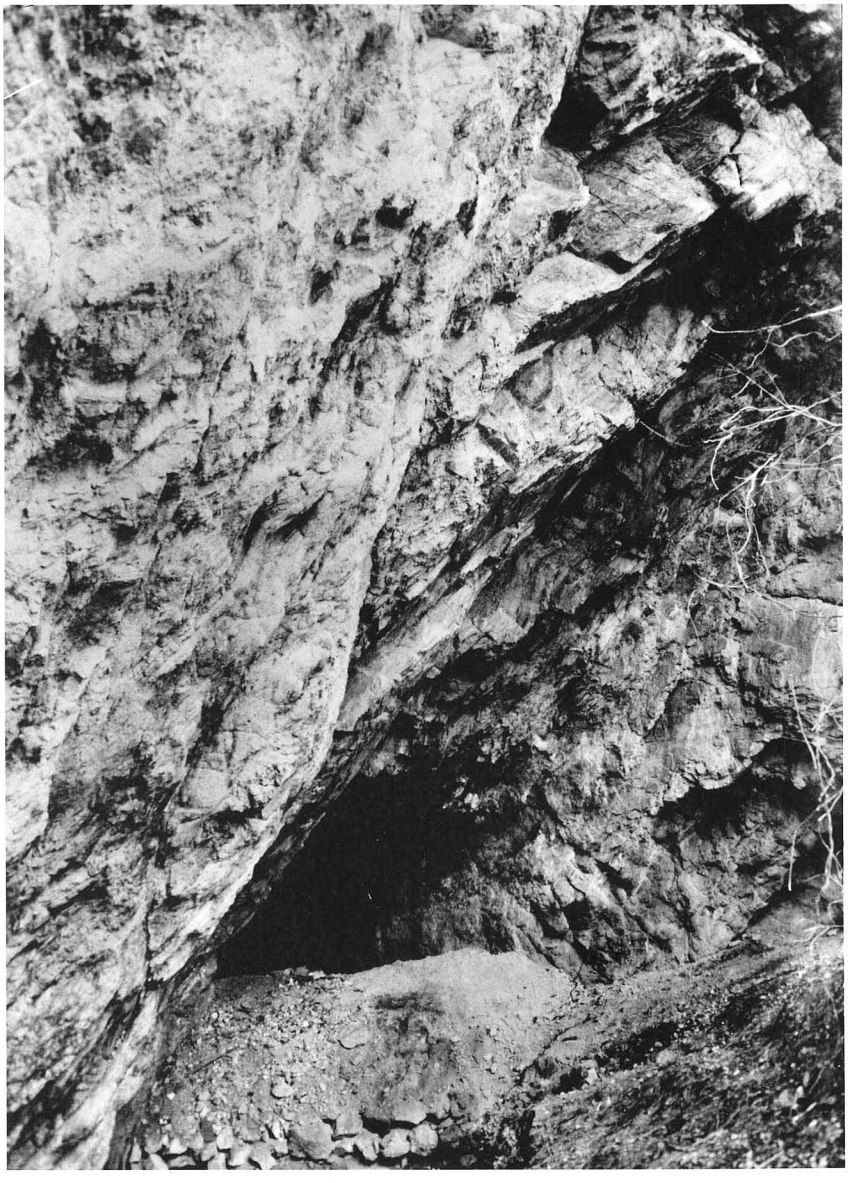
骨牙器には、長さ一〇センチメートルに近い両端を鋭く尖らせた尖頭器（骨鏃、骨銛等）や、猪の牙を加工した利器、狼の牙に穿孔したもの等がある。その他チョウセンハマグリを加工した貝輪片、匙に使用したと思われる磨いたイタヤガイが一個出土している。

尚ここで注目すべきことは第二洞窟附近に折り重つて発見された人骨であるが、出土状態から縄文式時代後期のものと考えられる。

遠　景

自然遺物には鳥獣魚骨貝類がある。鳥はなべづる・のすり・かもめ、獣骨は日本鹿・猪・猫、魚はまぐろ・まふぐ・すずき・まだい・ぼら・がざみ等。貝では、バカガイ・オオノガイ・ムラサキインコ・オキシジミ・カリガネガイ・サルボウ・イタヤガイ・ハマグリ・シオフキ・アサリ・アワビ・サザエ・スガイ・カワニナ・ツメタガイ・シジミ・マツバガイ・フジツボ・バイ・ムシロガイ・イボウミニナ・ウミニナ・テングニシ・アカニシ・レイシがある。

佐太講武貝塚とともに遺物が豊富で、日本海岸の洞窟遺跡として代表的なものである。



近　景

縄文式土器

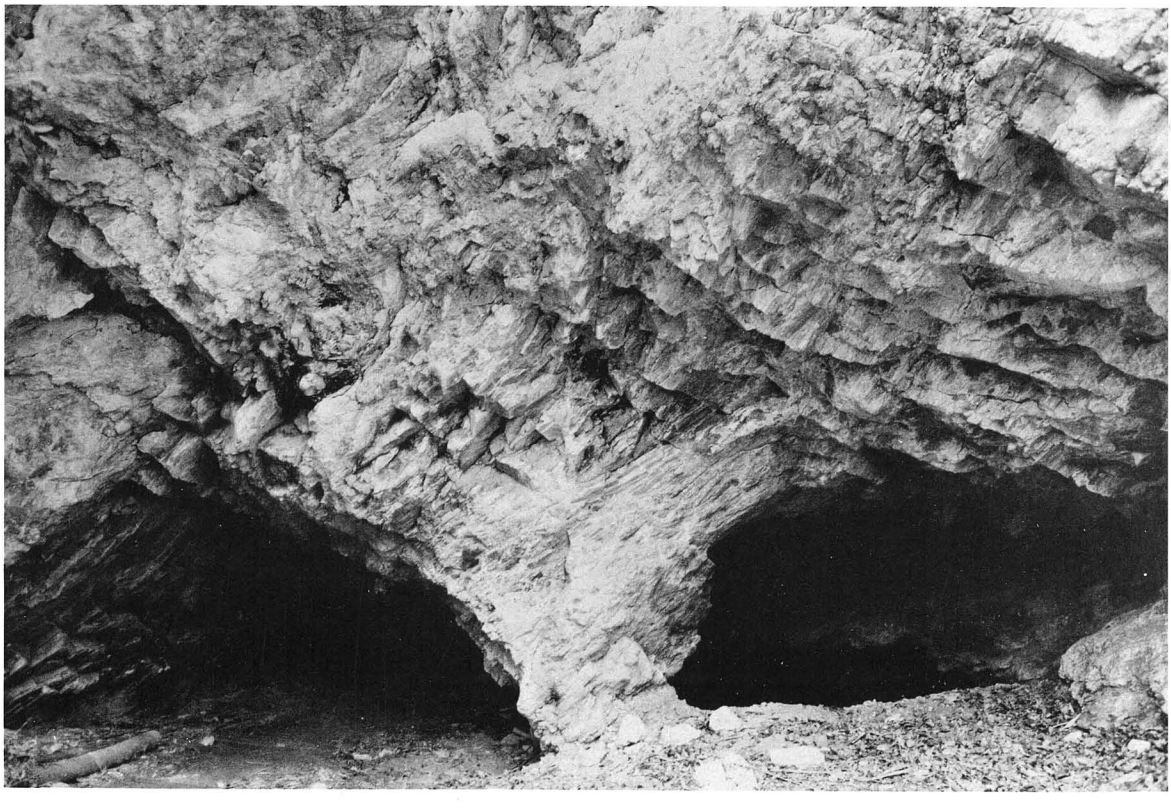
権現山洞窟住居跡

八束郡　美保関町
昭和一七・一〇・一四　史指定

サルガ鼻洞窟の北東、同じく島根半島の南側中江の瀬戸に面した縄文式遺跡である。森山部落の東はずれの小丘状をなす岩壁の南麓にあり、奥行約八メートル、巾約九メートル、高さ約二メートルの二つの小洞窟から成る。洞窟は奥部で結合しており、もともと海触によつて形成されたものであるが、現在は宅地の裏になつている。洞窟内から、縄文式後期後半の土器片、石器など若干の遺物が出土した。

サルガ鼻洞窟と並んで、県下の縄文式時代の洞窟遺跡として注目される。

近　景



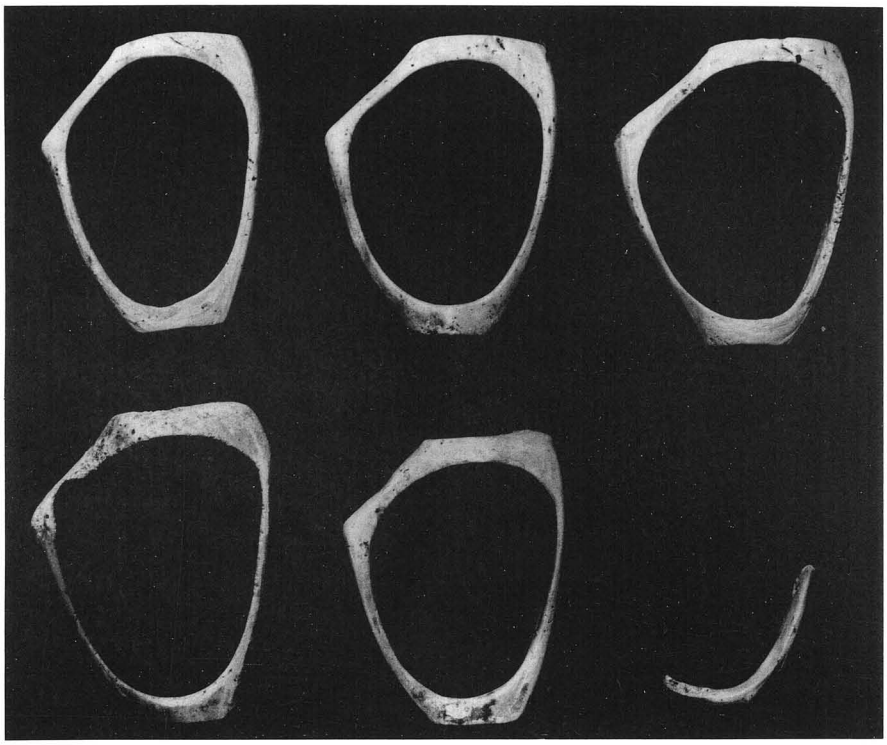
全　景（昭和23年10月撮影）

猪目洞窟遺物包含層

平田市　猪目町
昭和三二・七・二七　史指定

島根半島の北側、猪目湾の西端に海蝕大洞窟があつて、東に向かつて開口している。昭和二三年秋、同地の漁港修築工事に際して、この洞窟内から多数の人骨・遺物が出土した。現在では遺跡の形状は相当変わつているが、遺物出土当時の状況をみると、洞窟の入口は波打際より三〇メートルの所にあり、入口の幅は約三六メートル、高さは中央部約一二メートル、奥に入るにしたがつて幅と高さとを減じ、三〇メートルほど奥で低湿なせまいトンネル状となつている。洞底の岩盤は海面よりあまり高くはない。洞口付近を稜線として海抜八～九メートルの推積層があり、遺物はこの中に含まれていた。堆積層の構成物質は凝灰岩微砂・同岩の石片・石塊等が主で、洞窟の落盤および周囲から転入したものであつて、これら多くの層の中に多量の有機質その他各種遺物を含んでいた。

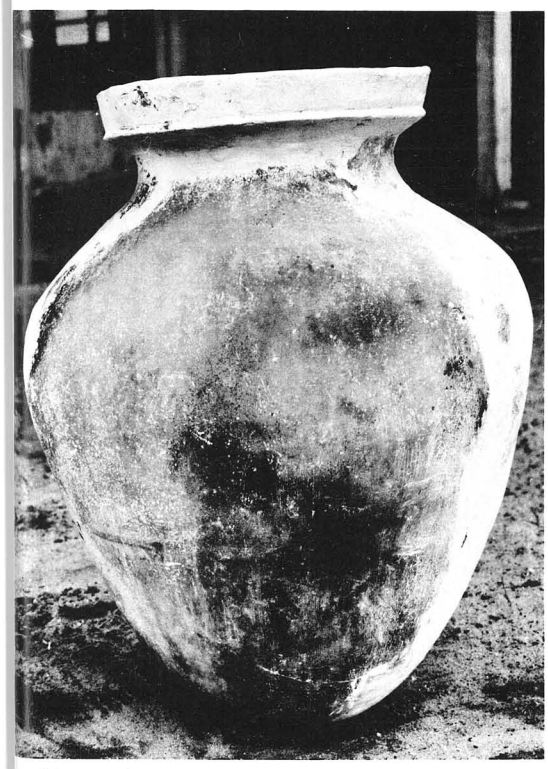
弥生式時代から古墳時代にかけての出土遺物は、その時代における生活および埋葬を物語つている。人骨は成人一二体以上・小児一体以上が認められ、屈葬と伸展葬とある。後期弥生式土器を伴つた一体は仰臥屈葬で、その右腕にニシ製貝輪六個をはめていた。また、土師器出土層の一例は、丸木舟の材を切断した三枚の板がかぶせてあり、丹彩の高坏が副葬されていた。比較的上層では、岩壁に接する位置に、たがいに足をすれちがわせて正反対の方向に伸展葬されたものがあつた。そのおのおのの頭頂に接して、それぞれ須恵器の小坩が置かれ、一方には籾が入れてあつた。



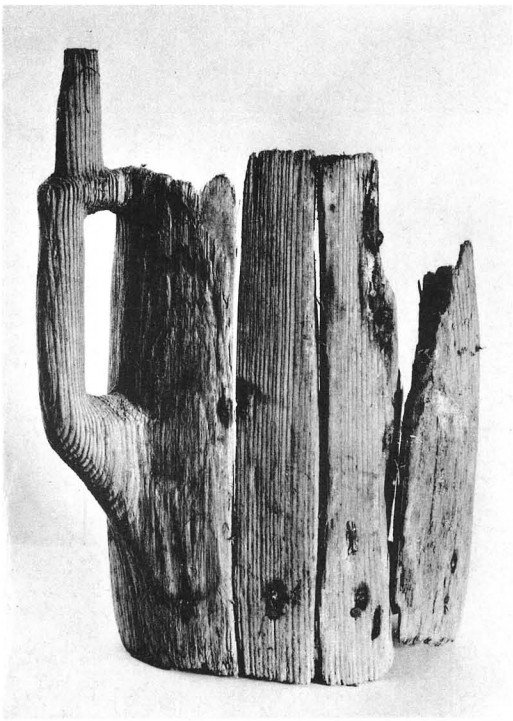
貝　輪

自然遺物としては、貝類・獣骨・魚骨・虫類・海藻・木実・稲・木片等が認められ、人工遺物としては、土器（弥生式土器・土師器・須恵器のほか、数個の縄文式土器小片も含む）・石器・貝輪・木器（短弓・盾・下駄・木太刀様品・木鋤・桶・椀・箸等）・鉄器（釘・釣針等）・骨角器・朱塊等が出土している。出土品は大社公民館に保管されている。

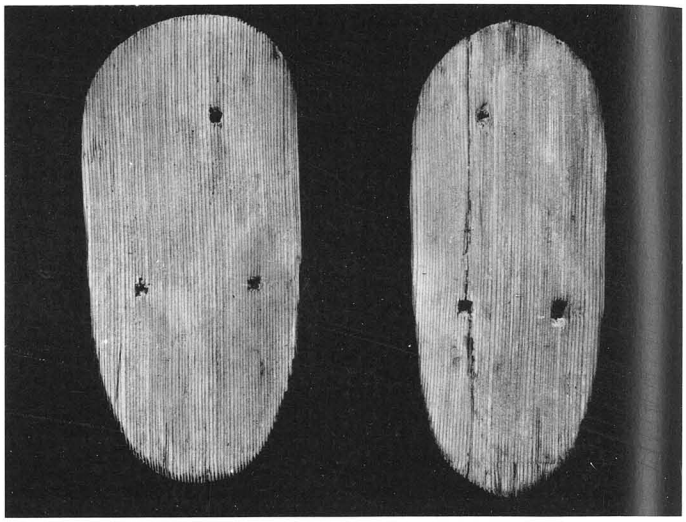
なお、この洞窟は出雲国風土記に見える出雲郡宇賀郷の北の海浜の「黄泉の穴」にあたるかもしれない。



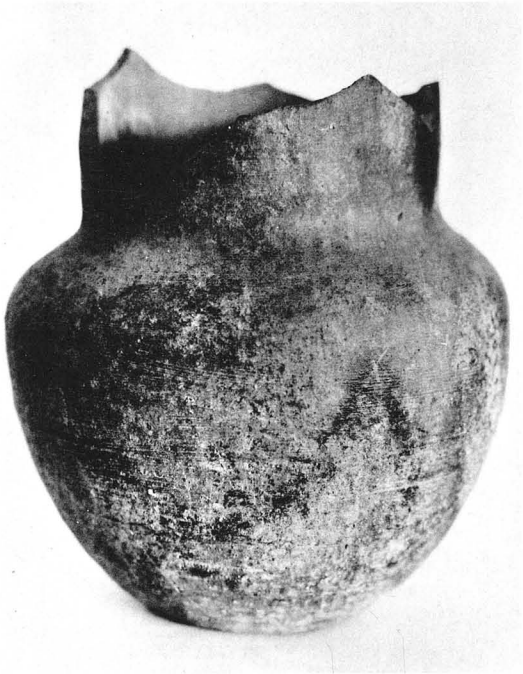
土　師　器



桶



下　駄



粉とそれを入れた須恵器

全　景

造山（つくりやま）古墳

安来市　荒島町字造山
昭和一一・一二・一六　史指定

山陰本線荒島駅の西南方約一キロの丘陵上に営まれた方墳である。すなわち、中海に向って南々西から北々東に延びる丘陵が先端近くでさらに東側に屈曲する部分の頂上に位置している。

墳丘は、丘陵の一部を切断し多少の盛り土を施したもので、その平面形はほぼ正方形を示し、北西側と東南側の対角線が南北線と一致する。規模は、墳丘上面の辺長約三〇メートル、基底の一辺は約六〇メートルである。

墳丘実測図

高さは一〇メートルをはかる。墳丘の斜面には、東南側を除く三辺の中程に二段をつくり、人頭大の葺石を置いている。また、最近東南側の葺石の間から土師器の壺が発見された。

内部構造は、墳丘の中央部に主軸を西北から東南においた二つの細長い竪穴式石室である。墳頂中央にある第一石室は長さ七メートル、幅と高さはそれぞれ一メートルほどである。石室の四壁は扁平な割石を小口積みにし、床面は粘土上に砂を敷き、周囲に小さな礫を置いている。床面の横断面はU字形を示す。また、石室の下方から東南側の墳丘斜面に向つて排水用の暗渠がつくられている。なお、この第一石室の南側に平行してやや小形の竪穴式石室（第二石室）がある。

第一石室からは三神三獣獣帯鏡一面、方格規矩鏡一面、ガラス製管玉二個、刀身残欠などが発見された。また、第二石室からは方格規矩四神鏡一面、碧玉製紡錘車一個、剣身一口分、刀身残欠、刀子一口分などが発見され、これらは、東京国立博物館に収蔵されている。なお墳丘から壺その他土師器が出土した。

この古墳は石室の形態が畿内の前期古墳と同様な古い特色をそなえ、山陰では鳥取県の橋津古墳などとともに数少ない注意すべきものであり、その副葬品も古式の様相を示すもので、県下の最も古い古墳の一つである。また全国の方墳の中でも古いものとして注意される。

第一石室内部

第一石室出土　方格規矩鏡　(直径 17.4cm)

第一石室出土　　三神三獣獣帯鏡（直径 24cm）

第二石室出土　方格規矩四神鏡（直径 19cm）

岩舟古墳

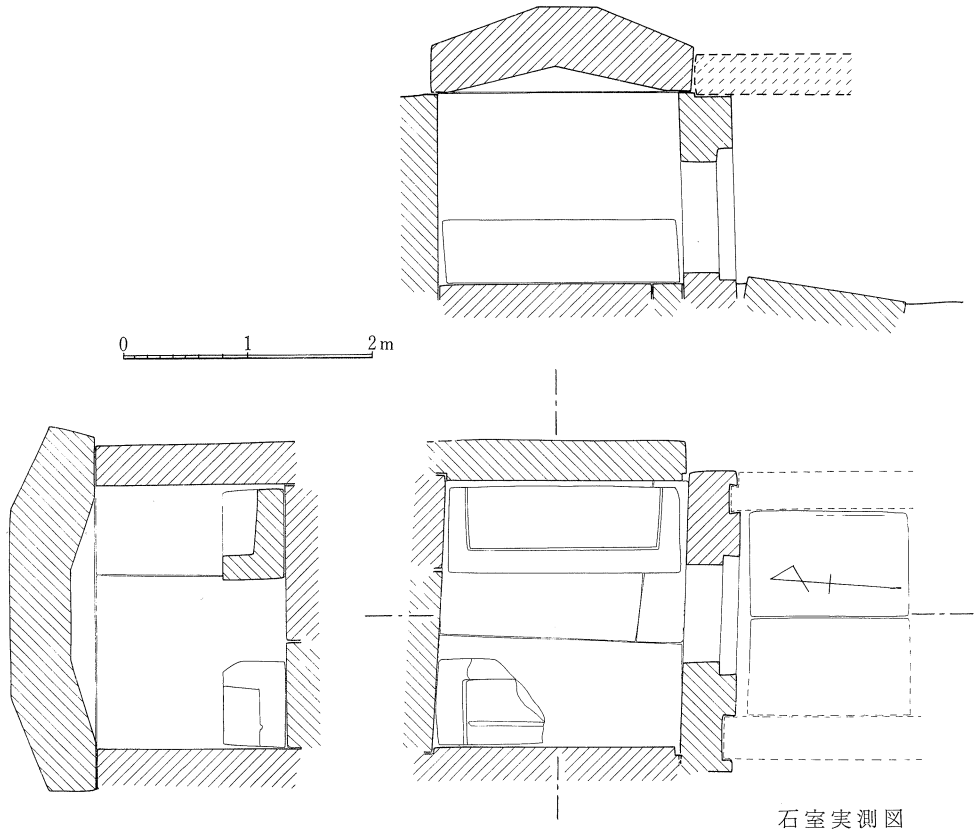
安来市　飯梨町大字岩舟字岩屋
昭和二三・一二・一八　史指定

岩舟部落背後の山丘中腹に営んだ古墳で、封土は失われて石室が露出している。もと径十余メートルの小墳であつたと思われる。

石室は前後二室からなる南向きの石棺式石室で、奥室に石棺二基を置くものである。今前室は床の敷石しか遺存しない。奥室は、奥壁を二枚、他の三壁を一枚ずつの切石で構成し、蓋石は内外とも四注式平入りの屋根形に加工し、前壁をくりぬいて方形の戸口を作り、その周囲に切りこみを施して閉塞の切石をはめる構造とする。今奥室に刳抜石棺の一つの壁を除いたような形の棺身一つと同様な残欠一つと家形の蓋石残欠一つがあるが、元は側壁に接して前壁のない家形石棺の形で置かれていたであろう。そして反対側にも同様の棺かまたは有縁石床の形で置かれていたものと思われる。

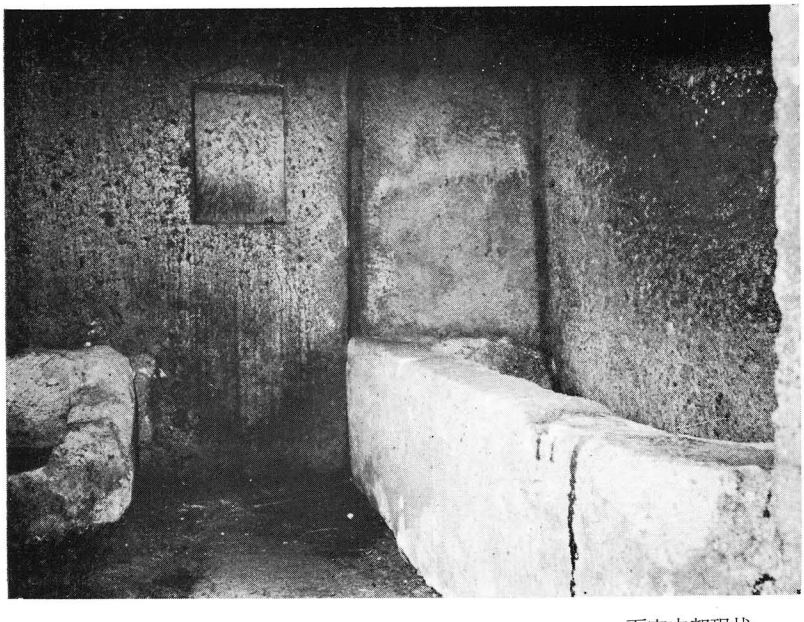
奥室は奥行き一・九メートル、幅二・一三メートル、壁高一・五二メートルあり、前室は幅一・六五メートルである。完存する石棺の身は内法で長さ約一・五メートル、幅五〇センチ、深さ約二七センチのものである。

出土品についての所伝はない。横穴式石室としては小形のものであるが、軟質の石材ながら整然と入念に加工構成されており、出雲地方の古墳文化を特色づけている石棺式石室の典型的なものである。



石室実測図

石室前面



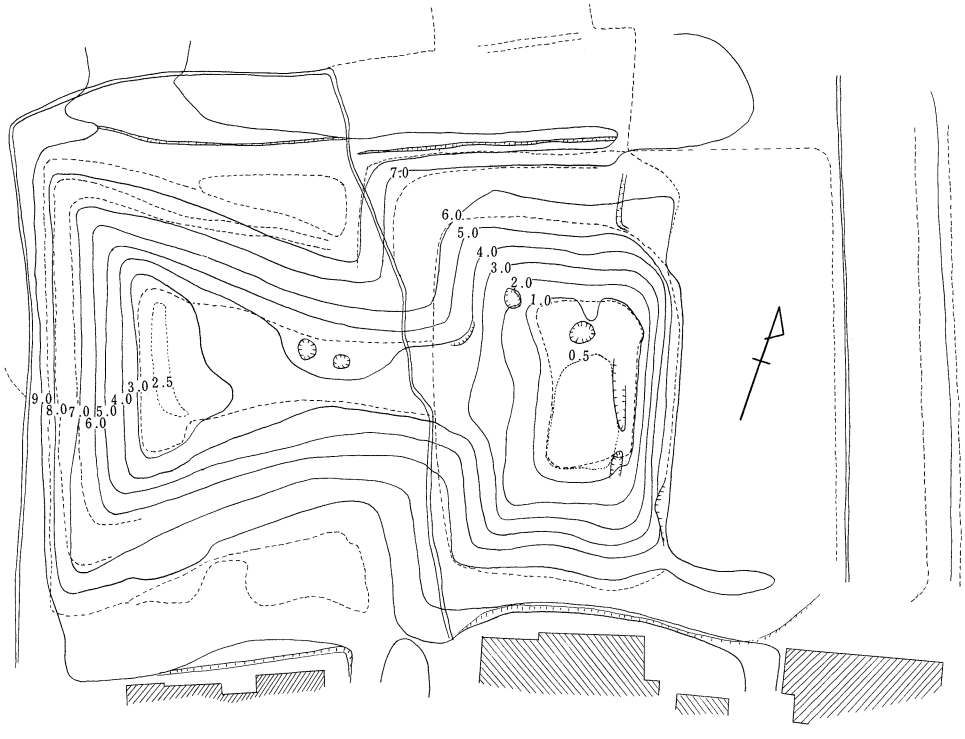
石室内部現状

山代二子塚（やましろ）

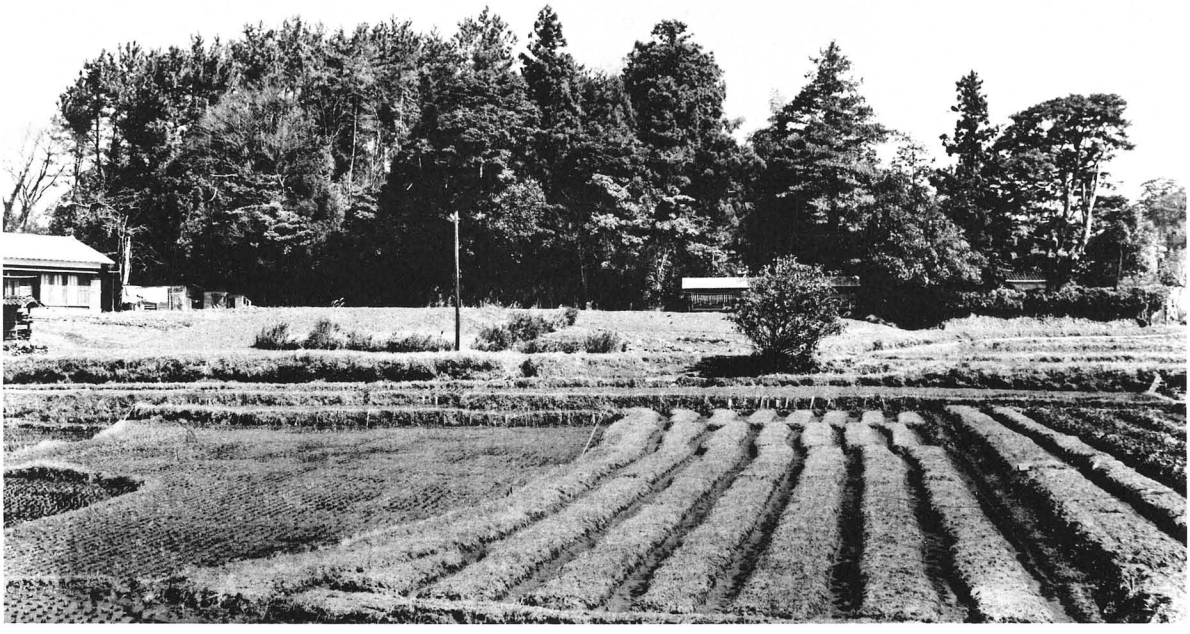
松江市　山代町
大正一三・一二・九　史指定

茶臼山西麓の低い台地上に築かれた前方後方墳で、西南方の鶏塚と相対する位置にある。この古墳は島根県史第四巻に前方後方墳として紹介された唯一のものであるが、後方部の後側はかつて射撃場を作つた際に半分近くも削り取られている。しかし、墳丘下際の一部とこれに続く湟の痕跡をとどめているので、その原形を知ることが出来る。後方部の側方にも湟がめぐらされていたことは北側にその形跡のあることから明らかであるが、前方部については不明である。墳丘は二段に築成され、長さ九〇メートル、前方部幅五〇メートル、高さ六・五メートル、後方部幅五四・五メートル、高さ九メートルある。埴輪の位置は調査されていないが、その散布状態からすると、後方部上面にも用いられていたことが考えられる。主体構造及び遺物は、これ迄に発見されたものはないが、立地、墳形から中期の古墳と考えられる。

島根県下の前方後方墳のうちでは、形の整つた代表的なもので、大きさの上では最大の古墳である。



墳丘実測図



全　景

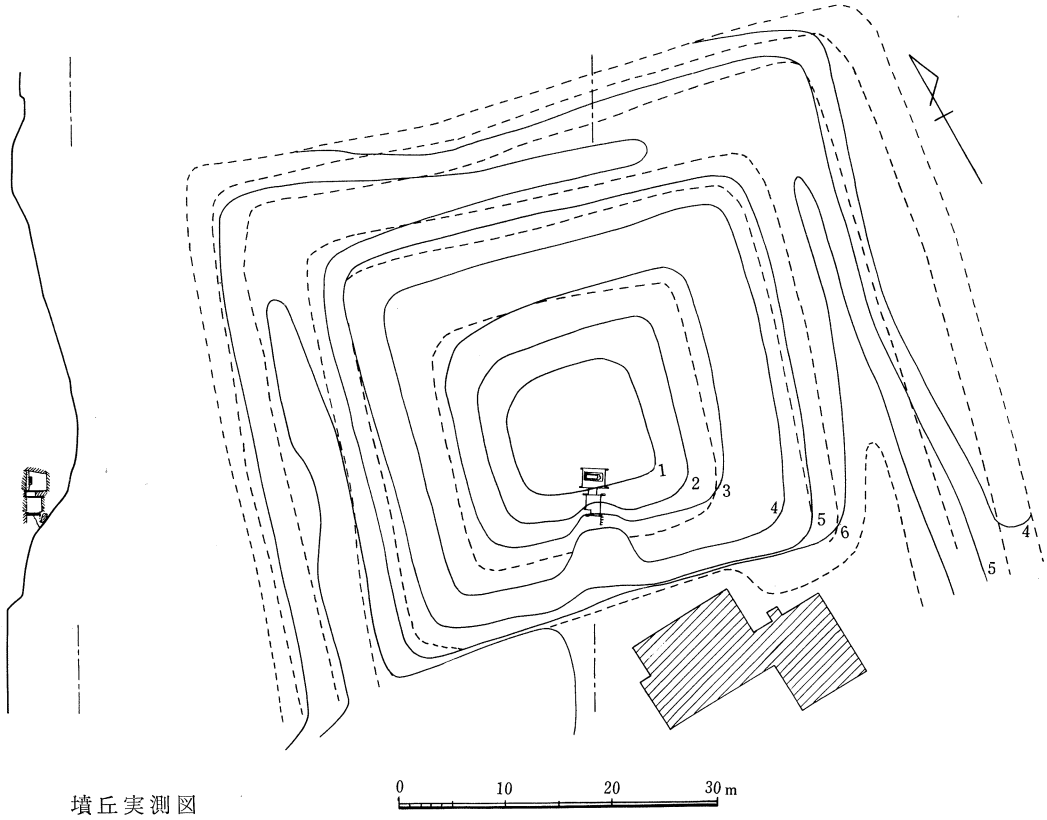
山代方墳

松江市　山代町
昭和一六・八・一　史指定

山代二子塚の北方の低い台地上に築かれた方墳で、一辺四五メートル、高さ七メートルあり、二段に築成されている。周囲に幅六メートルの湟の跡があり、湟の外の土塁を加えると一辺約七〇メートルある。現在北、東、西側の土塁は現存しているが、南側は宅地となりその痕跡をとどめていない。埴輪は検出されていない。

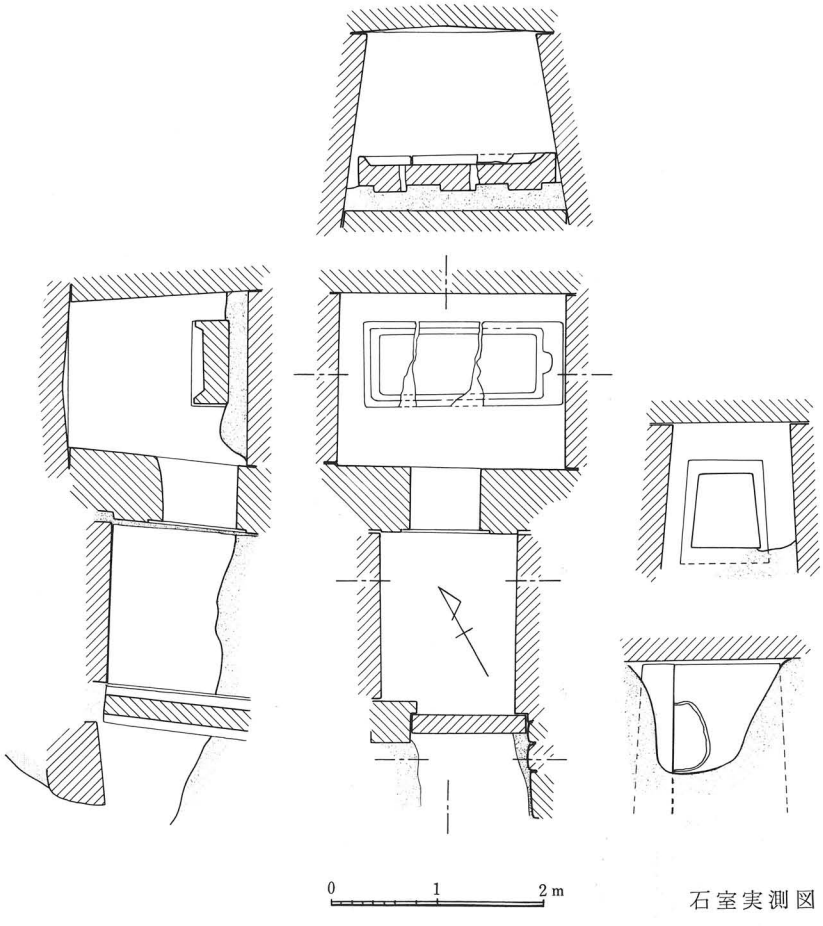
墳丘中央部に南に開口する横穴式石室がある。石室は前奥二室よりなり、前室・奥室ともに四壁・天井をおのおの一枚の切石で構成した整つたものである。前室の奥行一・七メートル、幅一・三メートル、高さ約一・三メートル、奥室の奥行一・六五メートル、幅二・一五メートル、高さ一・七五メートルあり、前室・奥室それぞれ一枚の切石で閉塞するものである。奥室内に、枕形を刻み縁を高くし低い三脚をつけた、長さ一・九メートル、幅約〇・八メートルの石床が、破壊残存している。

この石室の様式は、この地方に多く分布する石棺式石室（例えば古天神古墳）や、地蔵山古墳などと近いものであつて、熊本県菊水町の穴観音古墳などとも多くの共通点を持つものである。

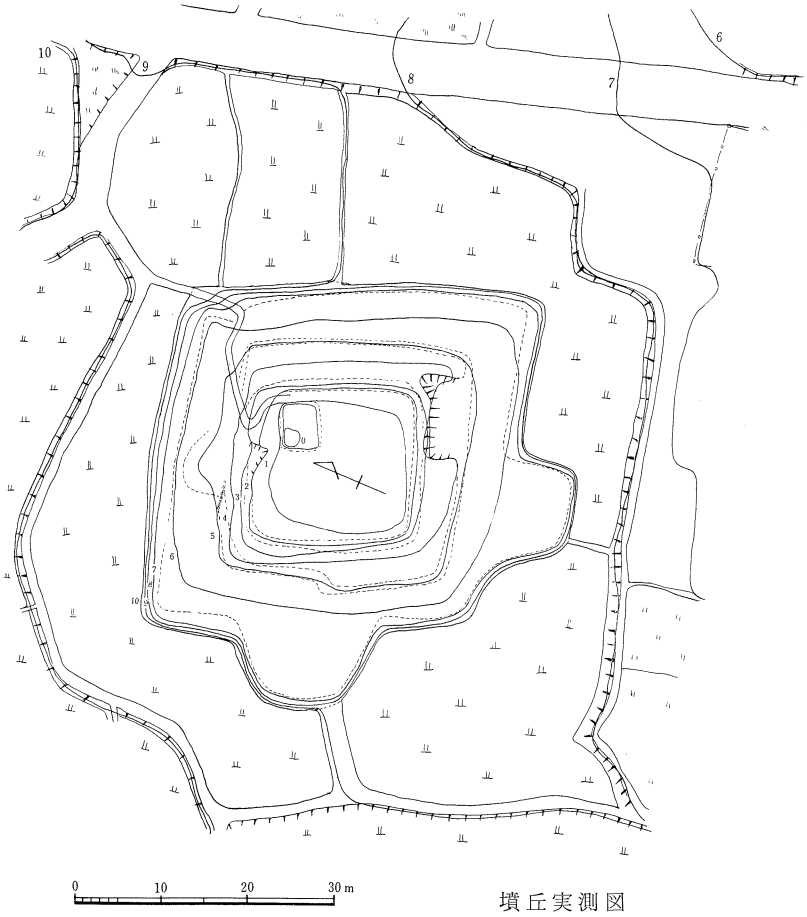


墳丘実測図

全　景



石室実測図



墳丘実測図

大庭鶏塚

松江市　大庭町

大正一三・一二・九　史指定

茶臼山西麓の平地に築かれた方墳である。北方にのびる低い台地の尖端部を切断して基盤とし、その上に方形二段の墳丘を造っている。規模は一辺四〇メートル、高さ約八メートルで、一段目の高さ二メートル、二段目の一辺二六メートル、高さ五メートルあり、西と南にそれぞれ長さ八メートル、幅一六メートル、長さ八メートル、幅一二メートルの突出部がある。現在墳丘頂上東北隅に四×五メートル、高さ二〇センチメートル（最高所七〇センチメートル）の高い部分がある。これは開墾前の墳丘表面をとどめているものと考えられる。南側に幅一二メートルの湟の痕跡が認められ、墳丘上には埴輪円筒片が散在している。立地及びその形状から中期の古墳とみられている。

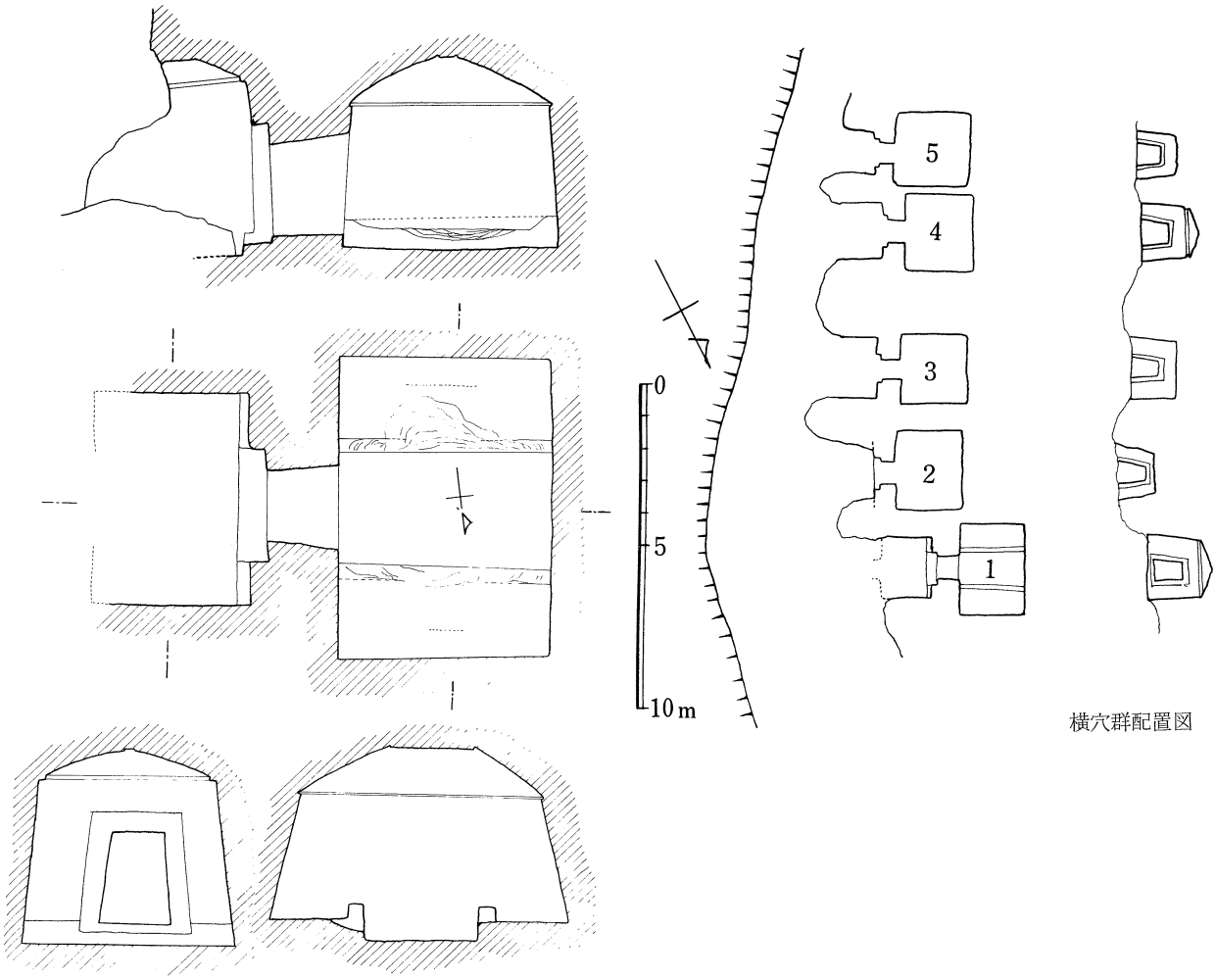
方形墳として早くから注意された古墳である。

全　景

安部谷（あべだに）古墳（横穴）

松江市　大草町
昭和九・五・一　史指定

意宇川の南岸のなだらかな丘陵上には、夥しい数の各種古墳が群在している。安部谷古墳はその中の一群で、東向斜面の凝灰岩の岩肌に穿り込まれた極めて精巧な五つの横穴から成つている。谷口から奥に向つて一号～五号とし、その形状をみると、一号横穴は前・奥複室の構造を持ち、二、三号横穴は単室四号横穴は二号横穴と同じ手法で作られている。この四穴には、いずれも玄室の左右に造り付けの有縁石床状構造がある。一号横穴は最も丁寧に作られ、前室奥行約一・三メートル、幅二メートル、奥室奥行二メートル、幅二・八メートル、高さ一・三メートルある。前室は前面が崩壊していて羨門等の構造を知り難いが、前室の天井は四注式妻入家形で奥室が平入家形を呈することにより立体的な棟線の構成をなしている。この奥室の平入りと前室の妻入りの組合せは、当地方の四柱式家形横穴と同系統と解せられる石棺式石室の羨道部と玄室の構造に類似した点が多い。五号横穴は丸天井に近く室内は甚だ荒削りで、横穴を造る間に何かの理由で築造を中止した半製の姿をとどめている。このような例は、邇摩郡仁万町赤崎山横穴群、八束郡美保関町千酌岩山古墳群にもみられるもので、古墳群の築造過程を知る貴重な資料といえよう。更にこの横穴群を構成する各構穴の造りが未完の五号を除いて極めて整備され、四壁と天井の界線には突帯を施し、棟の線も浮彫りとし四隅も的確に掘穿する等極めて入念に造作されている。このような整美入念な横穴は出雲の主要古墳地帯に見られ、安部谷のほか大草町字有、佐草町荒神谷などとくにこの附近に多い。安部谷の構穴はそれらの代表的なものである。
古くから開口していて出土品は不明である。

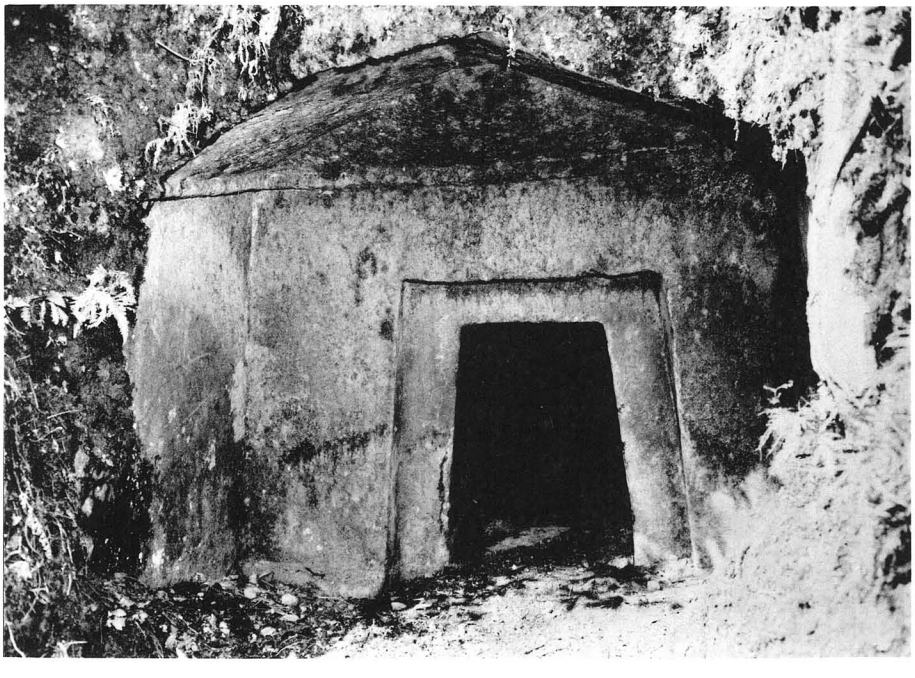


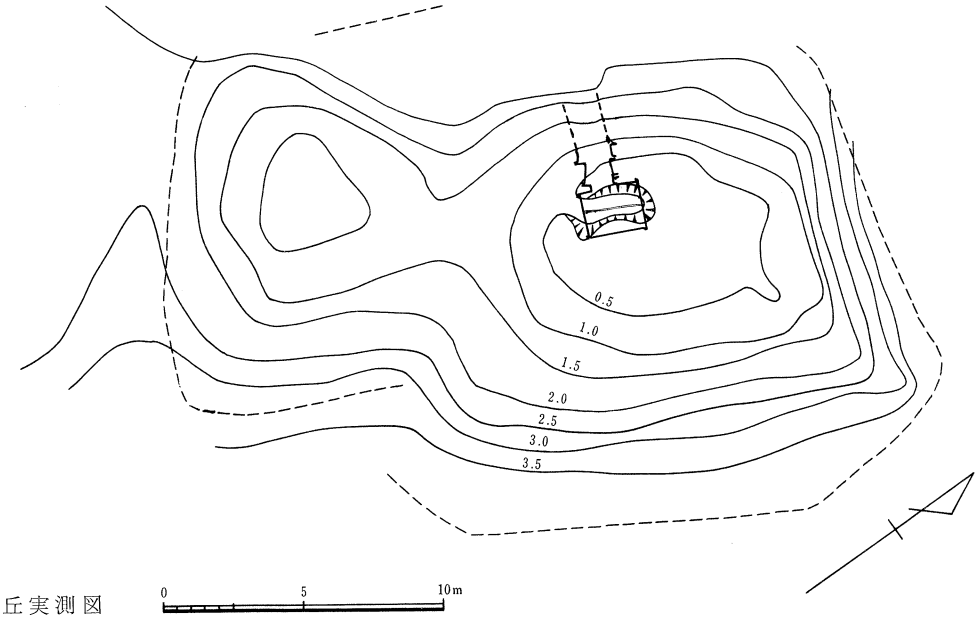
横穴群配置図

第一号穴実測図

遠　景

第一号穴前面





墳丘実測図　0　5　10m

古天神古墳

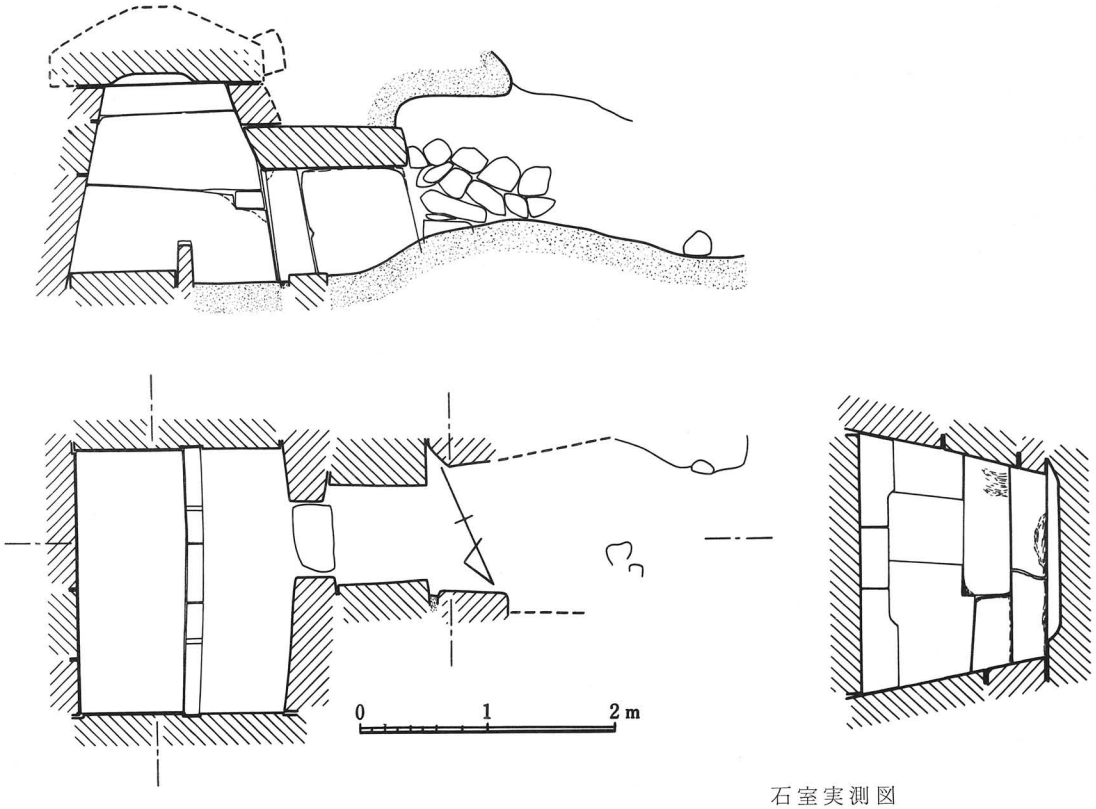
松江市　大草町

昭和三五・九・三〇　県史指定

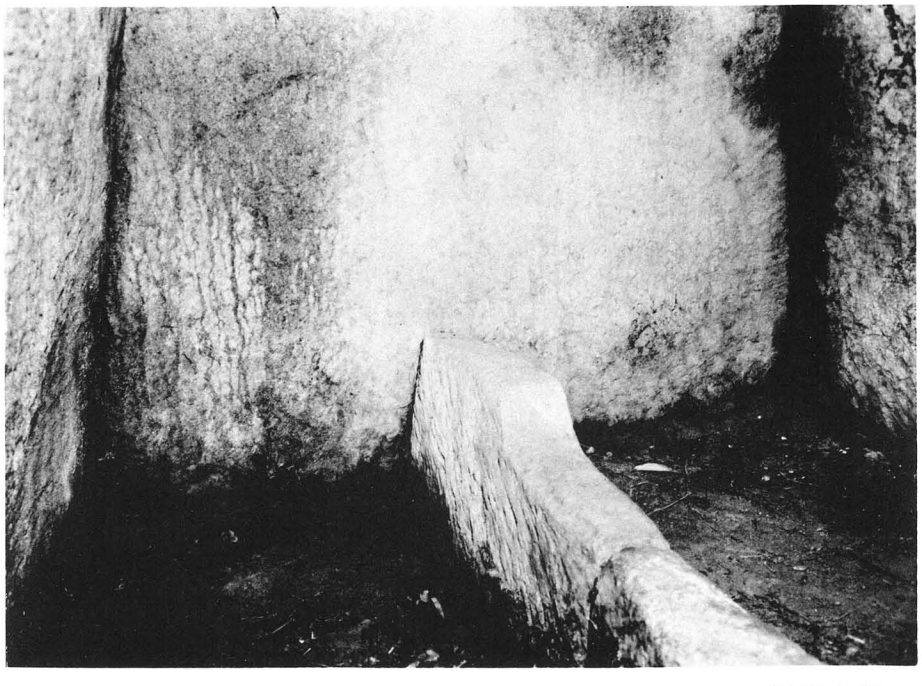
意宇川流域の水田地帯の南方につらなる山の尾根筋で、比高五〇メートルばかりの高い所にある。墳丘はややいびつな形をしているけれども、長さ約二五メートル、後方部の高さ約四メートルの小形前方後方墳であつて、埴輪も認められる。

内部構造は石棺式石室である。切石で横口のある家形石棺状の石室を作り、横口の前に羨道をつけたもので、奥壁にそうてくり形のある縁を設けた石床を置く。玄室内法は幅二メートル、長さ一・六メートル、高さ一・六メートルである。蓋石の外面は屋根形に削り突起を設けている。石棺式石室としてこの地方の他のものとくらべて特に異なる所はないが、奥壁を除く他の三壁を数個の切石を重ねて作つている点は、この種石室が大体一壁を一枚石で作るのと異なつている。

この古墳は大正五年に農夫によつて発掘されたということで、その出土品は東京国立博物館に収蔵されているが、銀装円頭大刀一・刀身・刀子・轡残片（鉄製）・雲珠残欠三（大小二種）・変形五獣鏡一・金環二・銀環三・須恵器（有蓋脚付坩一・蓋坏五・高坏一・瑞一・提瓶二）等がある。



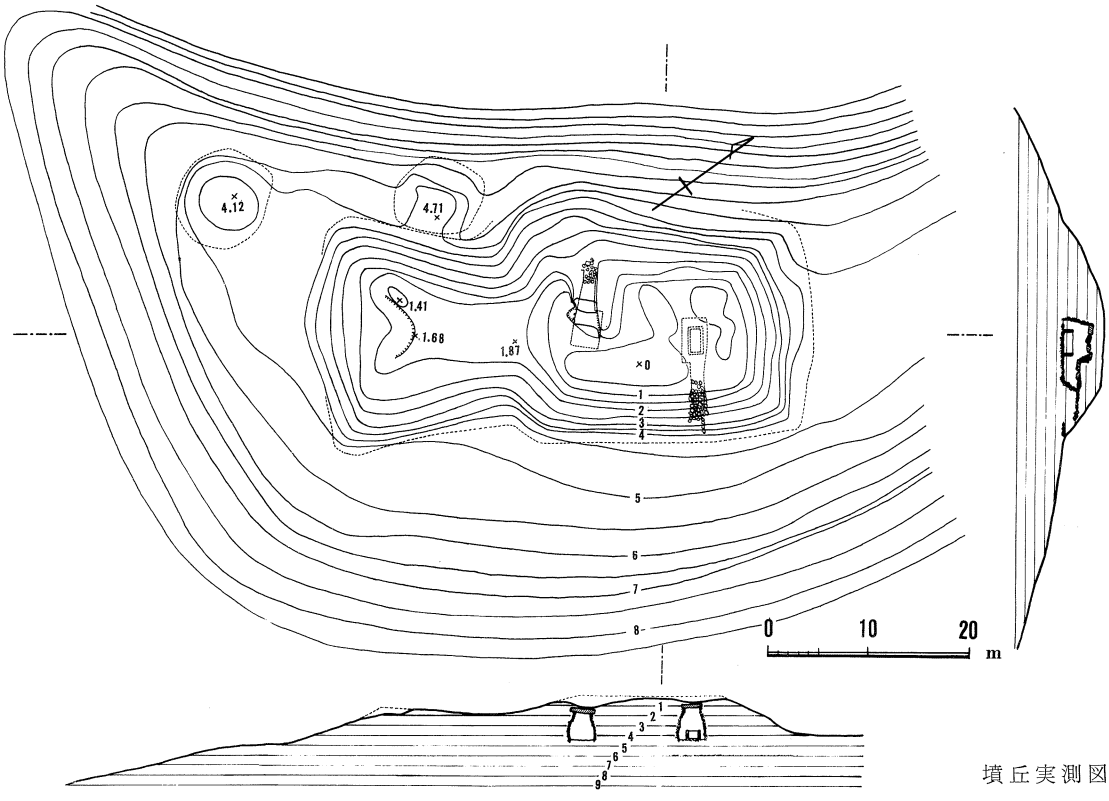
石室実測図



石室内部

古天神古墳出土変形五獣鏡（直径 13cm）

薄井原古墳第二号石室出土須恵器



墳丘実測図

薄井原古墳

松江市　坂本町薄井原
昭和三七・六・一二　県史指定

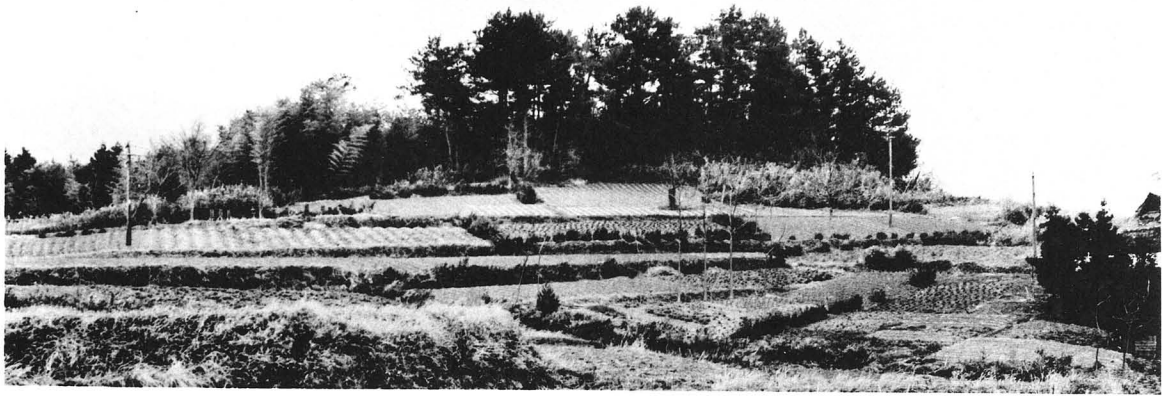
古墳は、澄水山の南麓に発達する独立丘陵の突端に位置している。標高約四〇メートル、附近の水田面との比高は約三〇メートルである。

墳丘は、前方部を西南（南―三五度―西）に向けた前方後方墳である。

なお、前方部の西側に接して一基、前方部西南隅より六メートル離れて一基の小円墳がある。いづれも径八～九メートル、高さ約一・五メートル前後である。陪塚であろうか。

主墳の全長は約五〇メートル、後方部は軸の長さ三〇メートル、幅二二メートルの長方形を示す。前方部は、くびれ部の幅一八メートル、先端はやや開いて二三メートルをはかる。高さは、後方部が四・五メートル、前方部はそれよりも約一・四メートル低い。埴輪・葺石などの外部施設は認められなかつたが、前方部上面に土師器（高坏・鉢）や須恵器（蓋坏・壷・器台）などが発見された。

内部構造は、主軸とほぼ直交して後方部の東西両側に二つの片袖形横穴式石室がある。西側のものを第一号石室、東側のものを第二号石室と仮称する。石室は、それぞれ石棺を内蔵している。



遠　景

第一号石室は、すでに発掘され、半壊の状態にある。石室の全長七・六メートル、玄室の長さ三・九メートル、奥壁の幅二・六メートル、羨道部は一・六メートル。石室の壁は、基底部に大形の自然石を置き、上部に五〇×二〇センチ内外の自然石を持ち送り式に積み上げ、天井石を置いている。その高さは、玄室で二・七メートル、羨道部は一・四メートルである。床面は、大形の扁平礫が敷かれている。また、石棺は蓋と側石の一部が羨道部に持ち出されていた。その形式は、組合せ式家形石棺であり、蓋石の幅九〇センチ、側石の高さ五〇センチで比較的小形である。

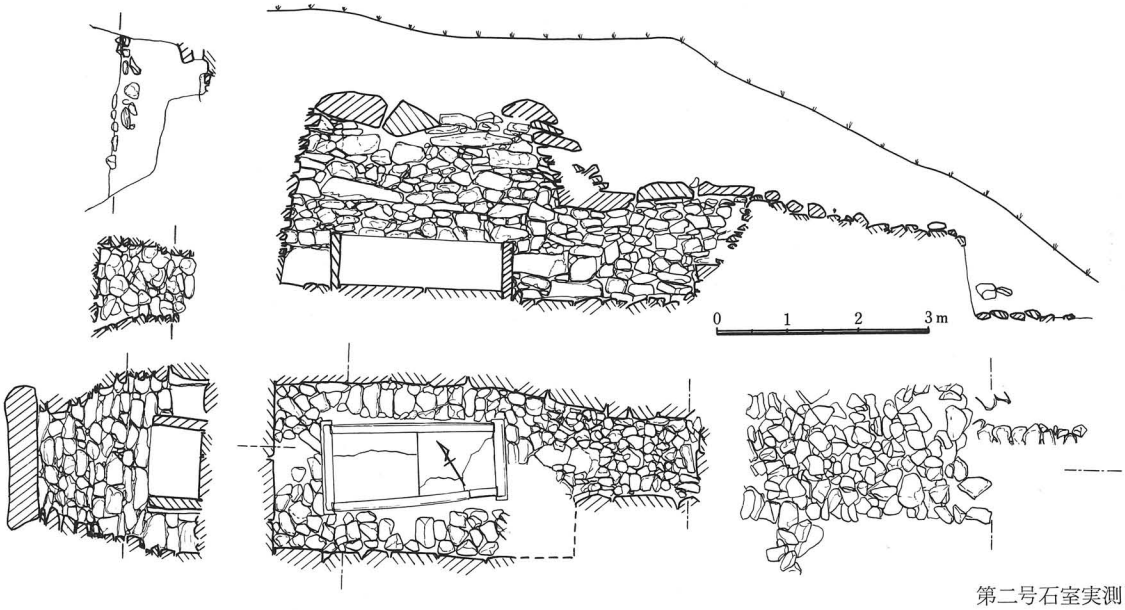
副葬品は、玄室から銅環二個、羨道部から須恵器の小壷一、坏蓋二、身三個が発見された。

第二号石室は、玄室の中央に組合式箱形石棺をそなえている。石室の全長は約八メートル、玄室の長さ四・四メートル、幅は二・三〜二・一メートル、高さは二・六メートルである。羨道部は、幅一・三メートル、高さは一・四メートルで、前方の八の字形に開く部分から閉塞石を充填している。石室の構造は、第一号石室と同様のものである。

石棺は、砂岩の切石を用いたもので、前後に刳りこみをつけた二石を立て、その両側に大小三枚の板石をはめこんでいる。床石は二枚からなり、蓋石は両側に突起のある長方形の切石を四枚並べたものである。棺の内法は、長さ二・三メートル、幅一〇〇〜八〇センチ、深さは七五センチの大形の棺である。

副葬品は、玄室の西北隅に有蓋壺、脚付壺各一個、飾り金具二個、鉄器一本があり、棺内にはガラス製小玉九個、直刀二口、刀子三口、鉄鏃二一本、鉋（やりがんな）一本があつた。

この古墳は、後方部に計画的に営まれた横穴式石室二個を有するものとして珍らしい例であり、また後期の前方後方墳の著例である。



第二号石室実測図

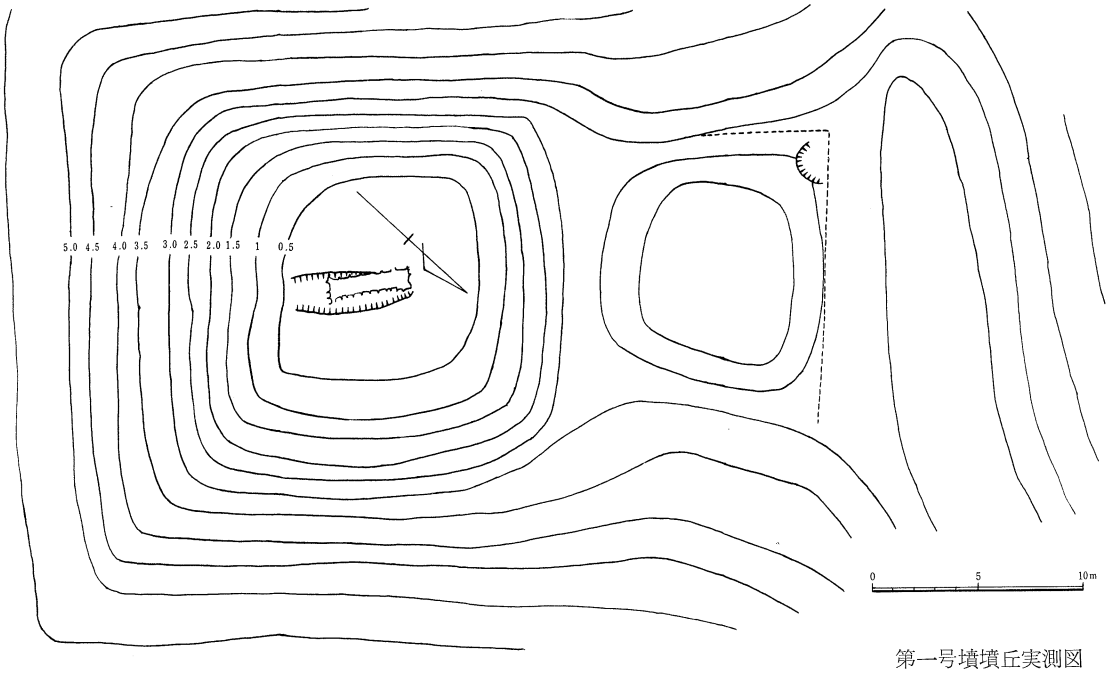
第二号石室の石棺

遠　景

金崎古墳群

松江市　西川津町金崎
昭和三二・七・二七　史指定

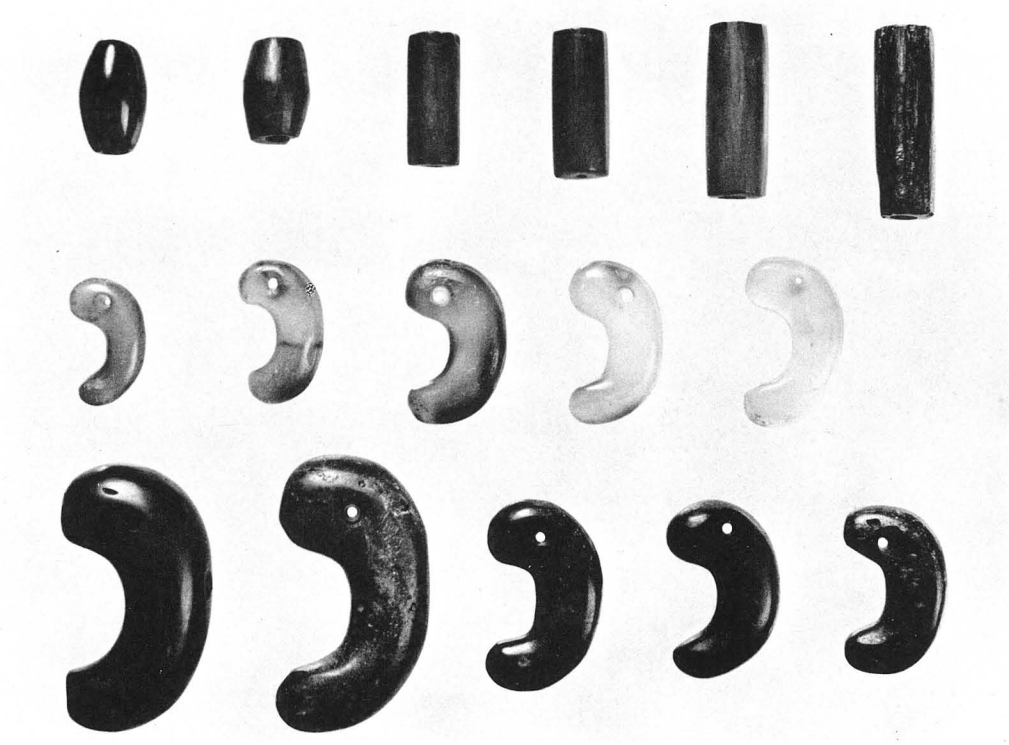
島根大学の東北方にあつて、西北から東南に向かつて走る標高約三〇メートルの低丘陵上に点在する古墳群である。丘陵のほぼ中央に第一号墳（前方後方墳）がその主軸を西北に向けて位置し、その東南方に約五メートルをへだてて第二号墳（径一六メートルの円墳）があり、さらにその西南方約八メートルに第三号墳（底辺二一―二二メートルの方墳、埴輪あり）がある。次にその東南方約八〇メートル、丘陵の東南端に第四号墳（底辺二〇×二五メートルの方墳）がある。また第一号墳の北方約一〇〇メートル、丘陵の北端に近い位置に第五号墳（全長二五メートルの前方後方墳又は方墳に方形の小さい造り出しをつけたもの）がある。



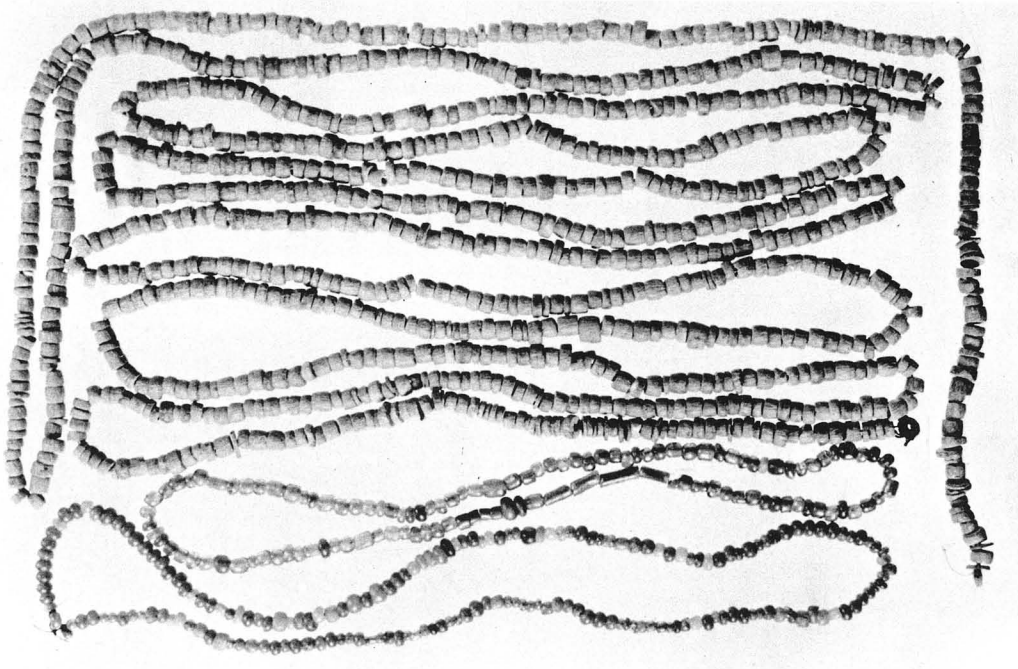
第一号墳墳丘実測図

第一号墳は昭和二二年八月、梅原末治博士が島根考古学会会員と共に発掘調査したものである。長さ約三六メートル、後方部の幅約三〇メートル、前方部の幅約一四メートル、後方部の高さ約五・五メートル、前方部の高さ約三メートルで、後方部および前方部の頂上部はそれぞれ平面をなしている。後方部上面の縁辺に埴輪円筒をめぐらした形跡があり、前方部上面には家形埴輪および人物埴輪の残片が認められた。

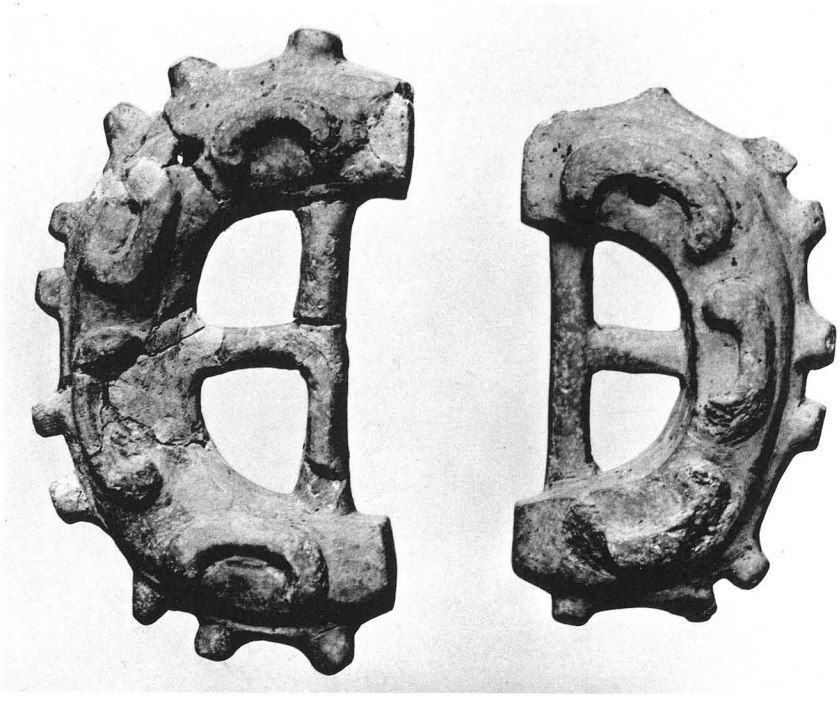
第一号墳の内部構造は、後方部中央に主軸の方向に設けた割石積みの竪穴式石室で、石室は幅約一メートル、高さ約一メートル、長さ約四メートルあつて、底面に扁平な礫を敷いている。壁石は厚さ一〇センチメートル内外の偏平なものと、二〇センチメートル内外の大形のものとが用いられ、やや粗造で半壊していた。石室内出土遺物には、仿製内行花文鏡一・勾玉（碧玉製五・メノウ製六）・管玉（碧玉製四）・なつめ玉（碧玉製二）・ガラス製小玉多数・滑石製臼玉多数・子持勾玉（滑石製二）・直刀（漆塗装一）・須恵器（瑞大二・同小二・長頸壺一・異形連管小壺一・有蓋高坏二・無蓋高坏五・器台一・脚付壺一）等がある。須恵器は最も古い式に属するものである。出土品は京都大学および島根大学に保管されている。



第一号墳出土玉類

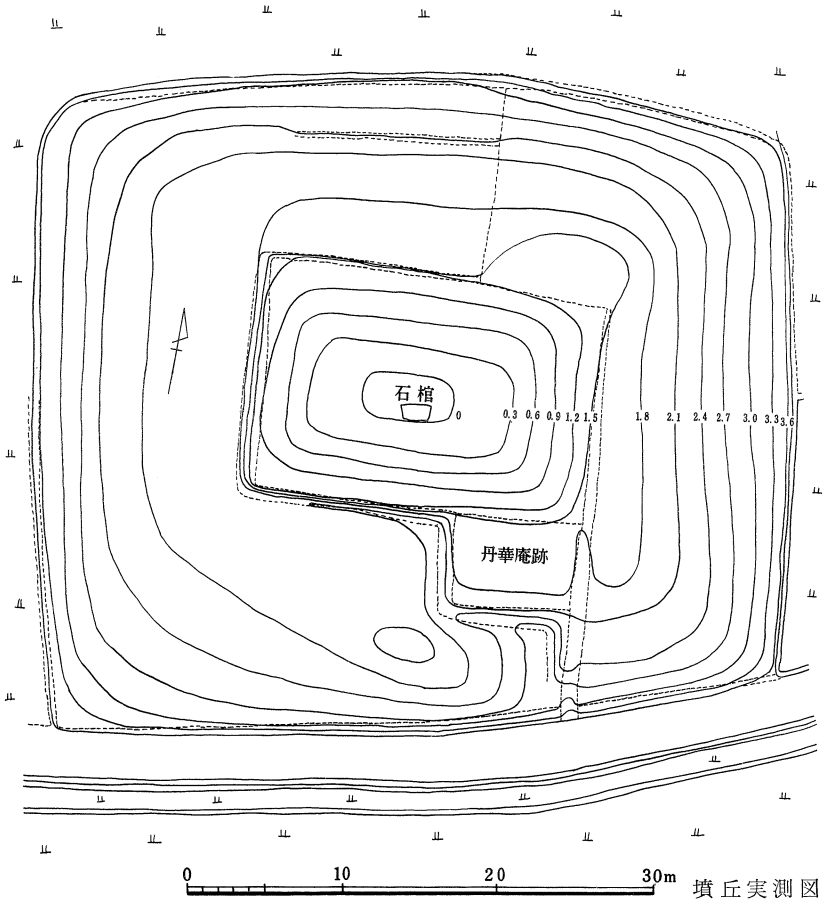


同　上



第一号墳出土子持勾玉

第一号墳出土須恵器



墳丘実測図

丹花庵古墳

松江市　古曽志町
昭和八・二・二八　史指定

北山山脈の支脈が宍道湖に向ってのびるその間に形成された沖積地に築造された古墳である。開墾されて畑地となり、墳形を損じているが、一辺四七メートル、高さ三・五メートルの方墳で、埴輪・葺石があり、二段築成の痕跡をとどめている。

墳丘の中央部に、長持形石棺を直接土中に埋めている。石棺は、現在蓋石のみが露出しているが、底石、側石、蓋石あわせて六枚からなり、底石は長さ約二・五メートル、幅約一・二メートル、厚さ二六センチメートルで、その両端に長さ八センチメートル、径二一・五センチメートルの縄懸突起を有する。この底石の上に、長さ二・五メートル、高さ五六センチメートル、幅七六センチメートルの側石をおく。蓋石は、内外両面かまぼこ形をなし、中央部の長さ二・〇八メートル、幅一・二メートル、厚さ二五センチメートルある。この蓋石には縦方向の突帯と斜格子文とを組み合わせた装飾彫刻が施されている。文様は、中央縦方向に幅二十センチメートルの無文帯があり、その両側にこれと平行し二〇センチメートルの間隔をおいて左右それぞれ対称に幅七センチメートルの突帯がある。その突帯を中心として平均二五センチメートル間隔の斜格子文が沈線で施されている。島根県史によると、かつてこの蓋を取った際、石棺内には土砂が流入しており、その中から剣の折片・土器片を発見したということである。

装飾文をもつ石棺を有する古墳として注目される。

全　景

石　棺

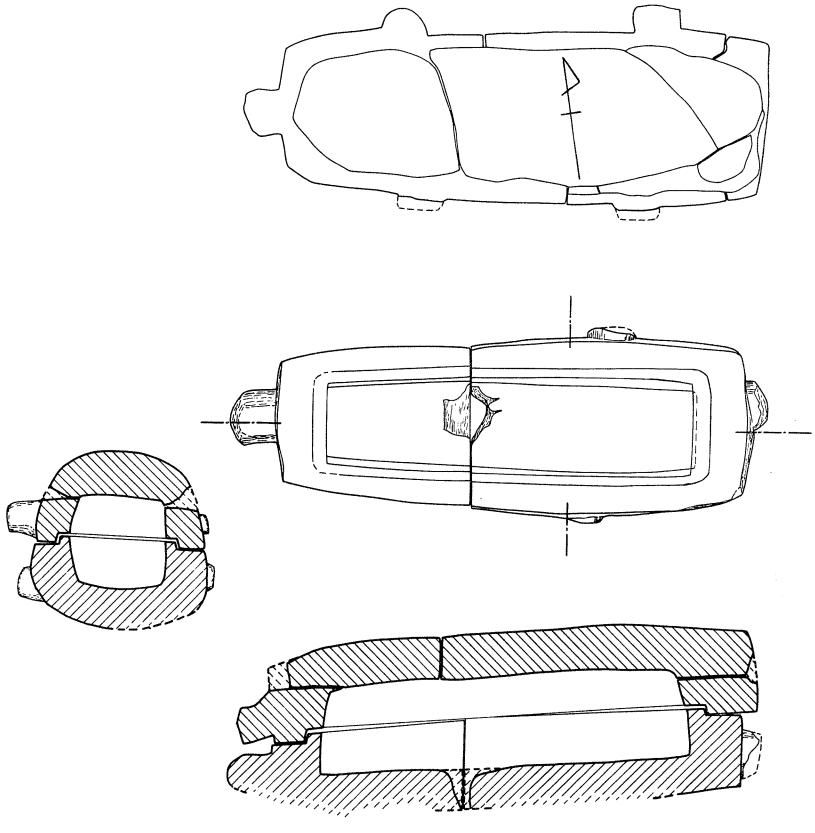
徳連場古墳

八東郡　玉湯町大字玉造字徳連場
昭和八・二・二八　史指定

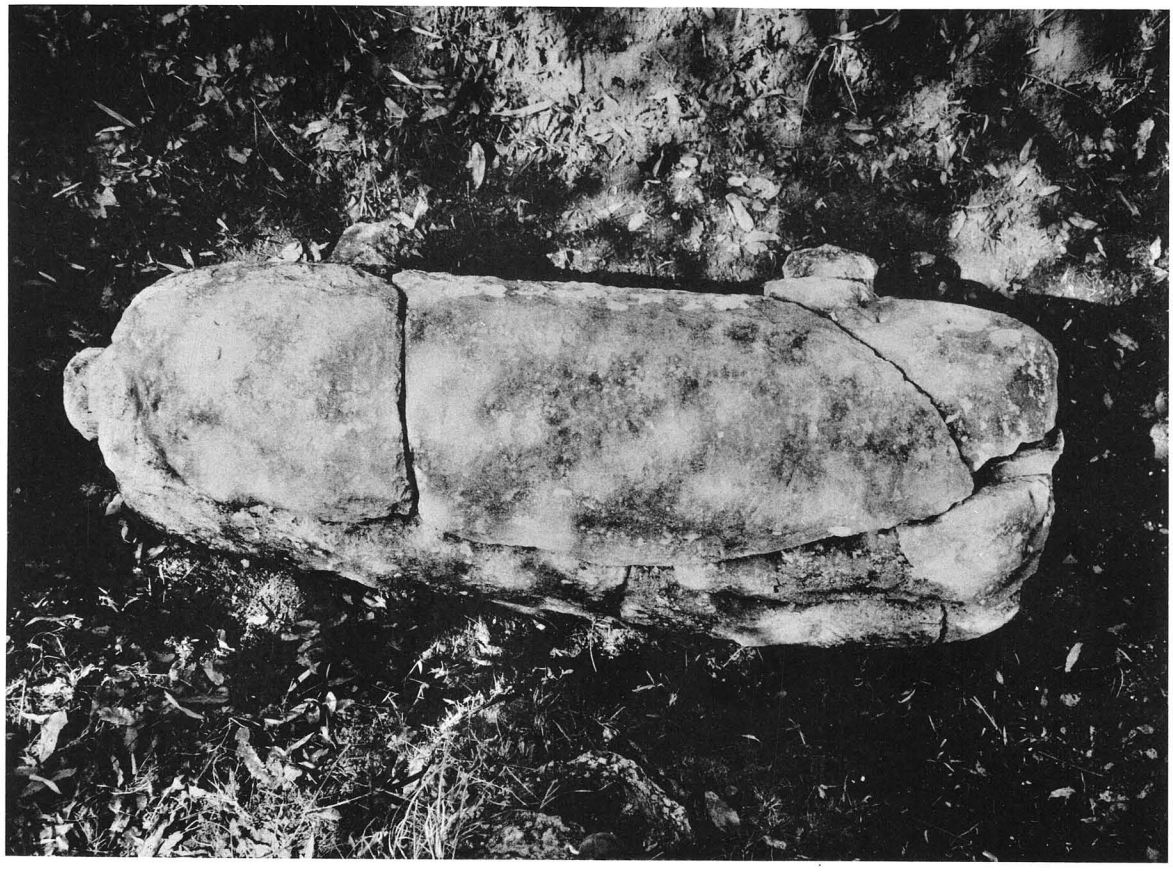
玉造温泉の東南方の丘陵上で標高約九〇メートルの所にある。墳丘は最大径八・五メートル、高さ一・五メートルの円墳状を示し、石棺が露出している。

石棺は、わずかに胴張りのある割竹形石棺である。蓋は、風化して分離しているが、もとは一石を刳りぬいてつくられたものである。全長二・三メートル、幅七六センチ、内面の刳りこみ四二センチをはかる。身は上半部と下半部の二個に分けて刳りぬかれたものを接合している。全長二・七メートル、最大幅七八センチ、内法で長さ一・六二メートル、深さは二一～一八センチであり、蓋と身の組み合わせは印籠口式である。発掘の際剣身が出土し東京国立博物館の収蔵に帰している。

この石棺は、県内では数少ない割竹形石棺であり、しかも棺身のつくりは上半部と下半部の二個を接合した特異な形式が注意される。



石棺実測図　0　1m



石棺上面

石棺測面

岩屋寺跡古墳（横穴）

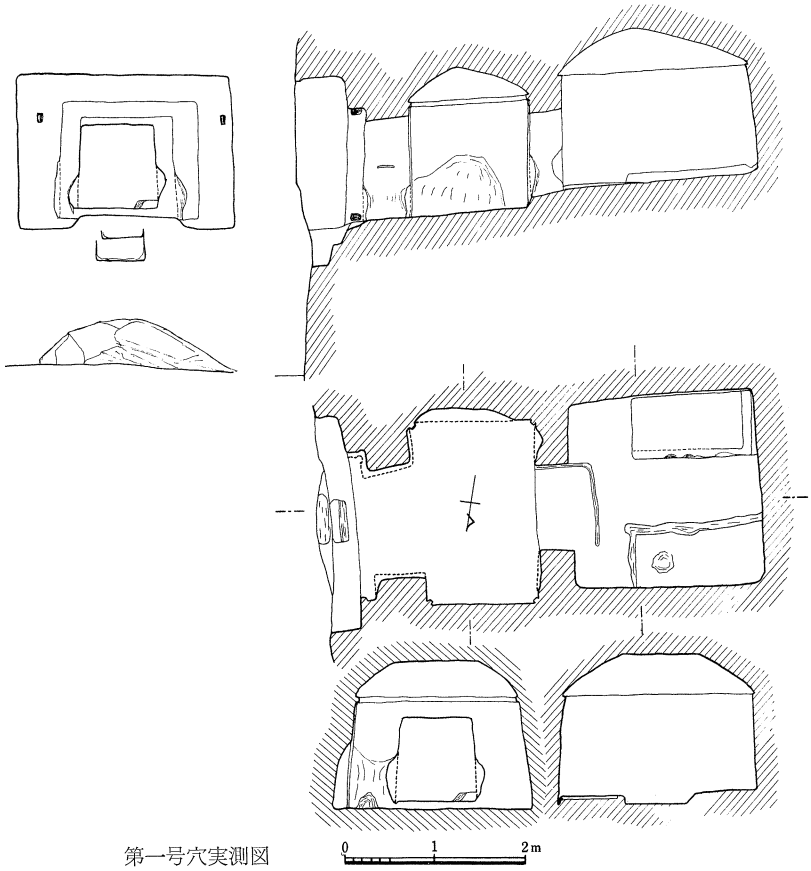
八東郡　玉湯町大字玉造字岩屋
昭和二三・一二・一八　史指定

玉造川下流の左岸の標高約五〇メートルの丘陵頂部に露頭する凝灰質砂岩の岩壁に穿つたもので、一二メートルの間隔をもつて南北の二穴（北側から第一号穴とする）があり、いづれも東向きに開口している。

第一号穴は前後の複室をそなえ、天井は四注（しちゅう）式屋根形である。奥室は、両側に屍床（ししょう）を設け、南側の屍床には幅八センチ、高さ五センチの縁をとつている。また、前室で注意されるのは、四壁の交点および天井と四壁の境界線が幅五～六センチ、高さ三～四センチの突帯でつくられていることである。横穴の全長は四・四五メートル、奥室は長さ、幅ともに二・一メートルの正方形を示す。床面から天井までの高さ一・七メートル。前室は、奥室よりも約一〇センチ低く、厚さ四〇センチの境壁で奥室と区分する。床面の形は、長さ一・三メートル、幅二メートルの矩形であり、高さは一・六メートルである。

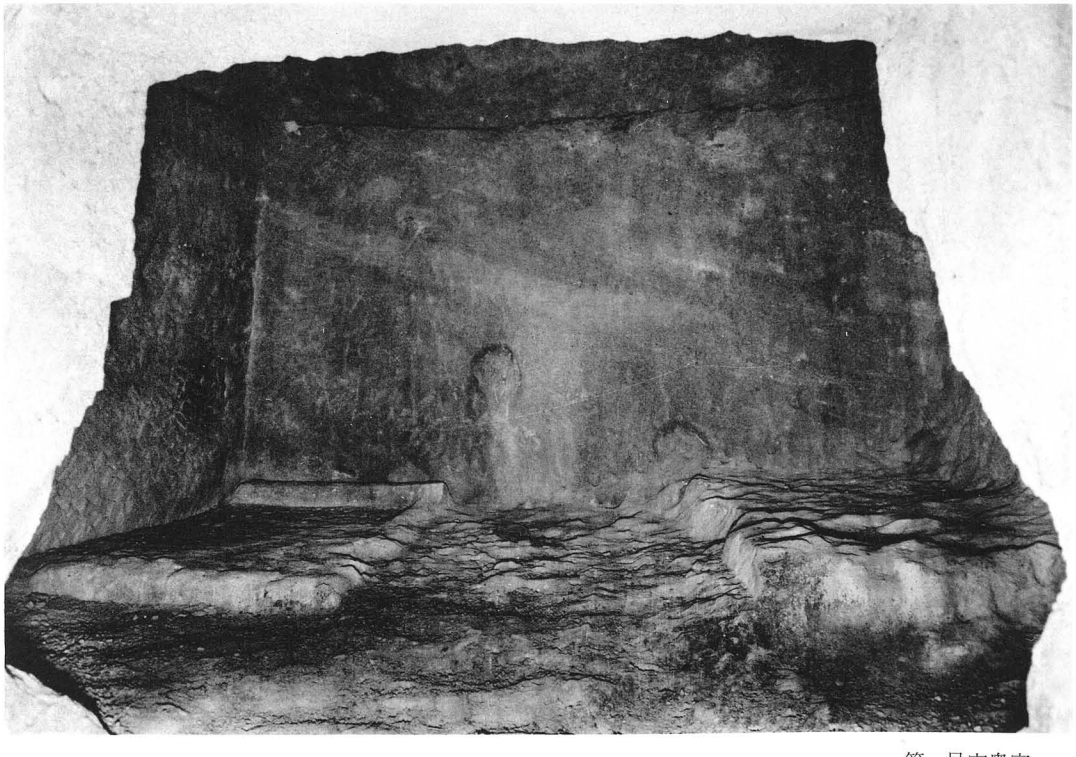
第二号穴は単室で、玄室の天井は四注式の屋根形を示す。主軸は北―六八度―東を示し、全長約三・五メートル、玄室の長さ二メートル、幅約二・七メートル、高さは一・九メートルである。この玄室も両側に屍床がつくられており、また羨道部には二段の切りこみがある。

いづれも岩壁に穿れた横穴とはいえ、外観はあたかも横穴式石室の開口しているのを思わせ、内部の構造も極めて精巧につくられていてこの地方の横穴の整美なものの代表的なものである。なお、この横穴がある岩壁の上部には、岩盤を刳つた石棺様の施設がある。



第一号穴実測図

前　面



第一号穴奥室

玉造（たまつくり）築山古墳

八東郡　玉湯町大字玉造字出口・大門
昭和三六・六・一三　県史指定

玉造川の左岸、温泉街に近い丘麓にある。

墳丘は、畑地と竹藪に囲まれてかなり変形しているが円墳であろう。東西径約一五メートル、高さは二・五メートルである。

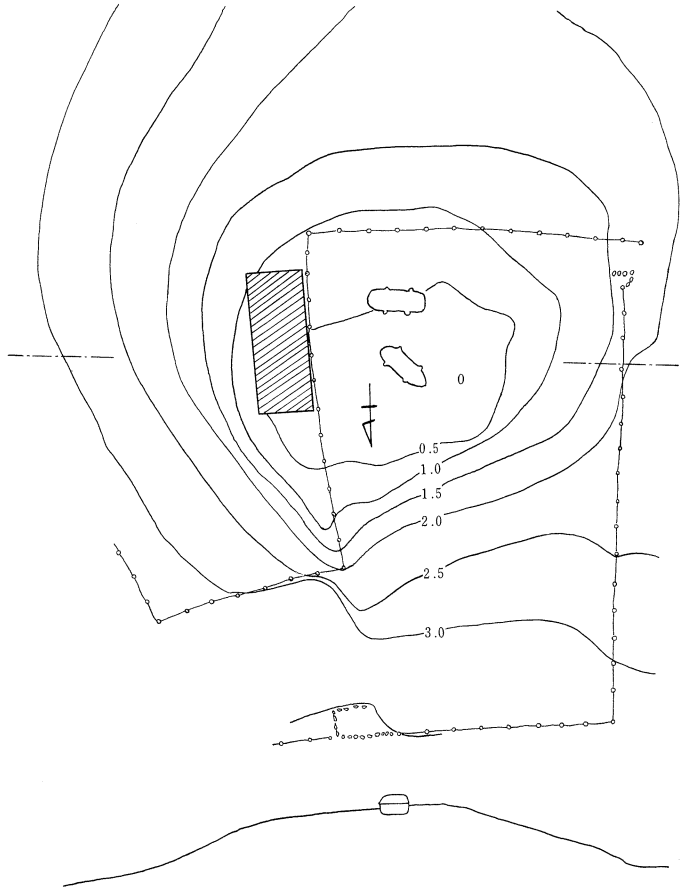
江戸時代の末、安政年間に墳丘の中央部とその南側に凝灰岩を刳りぬいた舟形石棺二個が発見された。

中央の棺は、瓜実形を呈し、主軸を東南―西北にして、東南側が高く五度の傾斜をもつて置かれている。また、西北側を舟のへさき状に尖らせているのは、舟形石棺の特異例といえる。棺身の総長二・一（内法一・八）メートル、胴部最大幅八〇（内法四八）センチ、深さは二〇センチである。両側に二個あて突起をもつている。蓋は下半身を覆う西北側が完存しているが、身と同様なつくりである。

南側の棺は、中央の棺から約一メートル離れ、六〇センチ低位に置かれて主軸はほぼ東西を示している。

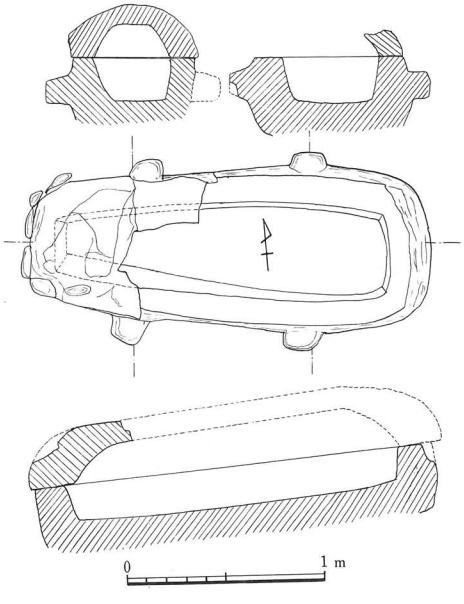
構造は、中央棺のように身の一方が尖らず、また身の蓋受けは印籠口ではなく平縁である。身の総長二・〇三メートル、胴部最大幅八二センチ、内法は長さ一・七メートル、頭部幅四八センチ、足部は二八センチ、深さ二〇センチをはかる。蓋は足部しか残つていない。

副葬品は、玉作湯神社の古記録等から推すと、位至三公鏡（いしさんこうきょう）一面・勾玉・管玉・ガラス製丸玉・小玉・臼玉・鉄剣・刀・小形壺などがあつたらしい。また先年、石棺修理の際に中央棺の近くから短甲残片、南棺の北側に沿つて鋒を東においた鉄鏃一束が発見された。

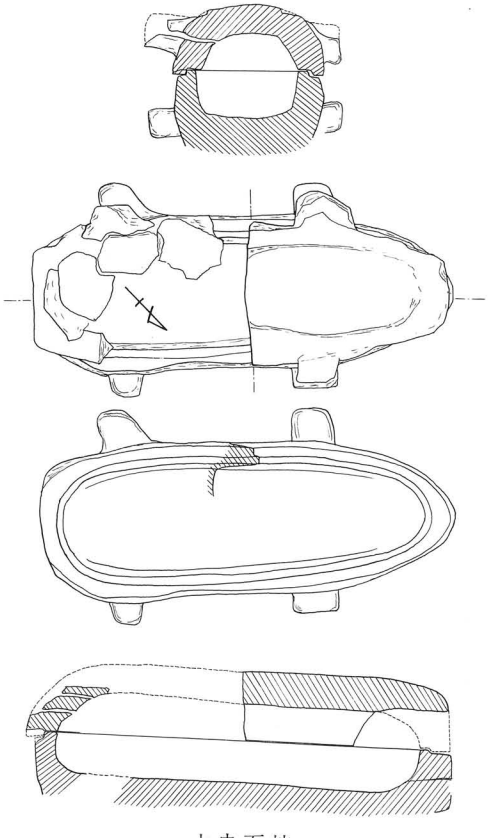


墳丘実測図

中央石棺

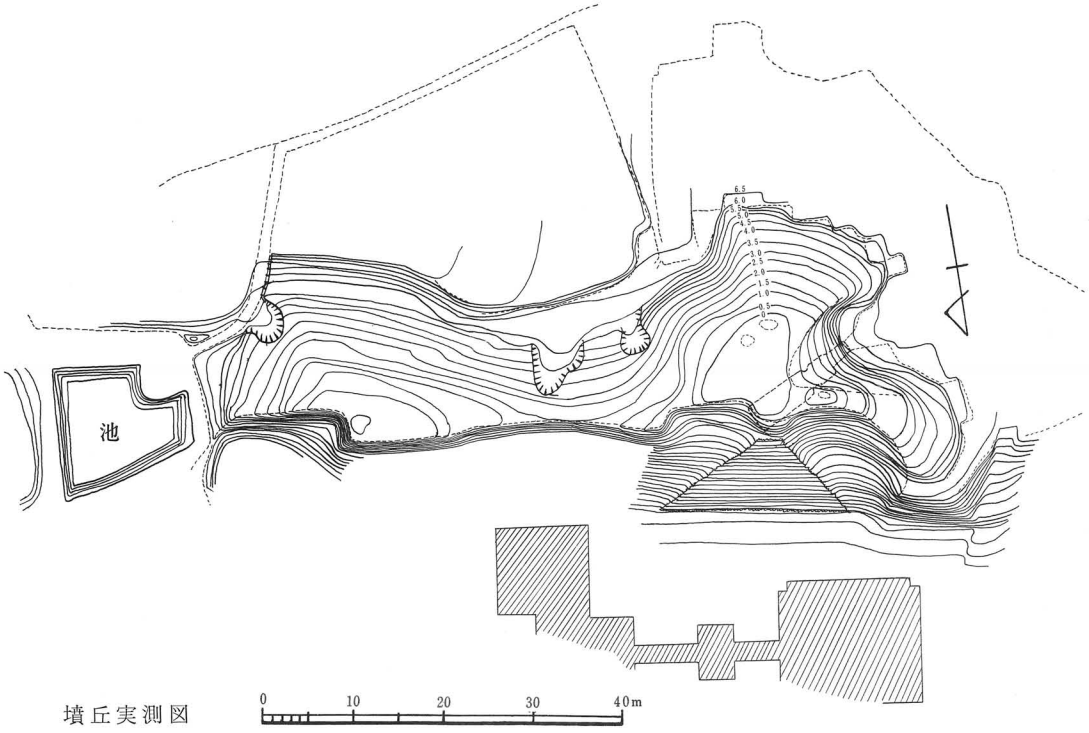


南側石棺



中央石棺

石棺実測図



墳丘実測図

今市大念寺古墳

出雲市　今市町鷹ノ沢

大正一三・一二・九　史指定

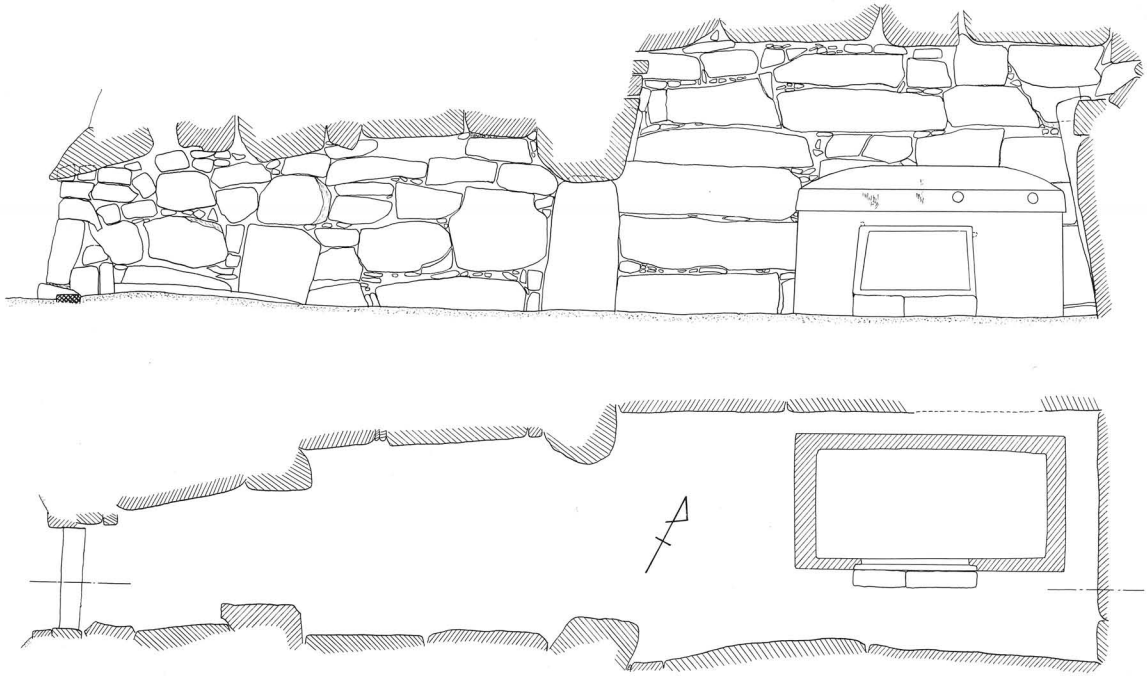
今市町東南部に突出した台地上にあり、墳丘は相当削られているが、前方後円の墳形は大体保たれている。墳丘の大部分は地山で、石室付近のみ盛り土になつているようである。前後の主軸八四メートル、後円部の高さ六メートルばかりであつて、内部構造の判明している古墳では県下最大の規模である。墳丘周辺に埴輪円筒の残片が認められる。

内部構造は壮大な横穴式石室に家形石棺二つを置くものである。石室の用材は、大形の自然石または割石を用い、現存部の全長一二・八メートル、羨門部の幅一・二五メートル、奥壁部の幅三・一メートルの大きさである。両側壁中間部にそれぞれ二か所に門柱状に張り出した石を置き、羨道・前室・奥室の三部に仕切られている。奥壁は巨大な一枚石を用い、高さ三・五メートルある。奥室の石棺は

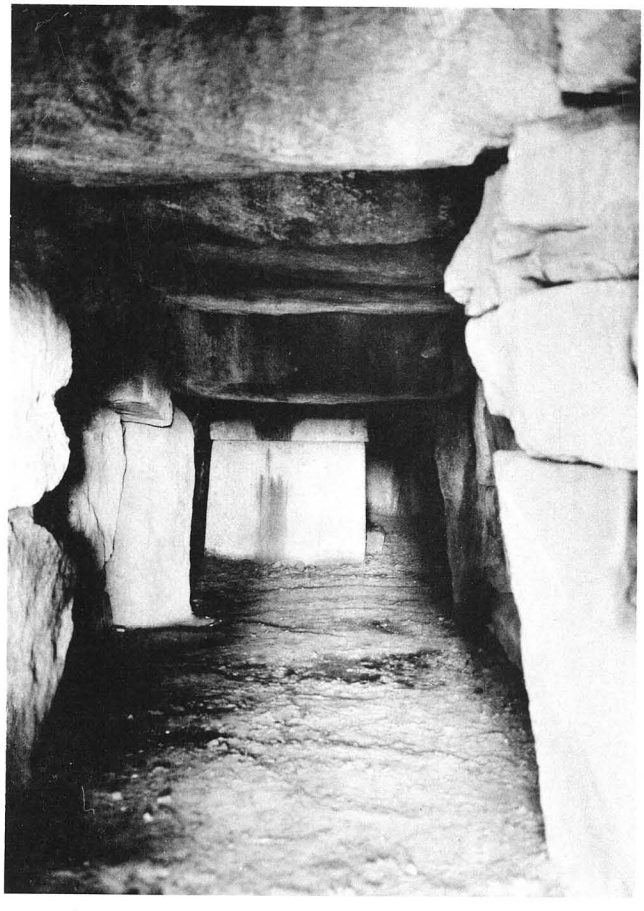
全　景

長さ三・三四メートル、幅一・七メートル、総高約一・九メートル、身の高さ約一・二メートルである。くりぬきであつて、屋根は内外共に四注式に作り、その両平側の軒部にそれぞれ三個の円形突起（前面の一個は欠損）がある。身は平の側に底辺一・三七メートル、頂辺一・二メートル、高さ〇・七二メートルの梯形の横口を開き、横口の外面周囲には一〇センチメートル内外の巾をもつてくりこみがあり、このくりこみの上縁両側にはそれぞれ一個の小孔がある。横口の前面にはこれと接して別に長方形の切石を横たえている。前室にあつた石棺は現存しないが、William Gowland : The Burial Mounds and Dolmens of the Early Emperors of Japan によると、その調査当時すでに蓋と前壁は破損していて、棺の内法は長さ五フィート一インチ、幅二フィート五インチ、深さ一フィート一〇インチ一〇分の一であり、かつ若干削り方の荒つぽいものであると記されている。また同書にのせられた実測図によると、この小棺は組合式であり、前室のほぼ中央にあつて、奥壁に向かつて左壁に近かく置かれていたことがわかる。

この古墳の開口したのは、文政九年（一八二六年）二月、寺域拡張工事の際であるという。金環・丸玉・金銅履・大刀数本・槍身・石突・斧頭・轡・馬鐸・鈴・雲珠・須恵器等が出土したという記録があるが、現存するものに刀身残欠・槍身残欠・斧頭・鏡板（方形・透し入り）・雲珠残欠（鉄地）・須恵器蓋坏があり、大念寺に保管されている。

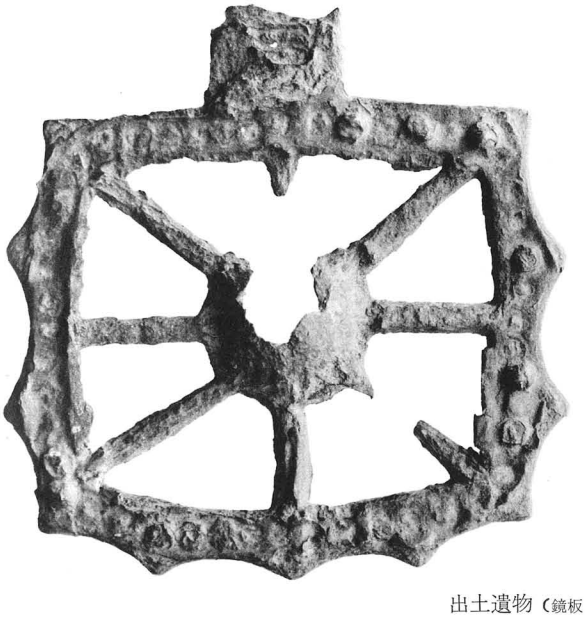


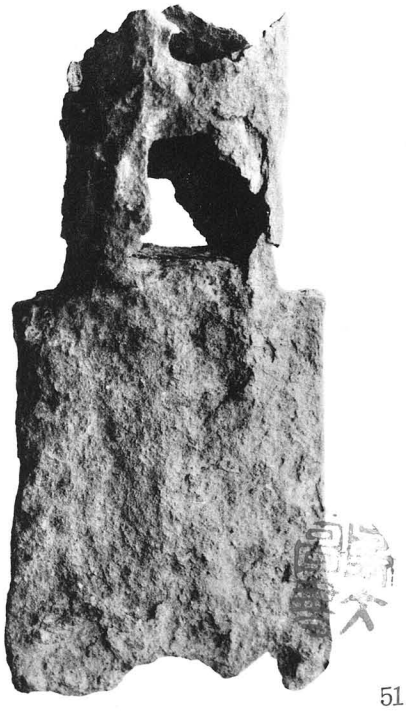
石室実測図　0　1　2　3　4m



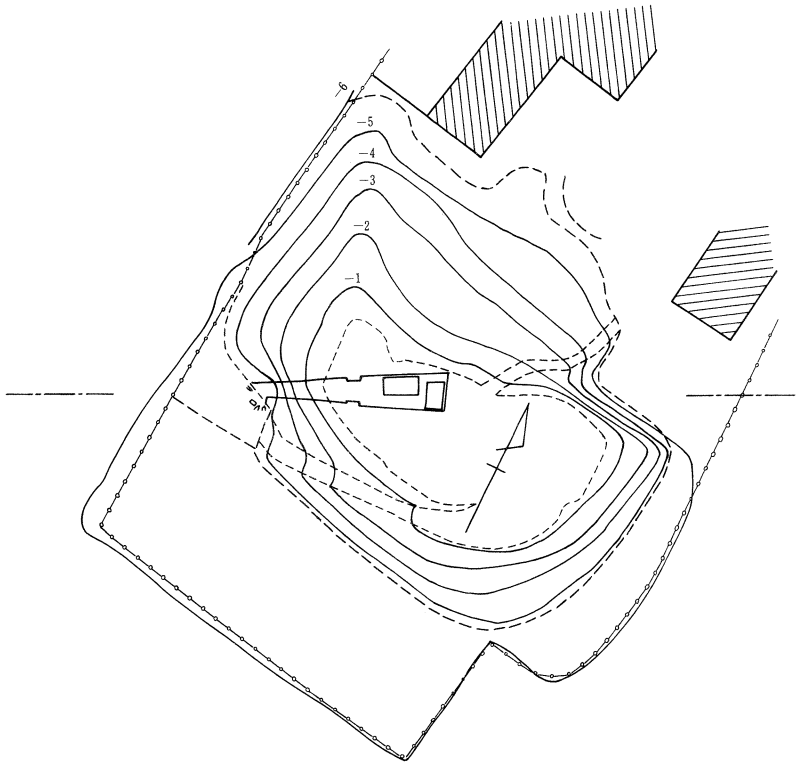
石室内部

石　棺





出土遺物（鏡板・鉄斧）



墳丘実測図

0　10　20m

上塩冶築山古墳

出雲市　上塩冶町　築山

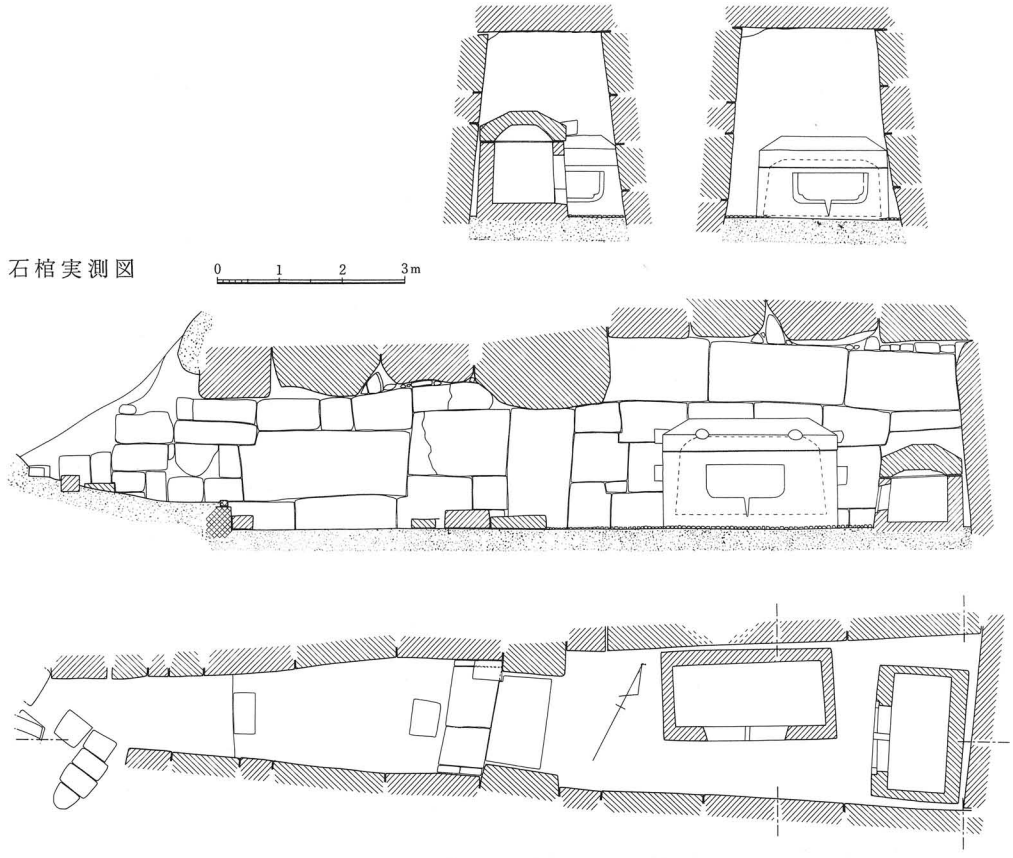
大正一三・一二・九　史指定

この古墳のあたりは丘陵地帯から五〇〇メートルばかり離れた一帯の平地で、現在畑と宅地になつており、これに続く水田地帯より若干高くなつている。底径四二〜四三メートル、高さ六・五メートルばかりの円墳で、葺石は認められないが、埴輪円筒の破片が墳丘周辺に散乱している。

全　景

内部構造は凝灰岩の切石を積んで壁を作った横口式家形石棺二つを置いたものである。現状では石室の長さ一四・六メートル、羨道（せんどう）最前部の幅一・一メートル、奥壁部の幅二・八メートル、奥室の高さ三メートル、羨道部の高さ二・四～二・二メートルの大きさである。奥壁と羨門（せんもん）の中間両側に方柱状の切石を立てて門形を作り、その部分の床には板状の敷石を置いている。もとこの所は切石を積んで閉塞されていたという。奥室には床面に径約五センチメートルの礫を敷いている。

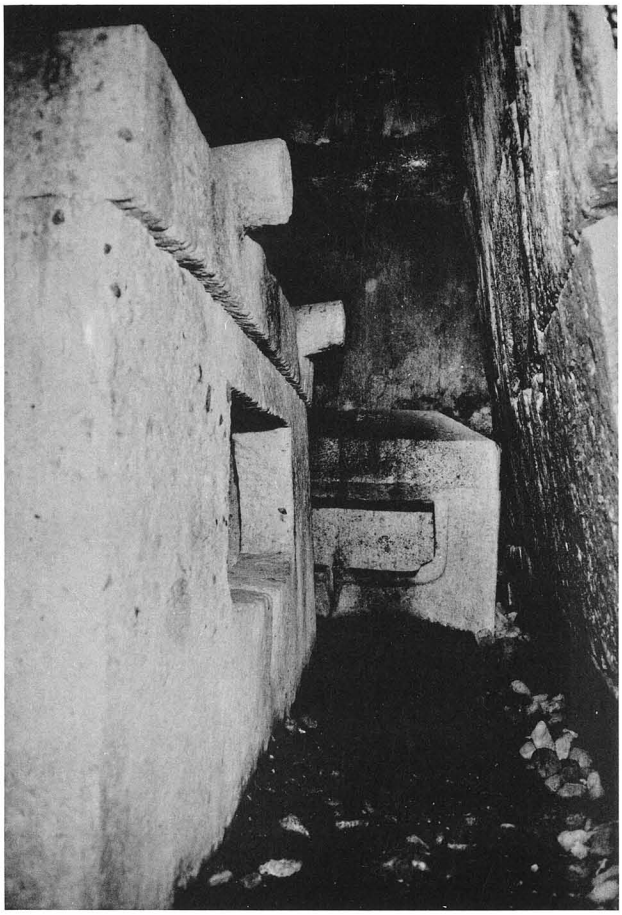
大小二つの石棺は共に奥室内に置かれている。小棺は奥壁に接し、羨道の方に向かつて横口を開いている。その長さ二・一メートル、幅一・四五メートル、高さ一・三二メートルあり、棺身はくりぬき、蓋は内外両面を四注式に削り、平入の位置に横口がある。横口の周囲には浅いくりこみがあり、下縁中央部には排水のためのせまい溝を切りこんでいる。蓋と身の間隙には粘土をこめて目張をしている。大棺は小棺の前方に北側壁に背面を接して置かれ、形状は大体小棺と同様であるが、その妻（つま）側に身蓋共に各一個ずつ、蓋の正面に二個、合わせて六個の円形突起があり、横口は周囲にくりこみがなく、下縁両隅に単純な丸みをつけただけの簡単な形である。大棺は長さ二・七二メートル、幅一・四五メートル、高さ一・七六メートルある。なお大小共に棺の外側の稜角は面取りがしてある。小棺の横口くり形は地蔵山古墳や宝塚古墳の石棺に類例がみられ、大棺のそれは地蔵山古墳・古天神古墳の石床に類例がみられるが、両者は共に九州の古墳に多くみる手法である。



石棺実測図

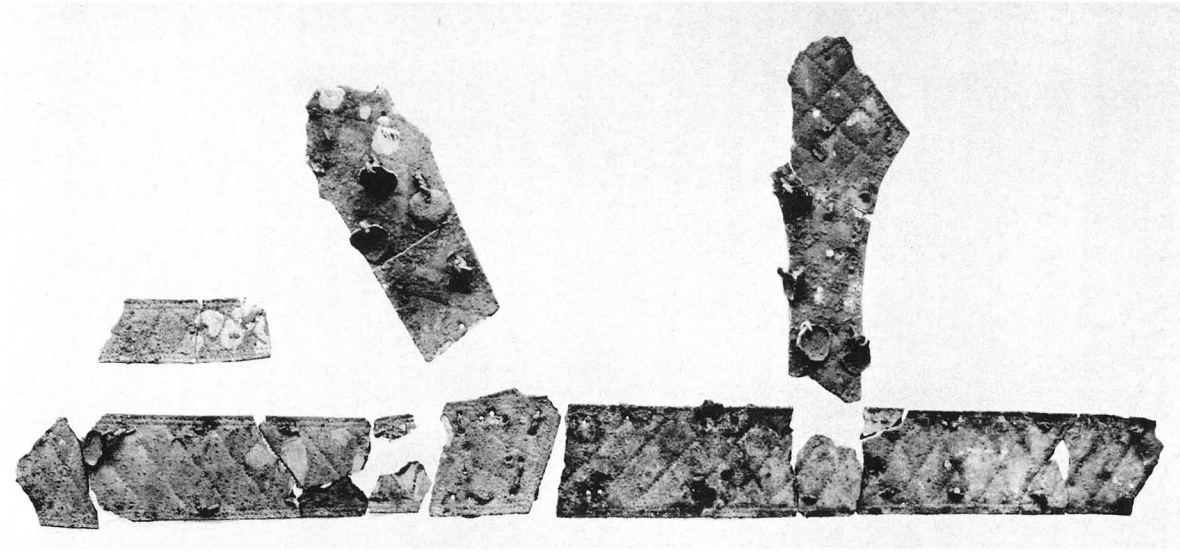
この古墳が発掘されたのは明治二〇年三月で、遺物の出土状況は島根県史（四）によると、奥室の棺外に土器・鈴・槍・鏃・銀環があり、小石棺内に玉類・長刀一・短刀二・冠・土器一等があり、この小棺の屋根に馬具類がのせられ、大棺の中には円頭大刀・剣類（直刀）・土器おのおの一があつたという。

現存する出土品は、金銅冠　銀環・玉類（メノウ製勾玉・水晶製勾玉・メノウ製なつめ玉・ガラス製管玉・ガラス製丸玉・ガラス製小玉）・円頭大刀・方頭大刀・槍身・鉄鏃・轡・鞍金具・雲珠および辻金具・銅鈴・須恵器等であつて、出雲市教育委員会から県立博物館に寄託展示されている。

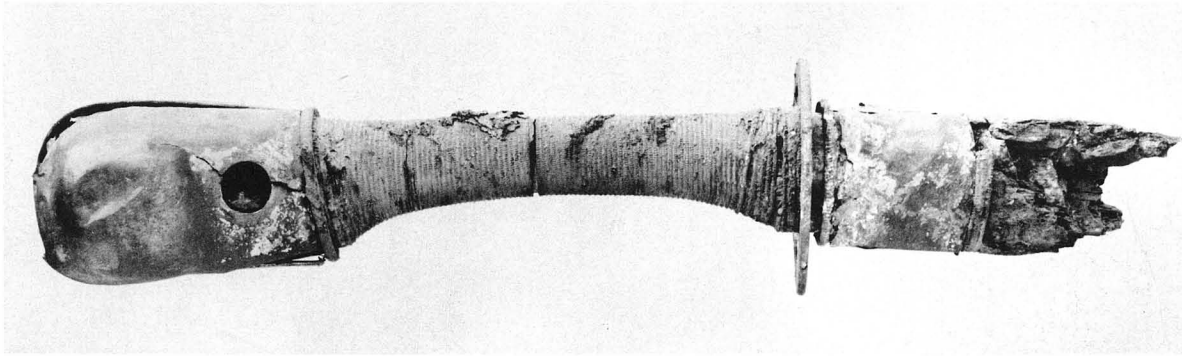


石　棺

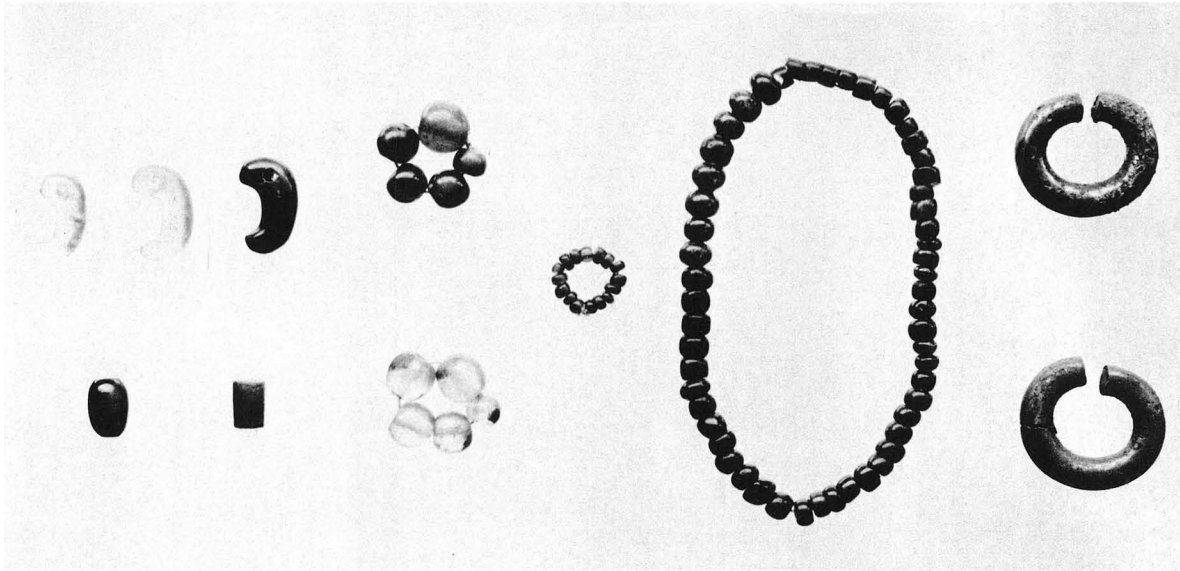
石室内部



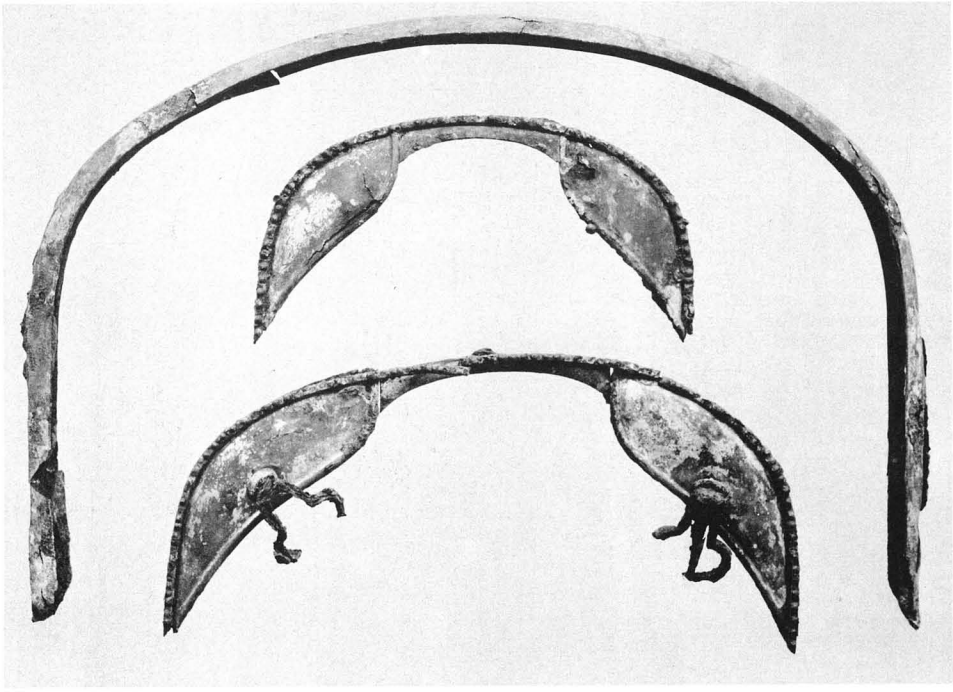
金 銅 冠



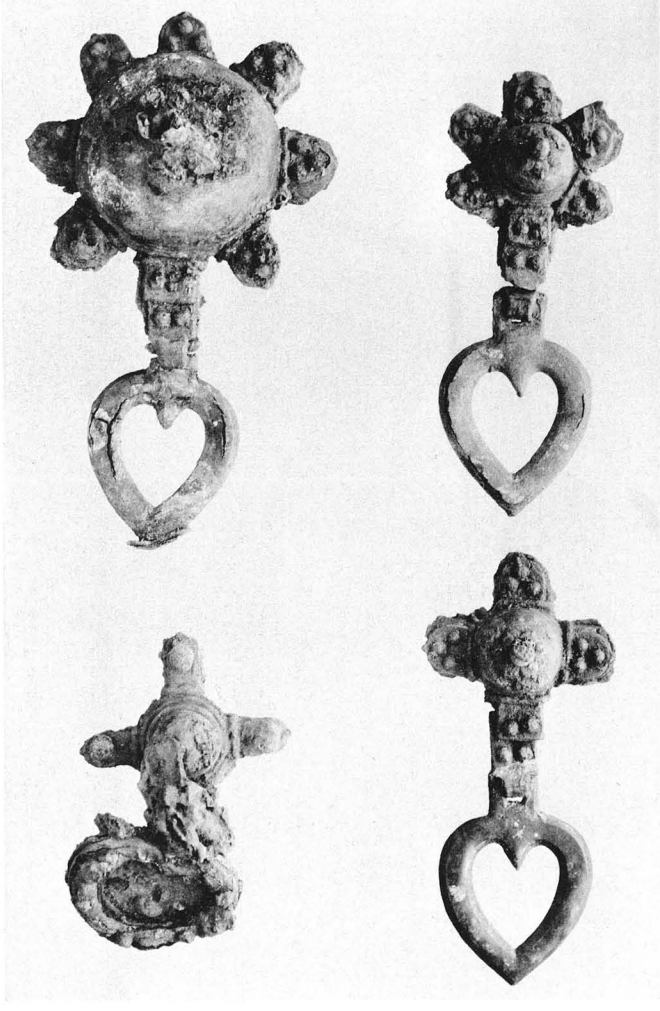
銀装円頭大刀



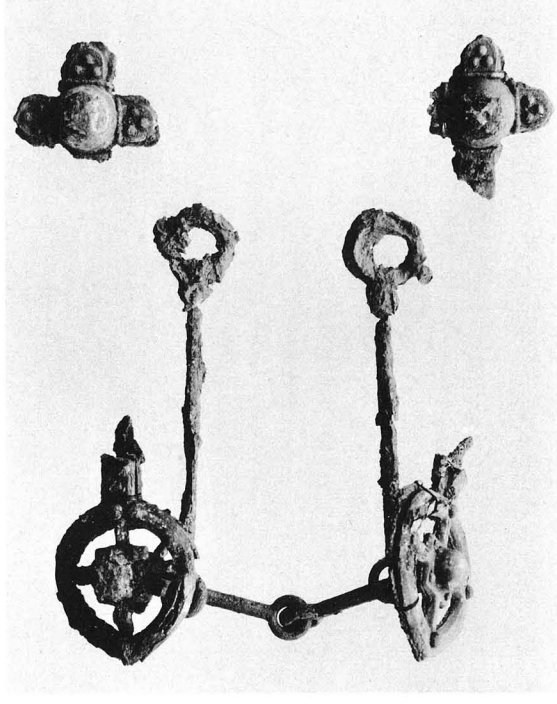
銀 環・玉 類



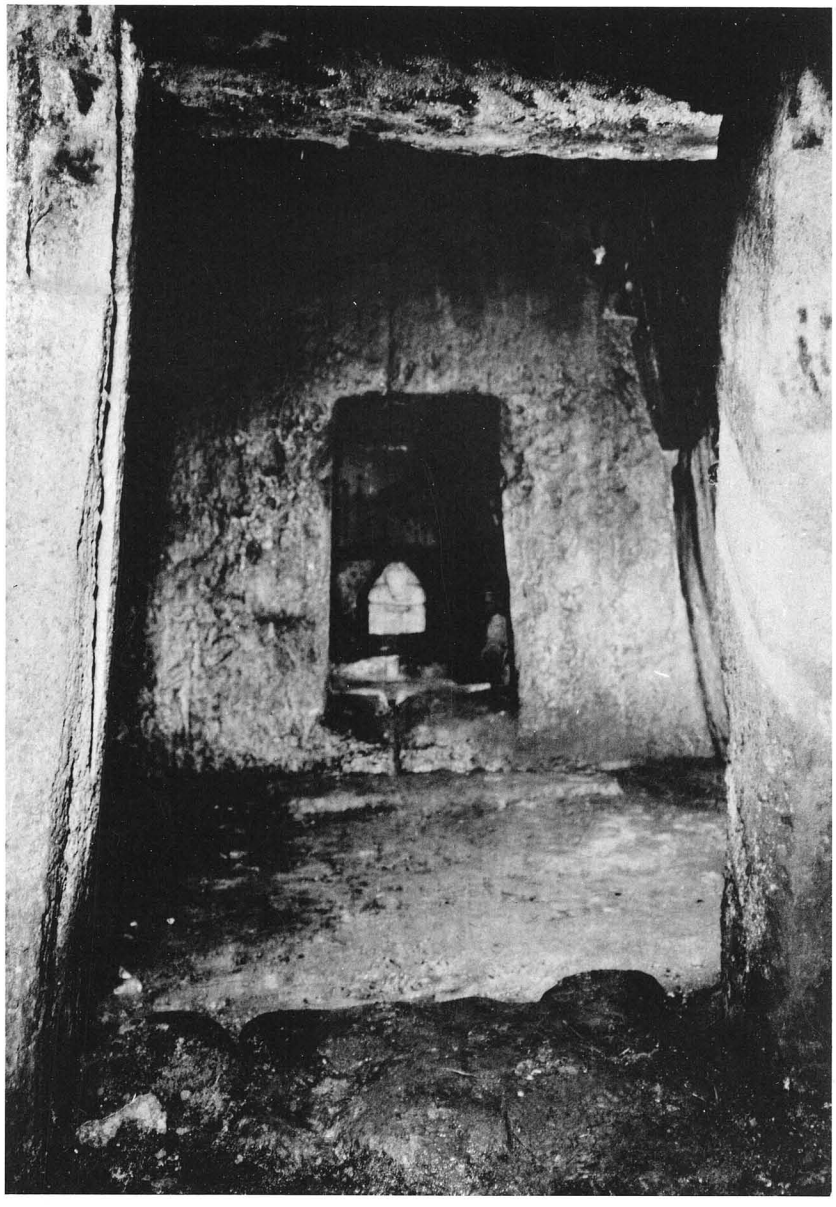
鞍 金 具



雲珠と杏葉



轡・辻金具



石室内部

上塩冶地蔵山古墳

出雲市　上塩冶町池田

大正一三・一二・九　史指定

丘陵の麓に作つた円墳で、直径約一五メートル、高さ約五メートルあり、周囲から削つたためか、やや楕円形を呈する。

内部構造は切石で作つた横穴式石室の中に、くりぬきの家形石棺と有縁石床とを置くものである。石室は奥室・前室・羨道の三部に区切られており、全長約九メートルある。奥室は奥と両側の三壁および天井をおのおの一枚の切石で組み、前壁の中央に方形の口があつて前室に通ずる。前室側壁は数個の大形切石を用い、羨道部との間には両側に柱状の石を置き、その上に一段低く石を横たえている。羨道部側壁も切石で作られている。石棺は奥壁に接し、横口を前方に向け、その前に接して縁のある石床を置いている。石棺は上塩冶築山古墳の小石棺に類似したタイプであるが、横口の周囲のくりこみはない。石床は前後両縁にくり形がある。

全　景

石棺と石床

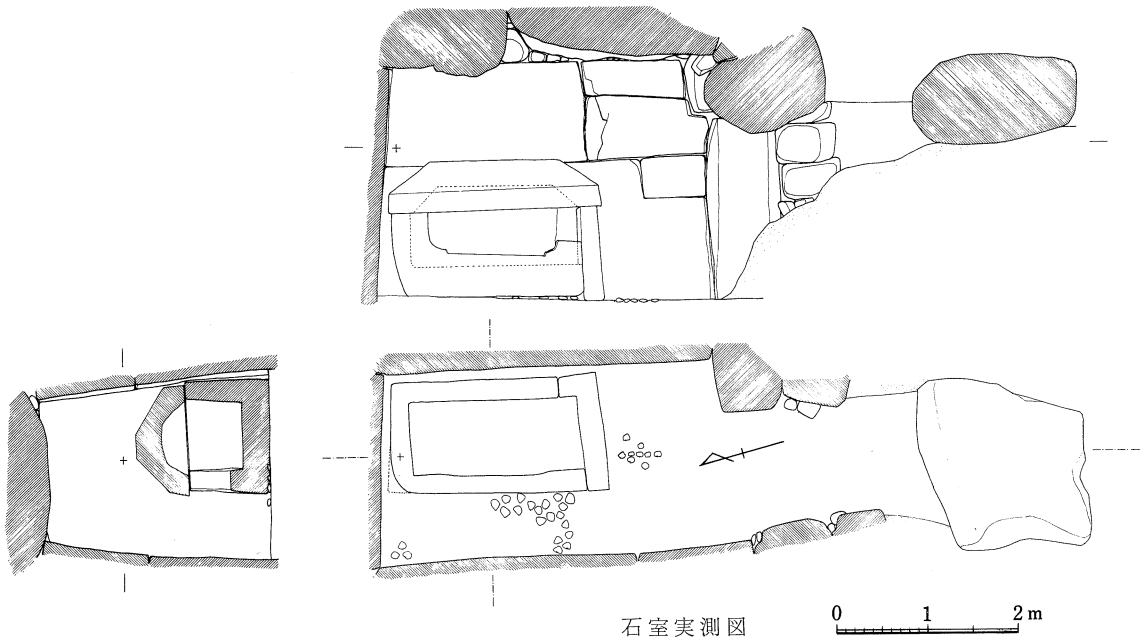
宝塚古墳

出雲市　下古志町畑田
昭和六・一一・二六　史指定

妙蓮寺山の西北約五〇〇メートルの水田中にあるが、封土はほとんど失なわれ、石室の上部が露出している。石室の床は周囲の水田面よりやや低くなつている。発掘年代は明らかでない。墳丘周辺に埴輪円筒の破片が認められる。

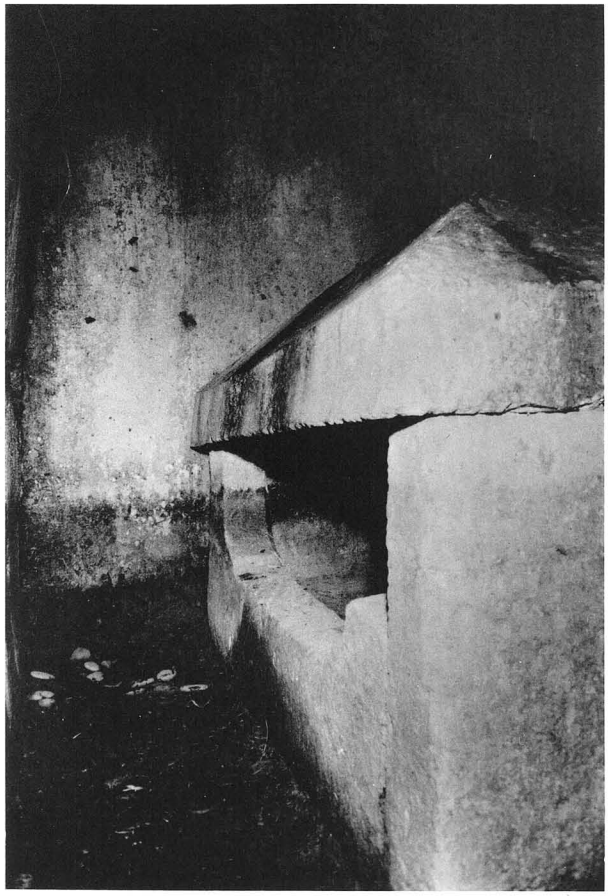
内部構造はほぼ南々西向きに開口した一種の片袖形の横穴式石室に横口式家形石棺を置いたものである。玄室の壁は比較的大形の切石で作られ、幅二・一メートル、奥行三・七メートル、高さ二・六メートルの大きさである。底部には径一〇センチメートル程度の扁平な礫を敷いている。

玄室の東壁に接して西向きに石棺が置かれているが、棺身はくりぬきで南側のみ別の石で補つたものである。棺蓋は四注式屋根形で、その平の方に横口がある。横口の部分は左右非対称であるが、横口のくり形は上塩冶築山古墳の小石棺や地蔵山古墳の石棺と類似した手法をとり、稜に面取りをしている。なお、石棺は長さ二・三メートル、南側の幅一・三メートル、北側の巾一・二メートル、高さ一・五メートルの大きさである。



石室実測図

全　景



石室内部

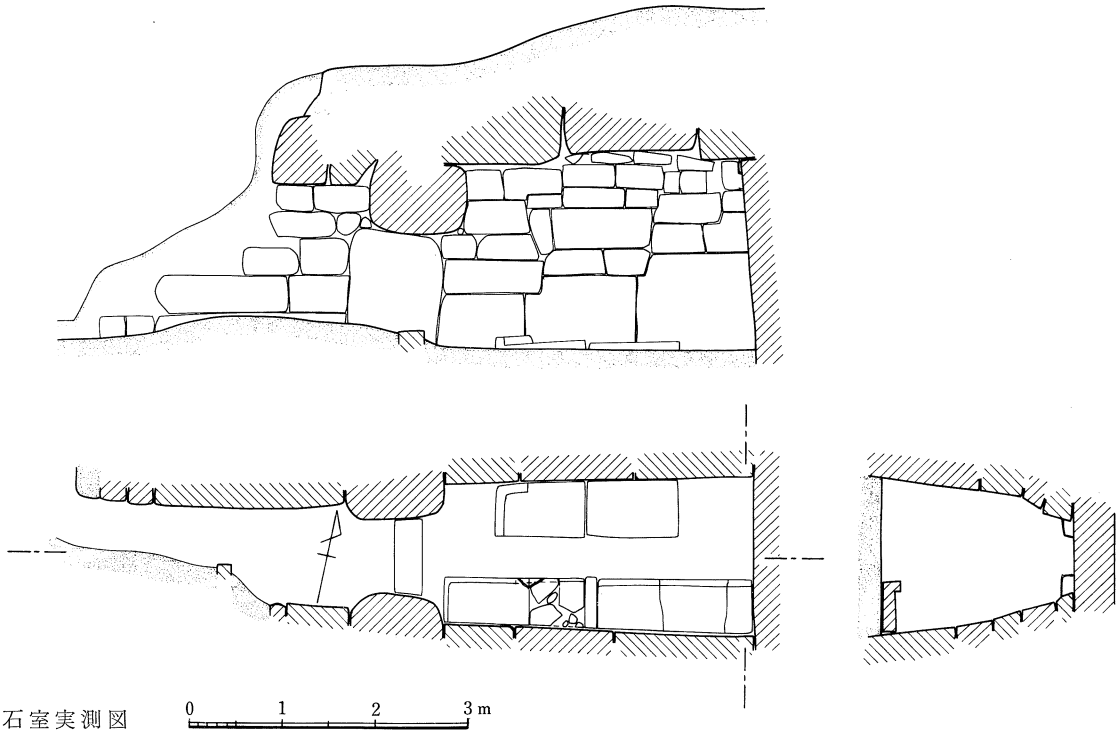
放（はな）れ山（やま）古墳

出雲市　古志町新宮
昭和三四・九・一　　県史指定

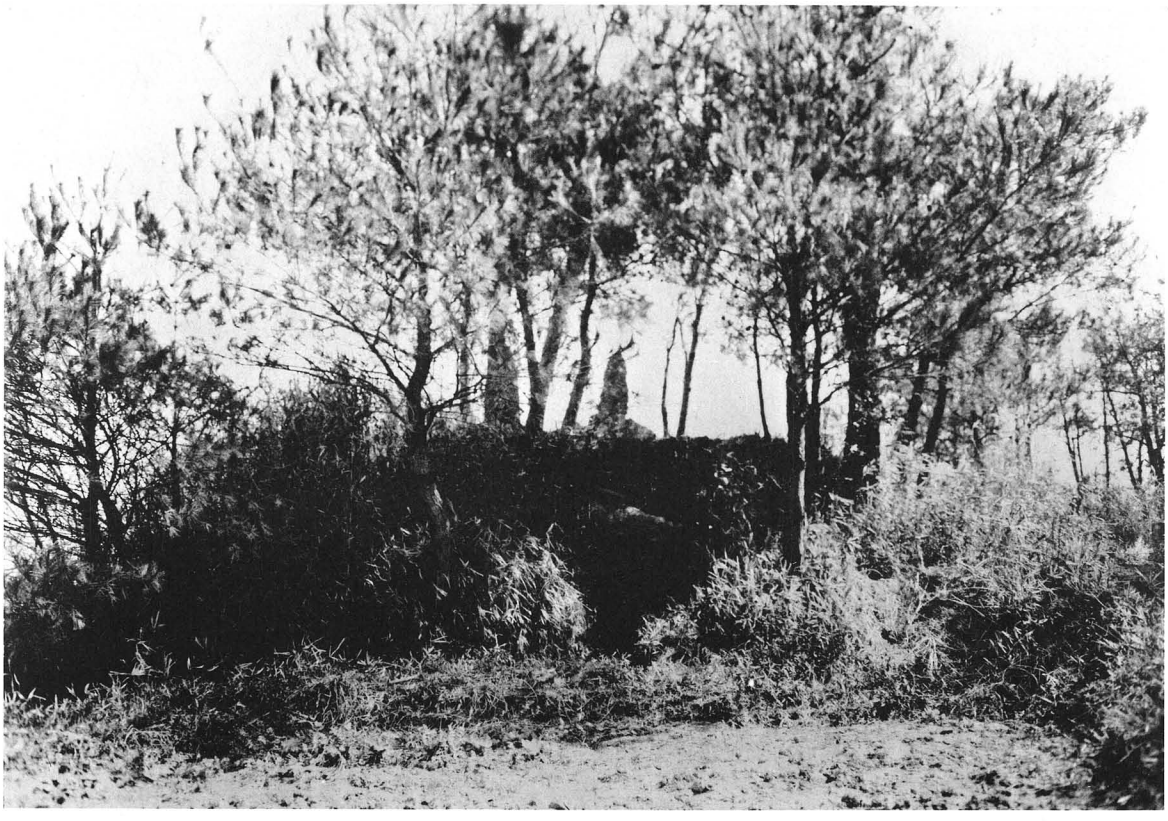
妙蓮寺山の東端に接した比高約一〇メートルの台地上にある。正面からみると相当高い墳丘のようであるが、台地の頂上に近く作られ、墳丘の上部と周囲が円墳状に整えられた程度のものである。

内部構造は切石で作った横穴式石室の中に三人分の石床を設けたものである。玄室（げんしつ）は奥壁部の巾一・七メートル、長さ三・五五メートル、高さ二・八メートルの大きさである。壁と石床はいずれも凝灰岩であるが、奥壁は一枚の切石を立て、両側壁は長方形の切石を整然と積んでいる。北側壁にそい一部分低い縁をつけた石床があり、南側壁に接しても同様の石床があり、その中間に幅のせまい石を立てて、これを二人分に仕切っている。玄室と羨道（せんどう）の間には両側に方柱状の石を立て、その上にほぼ同形の石をのせて門形を作り、底に細い切石を置いて境界としている。この部分がうすい凝灰岩切石で閉塞され、羨道部には大形栗石様の石と粘土がつまっていたという。

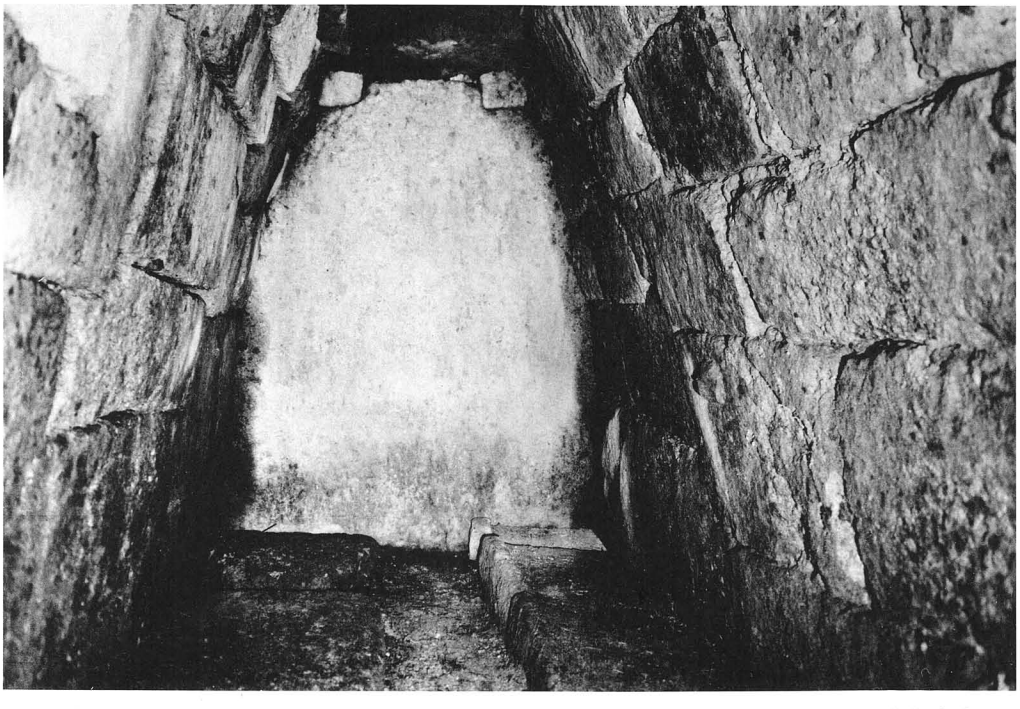
石室の発掘は大正年間であるが、出土品は頭椎（かぶつちの）大刀（たち）一・金銅装（こんどうそう）小刀残欠・銀装刀残欠・刀子（とうす）残欠三・鉄鏃（ぞく）（尖根（うずね））多数・鉄地金銅張杏葉（ぎょうよう）三・鉄地金銅張雲珠（うず）及び辻金具（つじ）四・轡（くつわ）二（一つは鉄地金銅張鏡板（かがみいた）のあるもの）・金環二・須恵器（すえき）（脚付壺一・提瓶（たかつき）一・高坏（たかつき）一・低脚付小形長頸壺二・小形壺三・蓋坏（ふたつき）若干）等で、県立博物館に寄託展示されている。



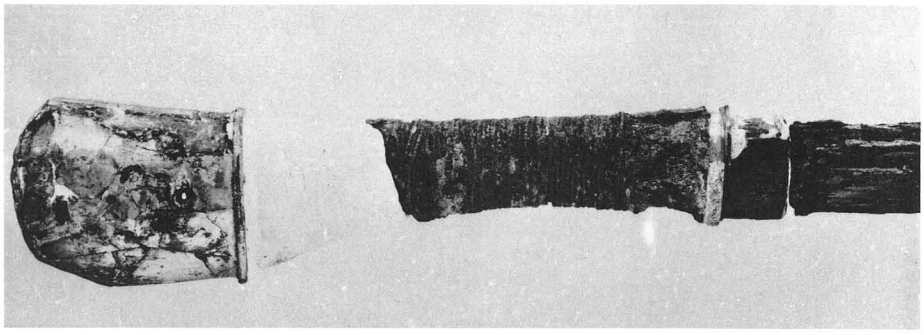
石室実測図



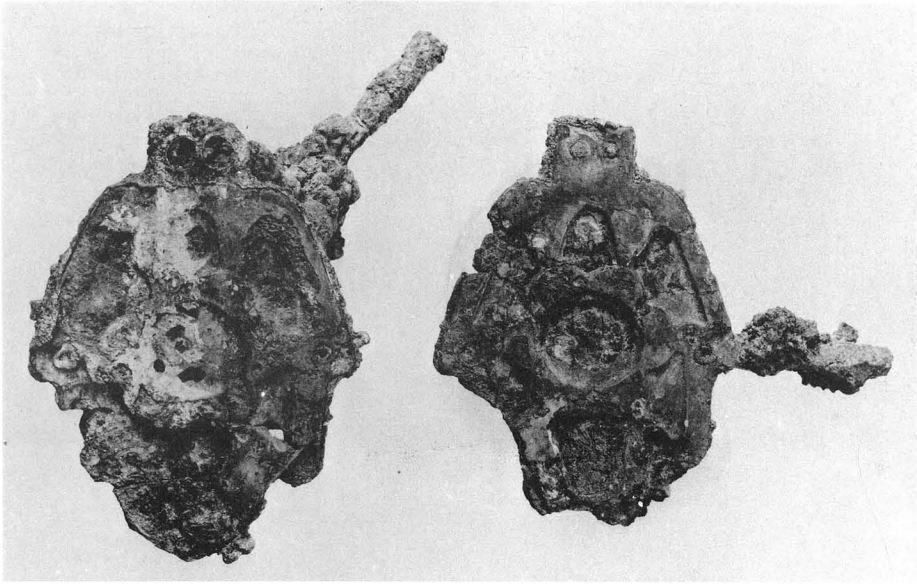
全　景



石室内部

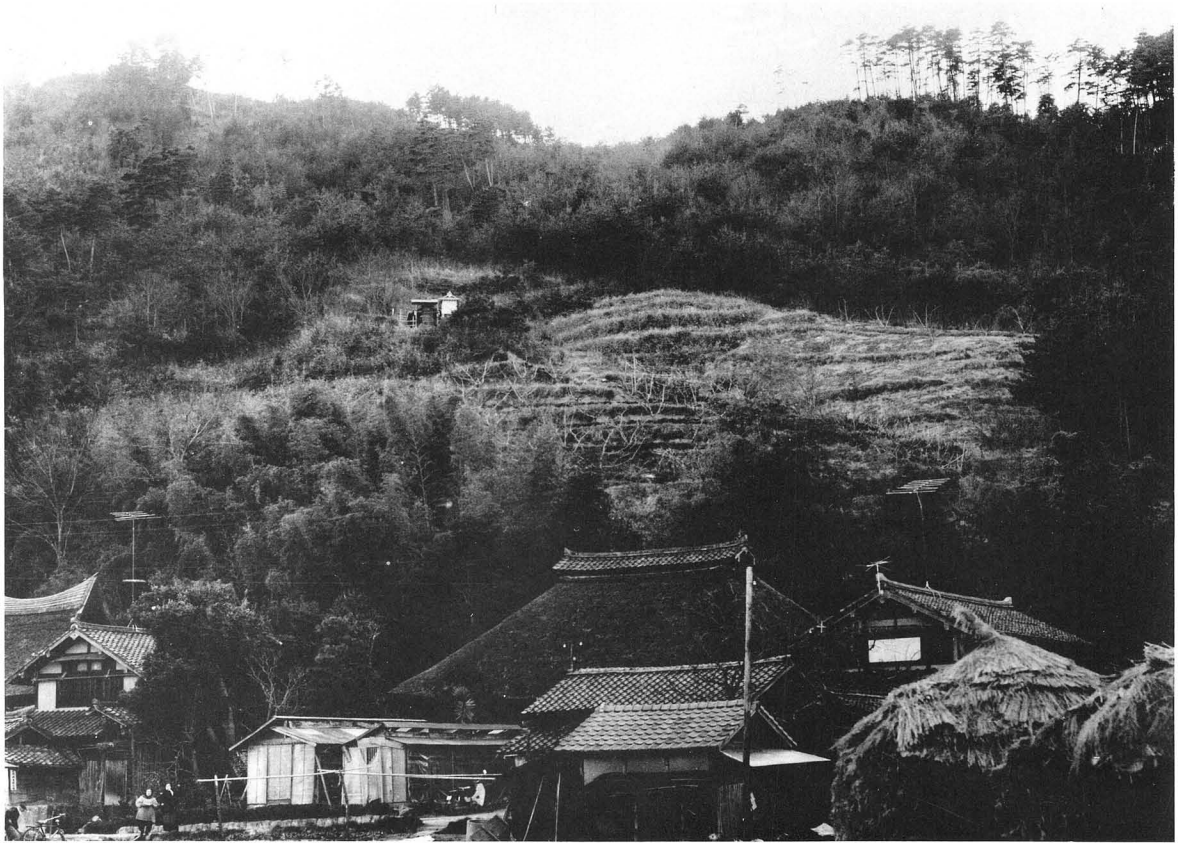


頭椎大刀



轡

須恵器



遠　景

上島古墳

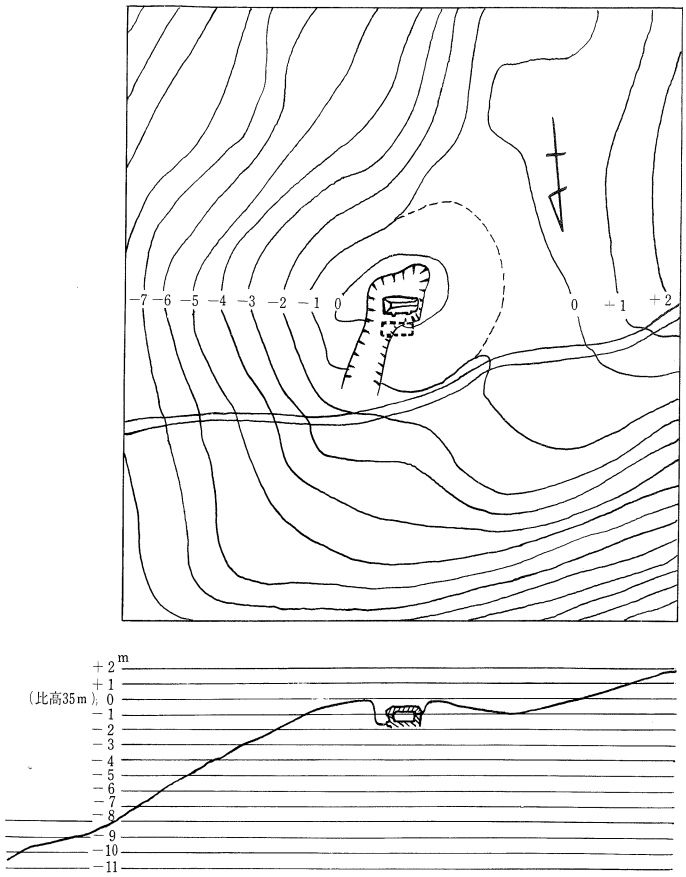
平田市　国富町上島
昭和三二・七・二七　史指定

比高約三五メートルという相当高い山腹のかなり急斜面に作られている。直径約一五メートル、高さ約二メートルの円墳で、平野に面する側は整然と形が整えられているが、裏側つまり山に続く方はほとんど人工を加えていない。埴輪や葺石はないが、墳丘周辺から須恵器・土師器が相当発見されている。

内部構造は家形石棺を直接土中に埋め、それと平行して小さい竪穴式石室を設けたものである。石棺は凝灰岩を用いたくりぬきの家形であつて、棺蓋は一方の側をのこして三方が斜面に削られている。棺蓋の平には一側に二個の矩形の突起があり、反対側にも一個だけ突起らしい痕跡をのこしている。棺身には一方の短壁に円形突起がある。棺身は内法で長さ一・八三メートル、幅〇・六九メートルで、側壁が中ぶくれとなり、底部が上縁よりやや広くなつている。石室の四壁は主に三〇～四〇センチメートルの長さの自然石や割石を積んで作られ、四枚の石を用いて蓋をしている、長さは一・八五メートル、幅は東側で〇・七メートル、西側で〇・六メートル、高さは〇・七メートル内外である。床部は土であるが、別にかためた様子はみられない。この床土に石棺と同質の石の小片が相当混じていて、石棺・石室が同時に設けられたものと推察される。

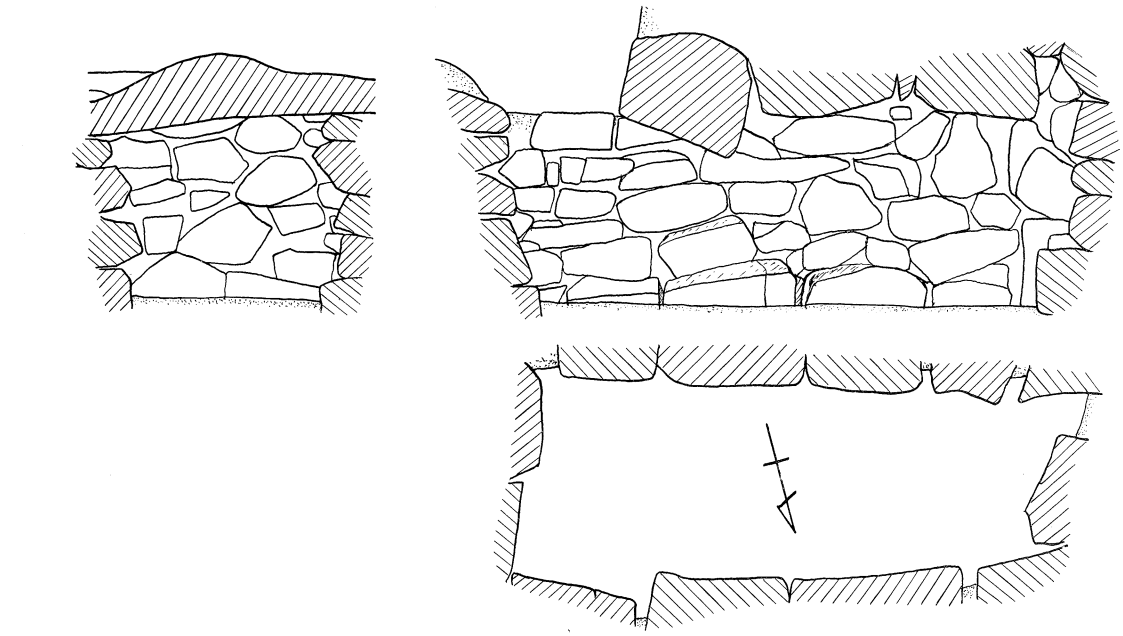
この古墳は昭和二四年五月、開墾作業中に発見されたものであるが、石棺内には人骨がほぼ完全にのこつており、副葬品はその両側にあつて、ほぼ左右均整の位置をとつていた。まず、右側の棺壁に刃を接して直刀が尖端を足の方に向けて置かれ、その柄のあたりに六個の金銅製金具・鉄製金具小形刀子があつた。また、左胸の位置に大形刀子、頭部右側に銀環一個、胸部右側に鏡面を上にして五鈴鏡、左手の位置に鈴釧が置かれていた。玉類は頭の周囲にガラス製

小玉が散乱し、左右両腕から手首の位置にメノウ製管玉とガラス製小玉とがのこっていた。また、両足頸をとりまいてガラス製丸玉があり、着用のまま埋葬されたことが明瞭に認められた。なお、頭部の両側隅に三組の須恵器蓋坏が置かれていた。石室には、馬具類（鞍金具・轡金具・雲珠・杏葉等）・矢（鏃は四〇～五〇本あり、いずれも単純な尖根で、箙は竹が用いられている。）・石突等がおさめられていた。轡は鉄地金銅張の鏡板のあるものと、単純な扁円形頬金のついたものとがあるが、f字形鏡板は浜田市めんぐろ古墳出土品と同形式であることが注目される。杏葉には鉄地金銅張の結紐状（扁円剣尾形）のものと、鉄製心葉形のものとがある。



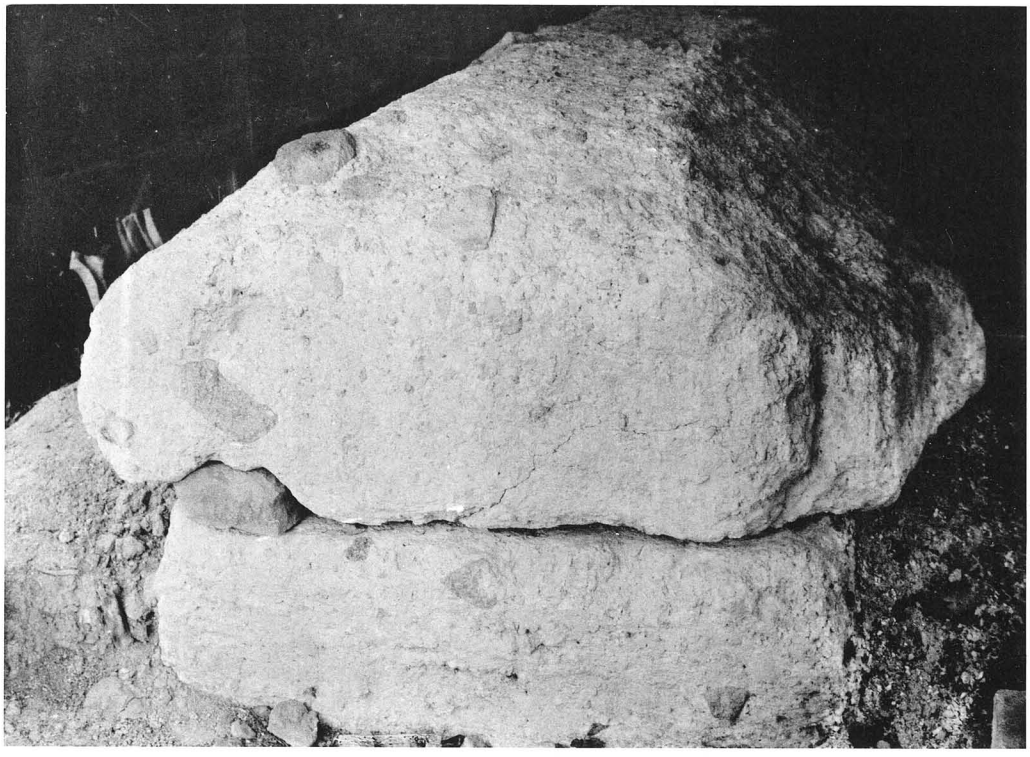
墳丘実測図

0 10 20m

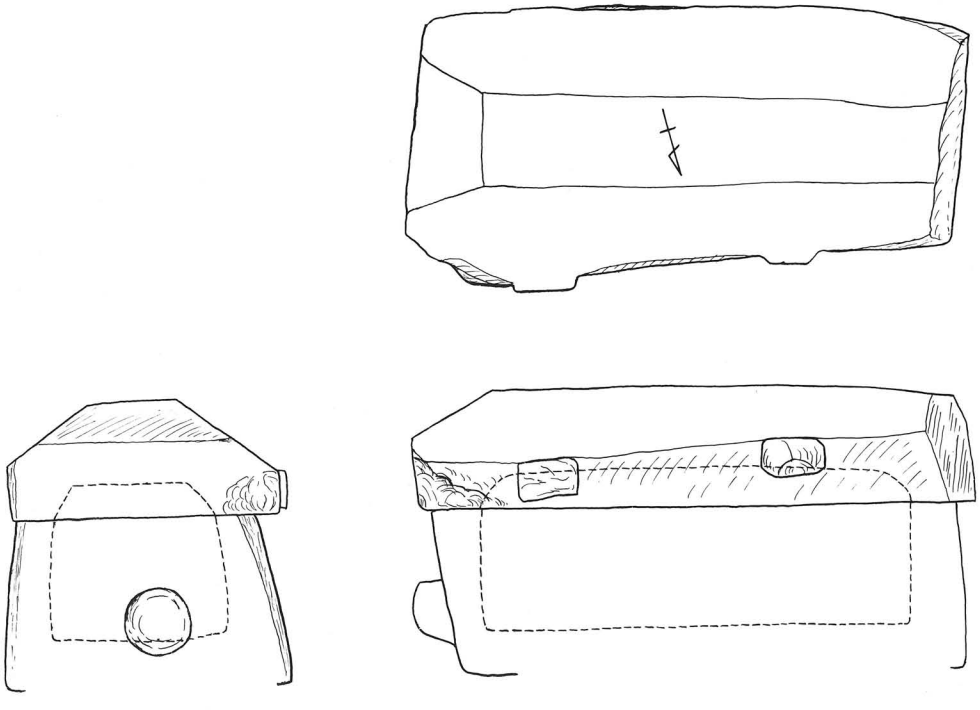


0 1 2m

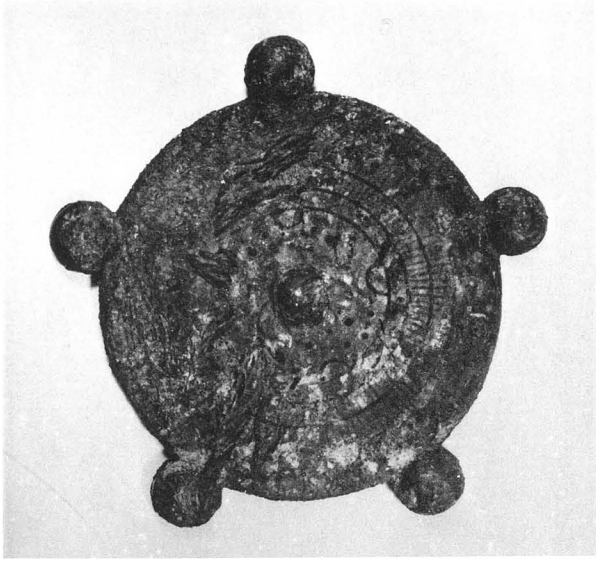
石室実測図



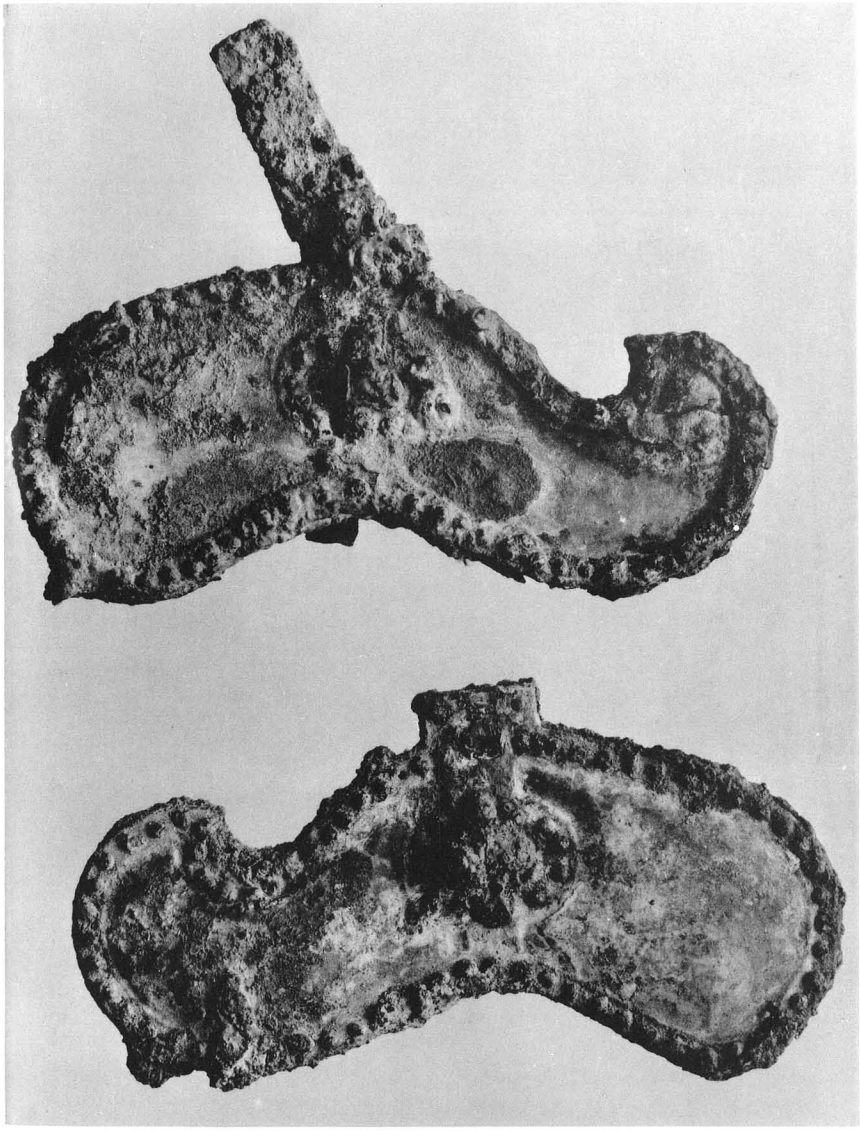
石　棺



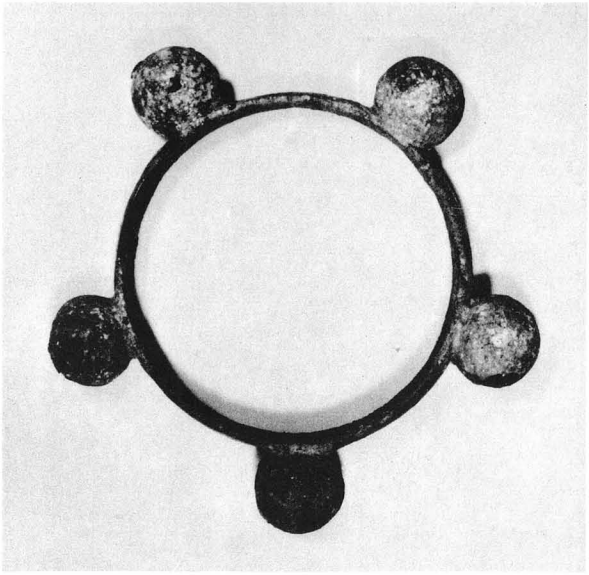
石棺実測図



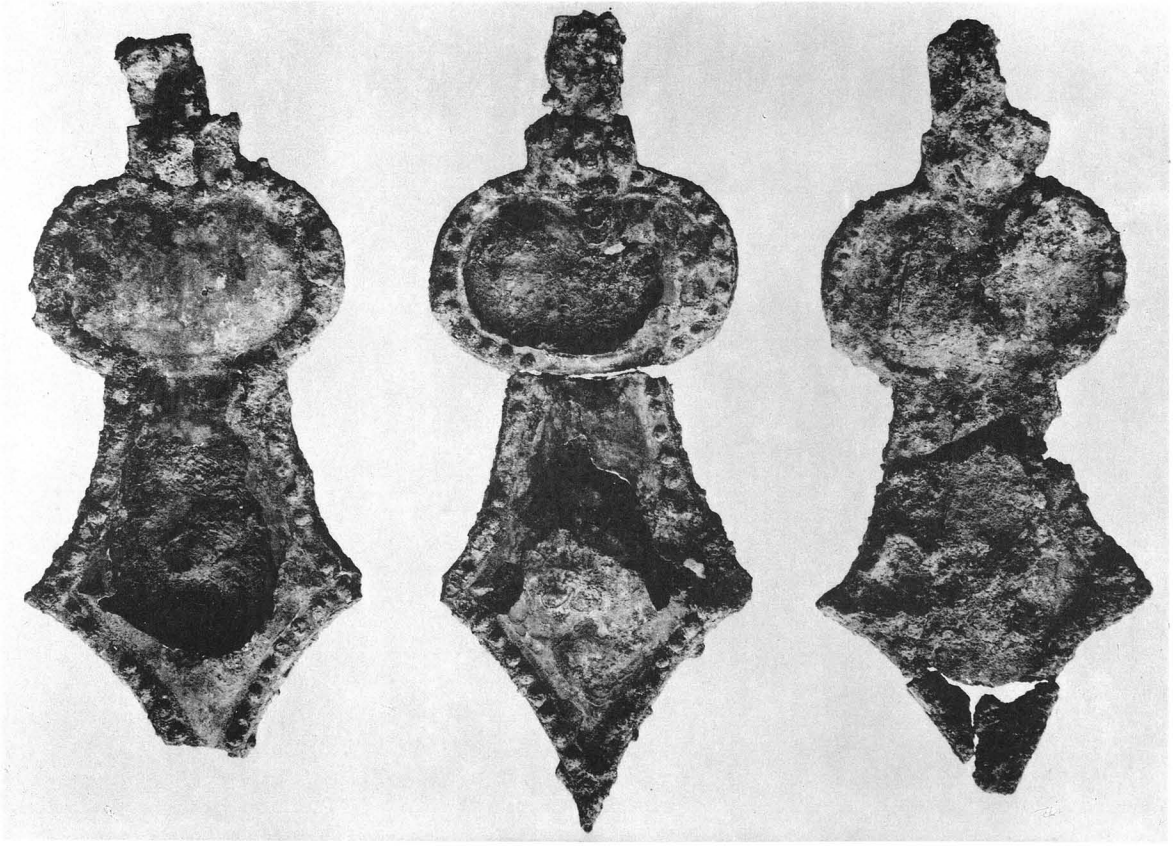
鈴　鏡



轡



鈴　釧



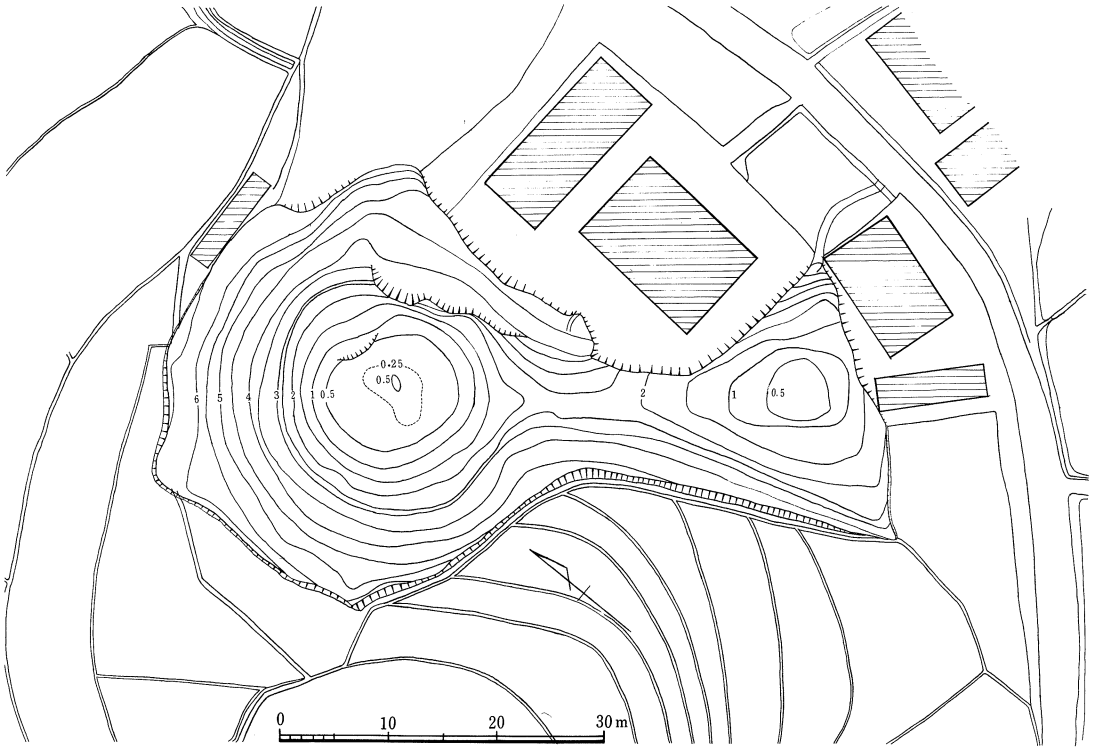
杏　葉

全　景

周布（すふ）古墳

浜田市大字治和三宅
昭和一一・一二・一六　史指定

山陰本線周布駅の西南方約半キロの所にある前方後円墳である。附近の環境は、周布川によつて形成された沖積平野の西南隅に、米ガ辻山から派生する一条の支丘が台地状をなしてつき出している。周布古墳は、この台地の突端に築かれており、標高は四〇メートル、沖積平野との比高は三〇メートルばかりである。従つて、この古墳は東北方に石見第二の水田地帯を望み、西北方は眼近かに日本海を控えた景勝の地に営まれている。



墳丘実測図

墳丘は、台地の西北隅を一部切断して前方部を設け、平野に面した側に後円部をおいている。主軸は、南北線よりも三七度東にふれている。

現在、墳丘の周囲は水田と人家のために削られており、ことに東側と前方部の先端は著るしい。現存する墳丘の全長は約六六・六メートル、後円部径約三五メートルである。前方部は、くびれ部の幅一八メートル、先端はかなり開いて二四・五メートルをはかる。高さは、後円部が約五・七五メートル、前方部はそれよりもわずか二五センチほど低い。なお、残存する前方部の端から道路のある崖までの距離は一七メートルである。

次に、墳丘の後円部において、基底部より二メートルの高さで一段を造り、墳頂部には一二×一〇・五メートルの平面がみられる。このほか、墳丘の斜面には葺石を置き、また埴輪円筒も立てられたらしく、所々にその破片が散布している。

前方部が削られているので、元の数値は明確でないが、測量図によつて復元すれば次のようになる。すなわち、全長七二・四メートル、後円部の直径は変らず、前方部の長さ三七・四メートル、先端の幅は三一メートル前後と思われ、したがつて復元した前方部の端を道路のある切断部との間隔は約一〇メートルとなる。また、この道路面から上の水田面までの高さは二メートルある。したがつて、古墳築造当初は幅約一〇メートル、長さ約三一メートル以上の範囲を深さ約二メートル前後掘りくぼめて自然丘と墳域を画したと思われる。

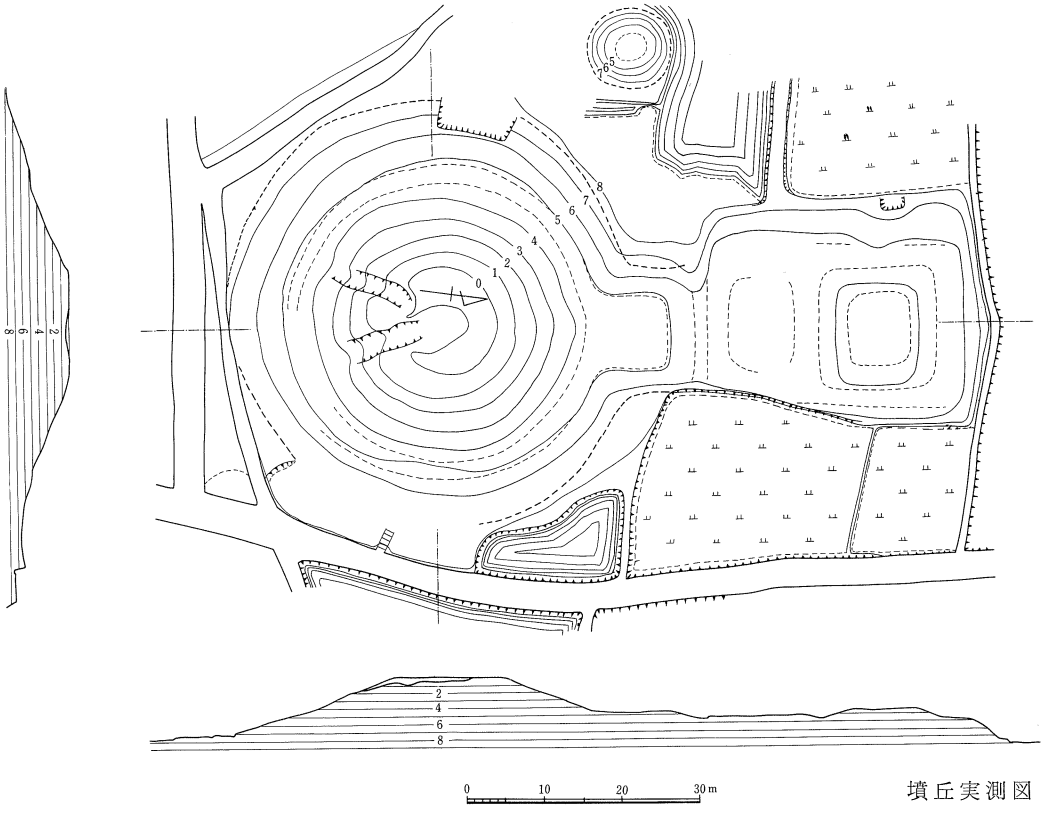
以上のように、この古墳は益田市のスクモ塚古墳とともに石見における古墳の主座を占める完備された前方後円墳である。

なお、周布古墳の東北方約一〇〇メートルの所にめんぐろ古墳跡がある。封土はすでに失われているが、もとは円墳であつたらしい。内部構造は、西向きの横穴式石室で昭和二四年二月に優秀な子持壺等の須恵器、鏡、馬具などの副葬品が発見された。これらは、現在周布小学校に保管されて、県の文化財に指定され、本図集の第一集に紹介されている。

全　景

スクモ塚古墳

益田市　久城町字須久茂塚
昭和一六・一二・一三　史指定



墳丘実測図

古墳は、山陰本線の石見津田駅と石見益田駅のほぼ中間にある標高四〇～二〇メートルの独立丘陵の西寄りに営まれている。墳丘は前方後円形を示し、前方部を北側に向けた主軸は、南北線よりも八度西に偏している。

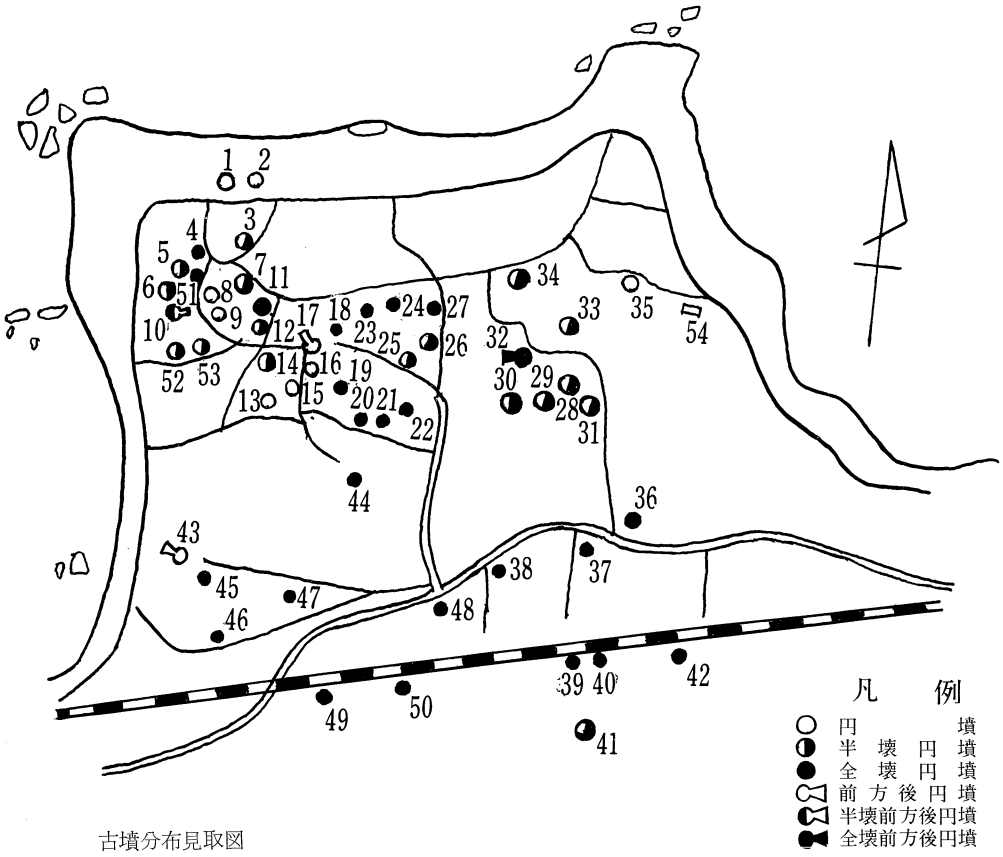
後円部の西北に約一〇メートル離れて小円墳一基がある。直径約一一メートル、高さは三メートル余りである。

主墳は、全長約一〇〇メートル、後円部の直径五四～五七メートル。前方部くびれの幅一九メートル、先端は約二九メートルである。高さは後円部が七メートル、前方部はそれよりも約四・五メートル低い。

全体に柄鏡式に似た前方後円形を示すが、後円部の頂上に径一四メトル前後の平垣面があり、斜面の中程に一段を造っている。この段は、前方部に向かって一五×一七メートルの大きさで方形に張り出しており、あたかも円墳に造り出しの附属したような形状を示している。これに対して前方部は、一辺の長さ一〇～一二メートルの方墳状を示している。従ってこの前方後円墳は、造り出しのある大円墳に方墳が隣接するがごとき感をあたえる。

外部施設として、後円部に葺石があり、埴輪円筒を二段にめぐらすもののようである。

かように本古墳は、石見では最大の規模をもち、しかも完備された前方後円墳である。



古墳分布見取図

鵜の鼻古墳群

益田市　遠田字塚穴原・鵜ノ鼻
昭和三三・八・一　県史指定

山陰本線石見津田駅の西方約一キロの所に、日本海へ半島状につき出した標高四〇メートル余りの台地がある。鵜の鼻古墳群はこの台地上と汀線に近く分布する総計五〇基余りで構成されている。そのうち、現存するもの三一基で他は破壊された。

この古墳群は、古墳の分布状態から次の四支群に分けられる。すなわち、鵜の鼻支群　一五基　（円墳のみ、現存するもの一三基）、田ノ尻支群　一五基　（円墳のみ、現存するもの七基）、山目支群　一一基（現存するもの円墳七基、前方後円墳一基）、山伏堂支群　一二基　（現存するもの円墳二基、前方後円墳一基）の各支群である。

このうち史跡に指定されているのは、鵜の鼻地区の保安林に分布する一九基の円墳と前方後円墳である。

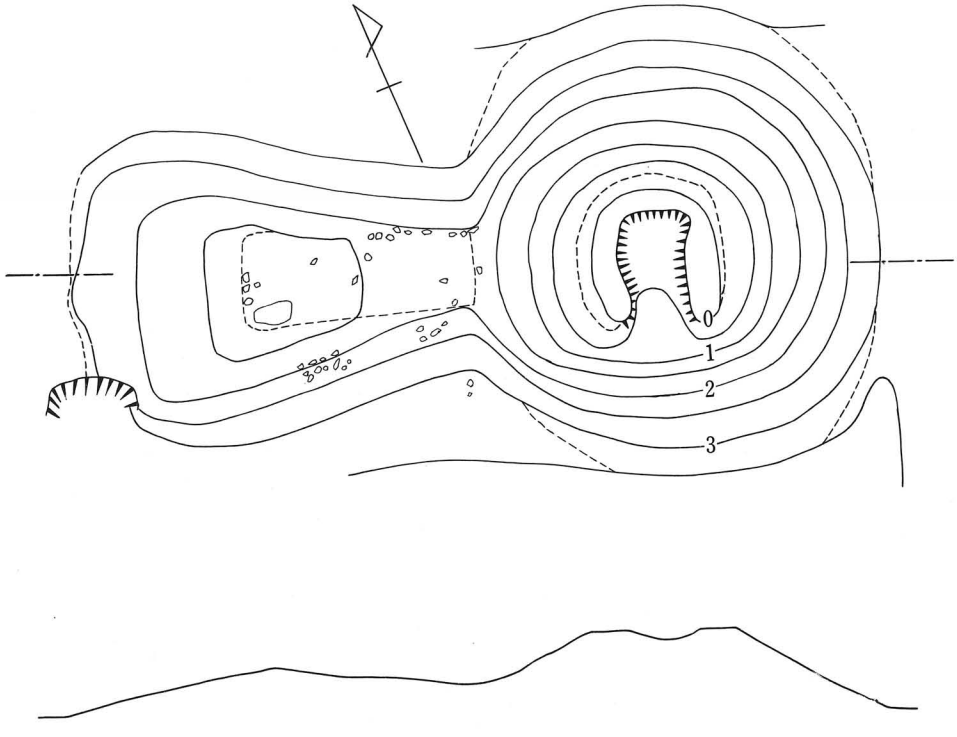
円墳は、直経一〇メートル前後、高さ二～三メートルの小規模なものが多い。内部構造は、海岸の転石と花崗岩の割石を使用した横穴式石室である。プランは、現存するものについていえば、片袖形で玄室は石材を持ち送り式に積み上げている。全長五～六メートル、幅一・五メートル、高さ二メートル前後が多い。

前方後円墳は、第四三号墳のように全長三〇メートル、後円部の高さ二・三メートルの小規模なものであり、内部構造も円墳と同じもののようである。

副葬品は、古く採集されたもののほか、大正一一年の山陰鉄道開設工事以来、近年まで多数のものが発見されたが、そのほとんどは出土古墳の判明しないものである。その主なものは、土器類、耳環・玉などの装身具類、大刀・鉄鏃の武器類のほかに滑石製紡錘車等があり、優秀な単竜環式の環頭もある。

以上、この古墳群は石見では最も規模の大きな古墳群であり、しかも中に前方後円墳を含む後期古墳群として注意されるものである。

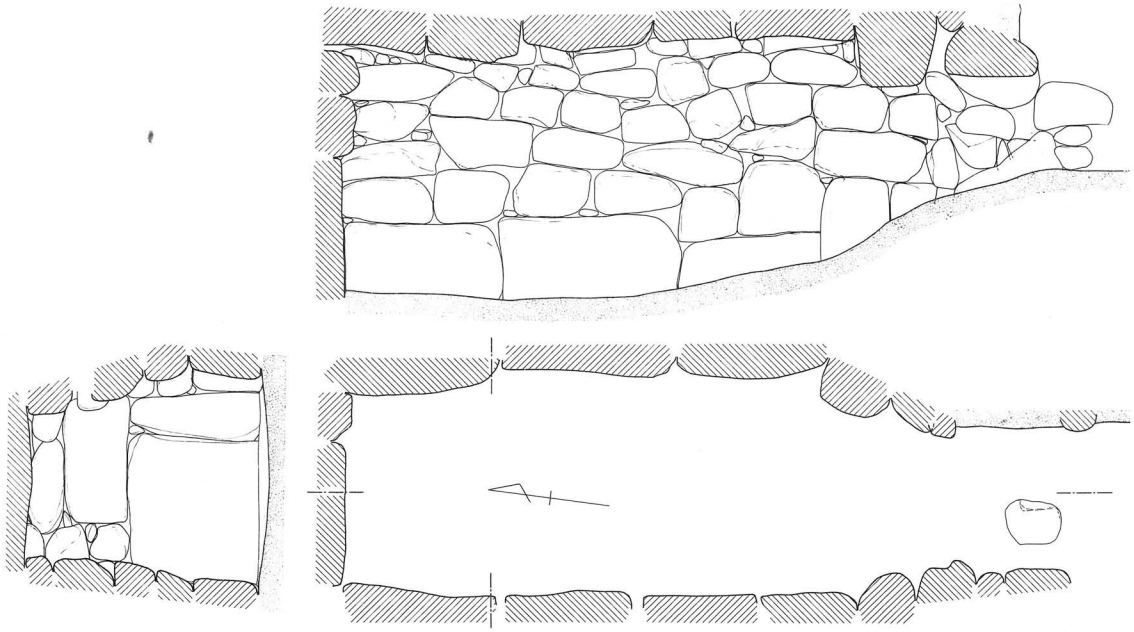
墳　丘



第四三号墳墳丘実測図

0　10m　15m

第八号墳石室内部



第八号墳石室実測図

環頭大刀柄頭

須 恵 器

主要文献

佐太講武貝塚
「講武村誌」昭和三〇。山本清「西山陰の縄文式文化」（島根大学山陰文化研究紀要一）昭和三六

サルガ鼻洞窟住居跡
佐々木謙・小林行雄「出雲国森山村崎ケ鼻洞窟及び権現山洞窟遺蹟」（考古学八の一〇）昭和一二

権現山洞窟住居跡　同前

猪目洞窟遺物包含層
大谷従二・大国一雄・池田次郎「出雲国猪目洞穴遺跡調査概報（人類学雑誌六一の一）昭和二四

造山古墳
森貞成「出雲国能義郡荒島村出土の遺物について」（考古学雑誌二九の一二）昭和一四。山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」（島根大学論集一）昭和二六

岩舟古墳
梅原末治・石倉暉栄「出雲に於ける特殊古墳　中ノ下」（考古学雑誌一一の三）大正一〇

山代二子塚　「島根県史四」大正一四。山本清　前掲文

山代方墳　山本清　前掲文

大庭鶏塚
梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」（考古学雑誌九の一）大正七。「島根県史四」

安部谷古墳（横穴）
後藤蔵四郎「安部谷の古墳」（島根県史蹟名勝天然記念物調査報告五）昭和八。山本清「横穴の形式と時期について」（島根大学論集一一）昭和三七

古天神古墳
梅原末治「出雲に於ける特殊古墳　上」（考古学雑誌九の三）大正七。高橋健自「出雲国八束郡大草古天神山古墳発掘遺物」（同九の五）大正八。山本清「須恵器より見たる出雲地方石棺式石室の時期について」（島根大学論集六）昭和三一

薄井原古墳
島根県教育委員会「薄井原古墳調査報告」昭和三七

金崎古墳群
山本清「出雲国における方形墳と前方後方墳について」

丹花庵古墳
梅原末治「出雲八束郡の一装飾古墳」（歴史と地理二六の三）昭和五。「島根県史四」。山本清　前掲文

徳連場古墳
「出雲上代玉作遺物の研究」（京都大学考古学研究報告一〇）昭和二

岩屋寺跡古墳（横穴）　同前

玉造築山古墳　同前。「島根県史四」

今市大念寺古墳
梅原末治「出雲に於ける特殊古墳　中ノ上」（考古学雑誌九の五）大正八。「島根県史四」

上塩治地蔵山古墳　梅原末治　前掲文

上塩治築山古墳　梅原末治　前掲文。「島根県史四」。「出雲市誌」昭和二六

宝塚古墳　梅原末治「丹波国南桑田郡篠村の古墳」

放れ山古墳　「出雲市誌」

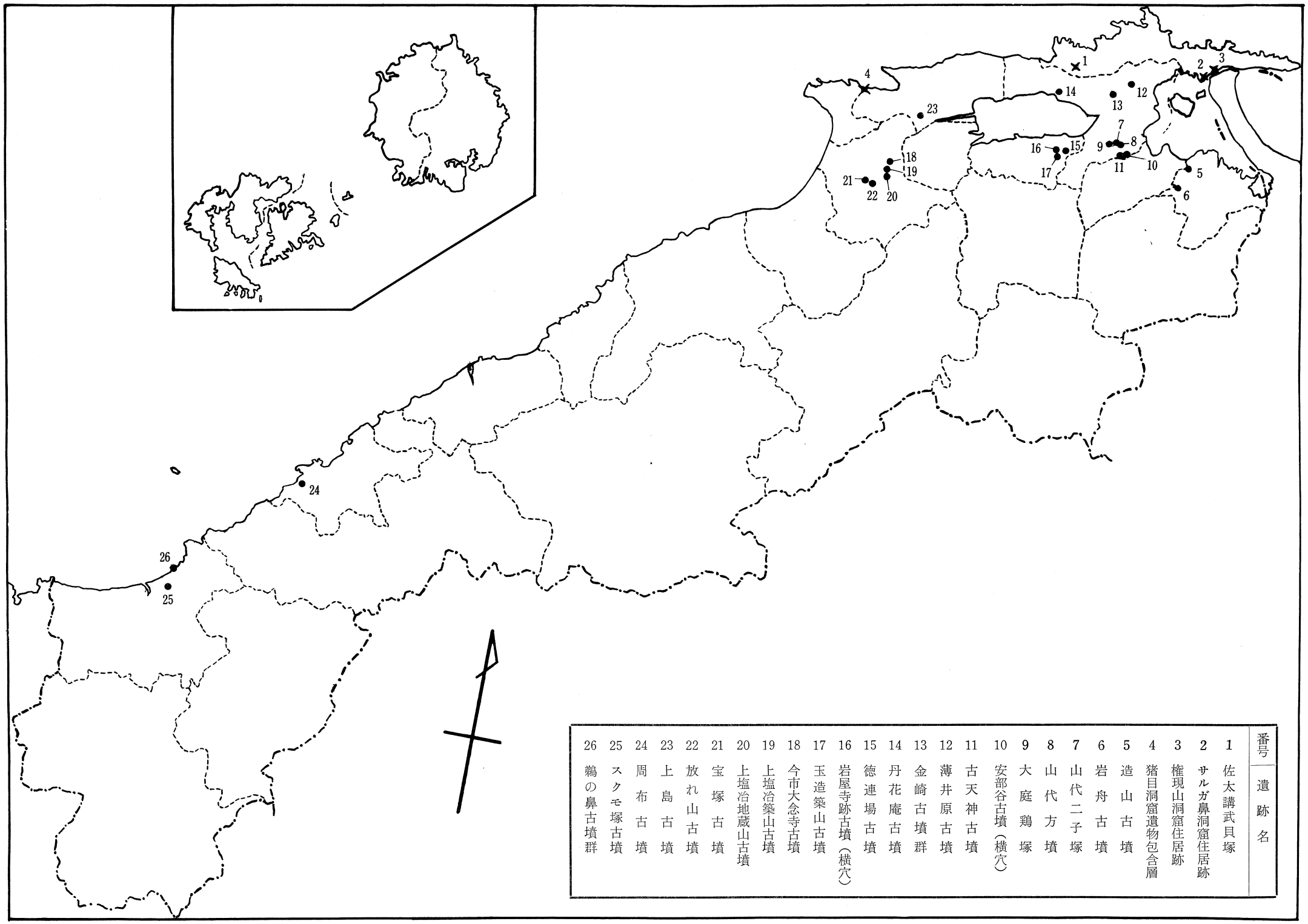
上島古墳　池田満雄「出雲上島古墳調査報告」（古代学研究一〇）昭和二九

周布古墳
後藤蔵四郎「周布村三宅の甕形墳」（島根県史蹟名勝天然記念物調査報告七）昭和一〇

スクモ塚古墳　矢富熊一郎「須玖茂塚」昭和二五

鵜ノ鼻古墳群　「島根県史四」。矢富熊一郎　前掲書

指定遺跡分布図



番号	遺跡名
1	佐太講武貝塚
2	サルガ鼻洞窟住居跡
3	権現山洞窟住居跡
4	猪目洞窟遺物包含層
5	造山古墳
6	岩舟古墳
7	山代二子塚
8	山代方墳
9	大庭鶏塚
10	安部谷古墳（横穴）
11	古天神古墳
12	薄井原古墳
13	金崎古墳群
14	丹花庵古墳
15	徳連場古墳
16	岩屋寺跡古墳（横穴）
17	玉造築山古墳
18	今市大念寺古墳
19	上塩冶築山古墳
20	上塩冶地蔵山古墳
21	宝塚古墳
22	放れ山古墳
23	上島古墳
24	周布古墳
25	スクモ塚古墳
26	鵜の鼻古墳群

印刷　昭和三十八年三月二十五日
発行　昭和三十八年三月三十一日

島根の文化財　第三集

編集発行　島根県教育委員会
印刷　京都　株式会社便利堂